ネパール国 森林土壌保全省 土壌保全流域管理局

ネパール国 地方行政強化を通じた流域管理向上 プロジェクト

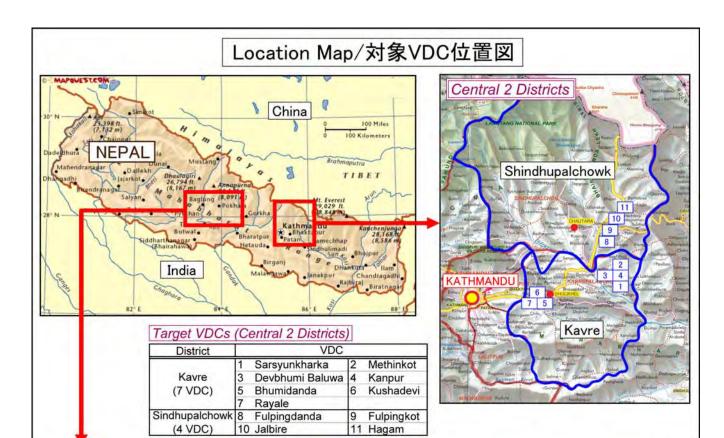
プロジェクト事業完了報告書

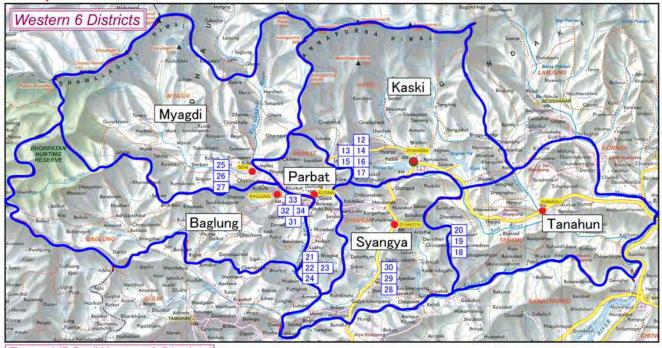
平成 26 年 7 月 (2014 年)

独立行政法人 国際協力機構(JICA)

株式会社 三祐コンサルタンツ

ネパ事 JR 14-003





Target VDCs (Western 6 Districts)

District	VDC		
Kaski (6 VDC)	12 Lwangghalel	13 Dhampus	14 Dhital
Naski (6 VDC)	15 Bhadaure Tamagi	16 Dhikurpokhari	17 Chapakot
Tanahun (3 VDC)	18 Bhimad	19 Bhanumati	20 Dhorfirdi
Parbat (4 VDC)	21 Bachha	22 Barrachaur	23 Wahakithanti
raibat (4 VDC)	24 Ranipani		
Myagdi (3 VDC)	25 Jhin	26 Patlekhet	27 Piple
Syangja (3 VDC)	28 Jagatbhanjyang	29 Kewarebhanjyang	30 Malyangkot
Baglung (4 VDC)	31 Amalachaur	32 Narayansthan	33 Bhakunde
bagining (4 VDC)	34 Paiyunpata		

Legend

District Boundary
Capital City
DSCO

目 次

対象 VDC 位置図

第1部	
はじめに:本報告書の構成	
序章	
第1章 業務の実施方法	. 2
第2章 成果、プロジェクト協力達成の方法	. 3
第3章 キャパシティ・ディベロップメント	. 4
3.1 第5年次での活動実績	. 4
3.1.1 GIS 研修(実践編)の実施	. 4
3.1.2 第3国研修の実施	. 4
3.1.3 5 地域森林局でのサビハ説明会の実施	. 5
3.1.4 全 DSCO 所長に対するサビハ・モデル説明会の開催	. 5
3.2 WCC、POWER グル—プ活動	. 6
3.2.1 WCCの自己評価概観	. 6
3.2.2 WCC 向け視察研修	. 8
3.2.3 POWER グループ向け基金運用研修兼主流化研修	11
3.2.4 CRMP 再策定	12
第4章 改訂版00の正式承認	13
第 5 章 地方行政ラインとの連携促進	14
5.1 DWC 会合の開催	14
5. 2 VDC ワークショップ	15
5. 2. 1 VDC ワークショップの目的	15
5. 2. 2 VDC ワークショップのプログラム	16
5.3 LGCDP との連携	18
5.3.1 WCC と WCF の協働による CRMP 再策定	18
5.3.2 セミナーの共催	18
5.4 終了時評価の提言を受けた MoFALD の対応	
第6章 中央レベルでの活動	19
6.1 JCC 会合の実施	19
6.2 出口戦略ワーキング・グループの活動	
6.3 PDMの改訂	21
6.4 課題別セミナー	
6.4.1 セミナー参加者とオープニング・セッション	22
6.4.2 課題別テーマのプレゼンテーション	22
6.5 第2回全国セミナー	
6.5.1 第1部「ポリシーレベル会合」	24
6. 5. 2 第 2 部「現場レベルワークショップ」	27

6.6	SMES2 プロジェクトによるプログラム評価30
第7章	終了時評価調査団の受け入れ31
7. 1	終了時評価の目的、評価結果31
7. 2	終了時評価の提言、提言を受けてのフォローアップ状況32
	図表一覧
EVI 2 1	四次 夏 自己評価スコアの例(Dhorphirdi、Tanahun 郡)
	自己計画スコナの例(billor bill rut 、 railaliul
	郡ごとの3年間のスコアの変遷
凶 3. 3	師ことの 5 年间のヘコナの変達
	第 5 年次での月次活動実績 2
	インセプション・レポートに準じた活動実績
	全 DSCO 所長対象のサビハ・モデル説明会プログラム
	NCC 向け視察研修の日程、参加者人数
	見察研修で訪問した場所・活動の一覧10
	POWER 向け研修プログラム11
	DWC 会合の実施日と参加者数14
-	/DC レベル交流ワークショップの実施日と参加者数17
	出口戦略 WG のこれまでの討議内容
表 7.1	5 項目評価結果
第2部	
第2部 第1章	はじめに1
	はじめに
第1章	
第1章 1.1	プロジェクトの背景1
第1章 1.1 1.2	プロジェクトの背景
第 1 章 1. 1 1. 2 1. 3	プロジェクトの背景
第 1 章 1. 1 1. 2 1. 3 1. 4	プロジェクトの背景 プロジェクトの目的 全体工程 対象地域 実施体制 プロジェクトの実施概念とアプローチ
第 1 章 1. 1 1. 2 1. 3 1. 4 1. 5	プロジェクトの背景 1 プロジェクトの目的 1 全体工程 2 対象地域 2 実施体制 2
第 1 章 1.1 1.2 1.3 1.4 1.5 第 2 章	プロジェクトの背景 プロジェクトの目的 全体工程 対象地域 実施体制 プロジェクトの実施概念とアプローチ サビハ・モデルとは プロジェクトにおける地方行政(ガバナンス)
第 1 章 1.1 1.2 1.3 1.4 1.5 第 2 章 2.1	プロジェクトの背景 プロジェクトの目的 全体工程 対象地域 実施体制 プロジェクトの実施概念とアプローチ サビハ・モデルとは
第 1 章 1.1 1.2 1.3 1.4 1.5 第 2 章 2.1 2.2	プロジェクトの背景 プロジェクトの目的 全体工程 対象地域 実施体制 プロジェクトの実施概念とアプローチ サビハ・モデルとは プロジェクトにおける地方行政(ガバナンス) 連携と協働 PDM の変遷
第 1章 1.1 1.2 1.3 1.4 1.5 第 2章 2.1 2.2 2.3	プロジェクトの背景 プロジェクトの目的 全体工程 対象地域 実施体制 プロジェクトの実施概念とアプローチ サビハ・モデルとは プロジェクトにおける地方行政(ガバナンス) 連携と協働 PDM の変遷 PDM Ver. 1. 8
第 1.1 1.2 1.3 1.4 1.5 第 2.1 2.2 2.3 第 3	プロジェクトの背景 プロジェクトの目的 全体工程 対象地域 実施体制 プロジェクトの実施概念とアプローチ サビハ・モデルとは プロジェクトにおける地方行政(ガバナンス) 連携と協働 PDM の変遷 PDM Ver. 1. 8 PDM Ver. 2. 0
第 1.1 1.2 1.3 1.4 1.5 第 2.1 2.2 2.3 第 3.1	プロジェクトの背景 プロジェクトの目的 全体工程 対象地域 実施体制 プロジェクトの実施概念とアプローチ サビハ・モデルとは プロジェクトにおける地方行政(ガバナンス) 連携と協働 PDM の変遷 PDM Ver. 1. 8
第 1.1 1.2 1.3 1.4 1.5 第 2.1 2.2 2.3 第 3.1 3.2	プロジェクトの背景 プロジェクトの目的 全体工程 対象地域 実施体制 プロジェクトの実施概念とアプローチ サビハ・モデルとは プロジェクトにおける地方行政(ガバナンス) 連携と協働 PDM の変遷 PDM Ver. 1. 8 PDM Ver. 2. 0 DSCWM/DSCO 職員のキャパシティ・ディベロップメント 研修で目指したもの
第 1.1 1.2 1.3 1.4 1.5 章 2.1 2 2.3 章 3.1 2 章 4	プロジェクトの背景 プロジェクトの目的 全体工程 対象地域 実施体制 プロジェクトの実施概念とアプローチ サビハ・モデルとは プロジェクトにおける地方行政(ガバナンス) 連携と協働 PDM の変遷 PDM Ver. 1. 8 PDM Ver. 2. 0 DSCWM/DSCO 職員のキャパシティ・ディベロップメント 研修で目指したもの 研修の成果
第 1.1 1.2 1.3 1.4 1.5 章 2.1 2.3 章 3.1 3.2 章 4.1	プロジェクトの背景 プロジェクトの目的 全体工程 対象地域 実施体制 プロジェクトの実施概念とアプローチ サビハ・モデルとは プロジェクトにおける地方行政(ガバナンス) 連携と協働 PDM の変遷 PDM Ver. 1. 8 PDM Ver. 2. 0 DSCWM/DSCO 職員のキャパシティ・ディベロップメント 研修で目指したもの

	5. 1	WCC と POWER グループの組織化 (Ward レベルワークショップ)	10
	5. 2	計画策定 (CBRMP、CRMP および AAP)	10
	5. 3	サブ・プロジェクトの実施	11
	5. 4	POWER グループ活動の実施	12
	5. 5	CRMP 再策定	14
	5. 6	WCC の自己評価	14
	5. 7	POWER グループの基金運用研修兼主流化研修	16
	5. 8	WCC 向け視察研修	16
第	6章	PWMLGP における地方行政	17
	6. 1	地方行政/ガバナンスに係る研修の実施	17
	6. 2	VDC レベルワークショップ	18
	6. 3	サブ・プロジェクト実施にかかる連携の達成度	
	6. 4	POWER グループ活動にかかる連携の達成度	
	6. 5	DWC 会合	
	6. 6	LGCDP との連携	
	6. 7	他機関との連携	
第	7章	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
.,	7. 1	サビハ・モデルの内部化	
	7. 2	複製活動実態調査	
	7. 3	In-depth 調査	
	7. 4	出口戦略 WG	
	7. 5	OG	
第	8章	プロジェクト運営	
-,-	8. 1	JCC 会合	
	8. 2	中間レビューと終了時評価	
	8. 3	広報活動	
第	9章	投入実績	
-,-	9. 1	日本側投入	
	9. 2	ネパール側投入	
第	10 章	プロジェクト運営上の工夫と教訓	
.,	10. 1	中央レベルでの情報発信・協議のための人材配置	48
		ネパール国サビハ案件経験者を中心としたプロジェクトチーム編成	
		CP を前面に出すことによるオーナーシップの醸成	
		各種活動への関係者の巻き込み方の柔軟な対応	
第		提言	
-11-		プロジェクトの成果の類似 JICA 案件への活用	
		内戦・紛争影響国での支援開始のタイミング	
		国家プロジェクトと個別プロジェクトの位置づけについて	
		雨期など季節的な要素の考慮が必要な活動がある場合の契約時期の配慮	
		プロジェクト終了後も政府側が利活用可能な自力で活動継続するための資料づくし	

11.6 CP が異動しても質の担保が可能なプロジェクト・ガイドラインの作成・運用	51
11.7 プロジェクト終了後の軟着陸を可能にする活動デザイン	51
図表一覧	
図 1.1 プロジェクトの実施体制	2
図 5.1 サビハ・モデル実施に係るフローチャート	10
図 5.2 自己評価スコアの例(Dhorphirdi、Tanahun 郡)	15
図 5.3 郡ごとの 3 年間のスコアの変遷	15
図 7.1 複製活動実態調査と In-depth 調査のアウトライン	28
図 7.2 In-depth 調査で実施した 25 サンプルの WCC/POWER の自己評価結果(平均)	31
表 2.1 サビハ・モデルの歴史	3
表 4.1 DSCO/DSCO-tech 向け研修の実績	. 8
表 4.2 第3国・本邦研修の実績	8
表 5.1 年次ごとのサブ・プロジェクトの件数	12
表 5. 2 年次ごとの POWER グループ活動の件数	13
表 6.1 サブ・プロジェクトの連携数	19
表 6.2 サブ・プロジェクトの連携実施機関の内訳	19
表 6.3 2010 年度から 2012 年度の VDC 予算の変遷と 2012 年度の前年比減額の割合	20
表 6. 4 POWER グループ活動の連携数	20
表 6.5 POWER グループ活動への連携実施機関の内訳	21
表 6.6 POWER グループ連携を達成した VDC 数と Ward 数	21
表 6.7 DWC 会合開催日	22
表 6.8 Passbook の配布数	26
表 7.1 複製活動の調査結果(PWMLGP との対比)	29
表 7. 2 In-depth 調査を実施した WCC	30
表 7.3 0G の実施プロセスにおける課題	32
表 7.4 出口戦略 WG のこれまでの討議内容	33
表 8.1 JCC の開催日程と主な議題	36
表 9.1 日本人専門家の投入	41
表 9.2 日本人専門家の派遣実績	41
表 9.3 日本人専門家の派遣内容の内訳	42
表 9. 4 日本側現地業務費負担実績	44
表 9.5 投入された機材	44
表 9.6 MoFSC、MoFALD、DSCWM 職員	45
表 9.7 プロジェクト対象郡の DSCO	46
表 9.8 プロジェクト対象郡の DSCO-tech	47

ANNEX 一覧

ANNEX-1 Revised OG	A-1
(1) Nepali Version	A-1
(2) English Version	
ANNEX-2 Letter from MoFALD to LDO	
ANNEX-3 Minutes of JCC Meeting	
(1) Minutes of 1 st JCC Meeting	A-140
(2) Minutes of 2 nd JCC Meeting	
(3) Minutes of 3 rd JCC Meeting	A-142
(4) Minutes of 4 th JCC Meeting	
(5) Minutes of 5 th JCC Meeting	
(6) Minutes of 6 th JCC Meeting	
(7) Minutes of 7 th JCC Meeting	A-146
(8) Minutes of 8 th JCC Meeting	
ANNEX-4 Exit Strategy	A-148
ANNEX-5 PDM of the Project	A-152
(1) PDM Version 0	A-152
(2) PDM Version 1.8	A-154
(3) PDM Version 2.0	A-156
ANNEX-6 Activities Implemented during the Project Period	A-158
(1) Activities Implemented in the 1 st Year	
(2) Activities Implemented in the 2 nd Year	A-159
(3) Activities Implemented in the 3 rd Year	
(4) Activities Implemented in the 4 th Year	A-161
(5) Activities Implemented in the 5 th Year	A-162
ANNEX-7 List of Collaboration of WCC and POWER group during the Proj	ect PeriodA-163
(1) List of Collaboration for WCC in the 2 nd year (2010/2011)	A-163
(2) List of Collaboration for POWER in the 2 nd year (2010/2011)	A-167
(3) List of Collaboration for WCC in the 3 rd year (2011/2012)	A-168
(4) List of Collaboration for POWER in the 3 rd year (2011/2012)	A-173
(5) List of Collaboration for WCC in the 4 th year (2012/2013)	A-177
(6) List of Collaboration for POWER in the 4 th year (2012/2013)	A-180
ANNEX-8 List of Trainings	

略語一覧表

Acronyms	English Terms	
AAP	Annual Action Plan	
ADB	Asia Development Bank	
ASCO	Assistant Soil Conservation Officer	
CBRMP	Community Based Resource Management Prospect	
CAC	Citizens Awareness Center	
CDFWCP	Community Development and Forest/Watershed Conservation Project	
CDO	Chief District Officer	
CEAPRED	Center for Environmental and Agricultural Policy Research, Extension and Development	
CFUG	Community Forest Users' Group	
CPs	Counterparts	
CRMP	Community Resource Management Plan	
CRFD	Central Regional Forestry Directorate	
DADO	District Agriculture Development Office	
DDC	District Agriculture Development Office District Development Committee	
DDG	Deputy Director General	
DFO	District Forest Office / Officer	
DoF	Department of Forests	
DSCO	District Soil Conservation Office / District Soil Conservation Officer	
DSCO-tech	DSCO Technical Staff	
DSCWM	Department of Soil Conservation and Watershed Management	
DWC	District Working Committee	
DWDO	District Women Development Office	
DWSSO	District Water Supply and Sanitation Office	
ESWG	Exit Strategy Working Group	
GIZ	German Development Cooperation	
GeMSIP	Gender Mainstreaming and Social Inclusion Project	
GoJ	Government of Japan	
GoN	Government of Nepal	
IDE	International Development Enterprises	
IGA	Income Generation Activity	
IUCN	International Union for Conservation of Nature	
JICA	Japan International Cooperation Agency	
JCC	Joint Coordination Committee	
LDO	Local Development Officer	
LFP	Livelihoods and Forestry Programme	
LGCDP	Local Governance and Community Development Program	
MEDEP	Micro-Enterprise Development Program	
MoFSC	Ministry of Forest and Soil Conservation	
MoLD	Ministry of Local Development	
MTR	Mid Term Review	
M&E	Monitoring and Evaluation	
NPC	National Planning Commission	
NRS	Nepali Rupees	
OG	Operational Guideline	
OJT	On the Job Training	
O&M	Operation and Maintenance	
PDM	Project Design Matrix	
POWER	Poor, Occupational caste, and Women's Empowerment for Resource Management	
PWMLGP	Participatory Watershed Management and Local Governance Project	
RD	Record of Discussions	
RECOFTC	The Regional Community Forestry Training Center for Asia and the Pacific	
REDD	Reduction of Emission from Deforestation adn forest Degradation	
SABIHAA	Samudayik Bikas Tatha Hariyali Ayojana	
SADII IAA	Samuuayik Dikas Tatta Hattyali Ayujatta	

	(Community Development and Forest/Watershed Conservation Project)	
SISM	Support for Improvement of Primary School Management Project	
SMES	Project on Strengthening the Monitoring and Evaluation System in Nepal	
SP	Sub-project	
UG	Users' Group	
UNFPA	United Nations Population Fund	
VDC	Village Development Committee	
WCC	Ward Coordination Committee	
WCF	Ward Citizen Forum	
WDO	Women Development Office	

第 1 部

はじめに:本報告書の構成

本プロジェクト事業完了報告書は、第 5 年次のプロジェクト活動を詳述した第 1 部と 5 年次の活動を含む、プロジェクト開始からの全業務を総括した第 2 部からなる 2 部構成となっている。次頁から始まる第 1 部では、第 1 章で業務の実施方法、第 2 章で成果、プロジェクト協力達成の方法、第 3 章でキャパシディ・ディベロップメント、第 4 章で改訂版オペレーショナル・ガイドライン(OG)の正式承認、第 5 章で地方行政ラインとの連携促進、第 6 章で中央レベルでの活動、第 7 章で終了時評価調査団の受け入れ、について詳述している。

第2部ではプロジェクトの背景、目的、全体行程、対象地域、実施体制などプロジェクト概要から始まり、第2章でプロジェクト実施概念とアプローチ、第3章でPDMの変遷、第4章でDSCWM/DSCO技術者のキャパシティ・ディベロップメント、第5章で住民のキャパシティ・ディベロップメント、第6章でPWMLGPにおける地方行政、第7章で複製活動/サビハ・モデルの内部化支援、第8章でプロジェクト運営、第9章で投入実績、第10章でプロジェクト運営上の工夫と教訓、そして第11章で提言を述べている。

序章

プロジェクトの第5年次の現地業務は2013年9月7日から2014年7月12日の間に実施された。 第4年次までに全306 WCC 及び306 POWER グループにおいて3サイクルのサブ・プロジェクト活動を終えており、第5年次はWCCやPOWER グループを対象とした視察研修、自己評価、POWER グループに対する基金運用研修等を通し、住民のキャパシティ・ディベロップメントを行った。

また、MoFSC 内におけるサビハ・モデルについての広報活動促進として、MoFSC がネパール全 土の 5 地域森林局会合を行った際に、プロジェクトやサビハ・モデルについての説明を行った他、 プロジェクト対象郡以外の DSCO 所長に対するサビハ・モデルの説明会を実施した。

2012 年 6 月に組織化された出口戦略ワーキング・グループ (WG) により、プロジェクトの出口 戦略が討議されてきたが、2014 年 2 月に「サビハ・モデルの内部化戦略」として最終化及び承認されており、ネパール政府の来年度サビハ予算は 9,000 万ルピーと、今年度の 6,000 万ルピーから 50% 増加することが見込まれている。今後より一層サビハ・モデルが内部化されていくことが期待される。

2014年4月にはプロジェクトに対する終了時評価が実施され、2009年以降 DSCWM と協調して活動を行ってきたサビハの歴史が高く評価され、当プロジェクトにおける期待する成果も蓄積されており、当初の目的を達成できたと判断された。

2013 年 12 月には課題別セミナーを行い、参加型アプローチ、地方行政、ジェンダーと社会的包摂というテーマで、プロジェクトの活動を広く援助関係者に周知させる機会を設けたが、2014 年 5 月の第 2 回全国セミナーにおいても、プロジェクトの過去 5 年間の活動の成果をプロジェクト関係者のみならず、NGO や他ドナー等と広く共有する活動を行った。

さらにプロジェクトの終盤においては、VDC レベル・ワークショップを各 VDC において実施し、5年間の成果の共有後、WCC や POWER グループが活動を継続していく上での支援を関係者に要請したが、DWC 会合の場においては、議長の DDC(District Development Committee) の LDO(Local

Development Officer)からも VDC 事務長を中心に支援を継続するよう促す場面が見られた。

第1章 業務の実施方法

第5年次は2013年9月7日から2014年7月12日(カトマンズ離任)が現地業務期間である。 第5年次における月次の活動実績を以下に整理した。

表 1.1 第 5 年次での月次活動実績

月次	主な活動実績	
2013年9月	・ 日本人専門家不在中の現状把握	
(9月7日着任)	・ ネパール側とのプロジェクト5年次実施に関する打合せ	
	264WCC 対象の視察研修実施開始	
	・ 第6回 JCC 会合 (9月24日)	
2013年10月	・ RECOFTC ポリシーレベル・ワークショップ実施(10 月 6-10 日:JICA 本部予算)	
	・ 8 郡での District Working Committee(DWC)実施促進	
	・ 264WCC での CRMP 再策定開始	
	・ SATOYAMA 本邦研修 JICA 北陸(金沢市)	
	・ DSCO-techs 向け GIS アドバンス・コース実施	
10月11日から11月	月5日の間はダサイン、ティハール祭(政府公休日)となり、特に活動実績は無い。	
また 11 月下旬には	国政選挙に伴い、CP が選挙管理活動に動員されたため、活動はほぼ休止していた。	
2013年11月	・ サビハ活動の広報セミナー実施(5地域にて)	
2013年12月	・ 課題別セミナー開催(ジェンダー&社会的包摂、参加型評価、地方行政連携)	
2014年1月	・ POWER 主流化ワークショップ開催(各郡単位)	
	・ POWER 基金運用研修実施(各郡単位)	
2014年2月	・ 進捗報告書(第5号)作成および提出	
2014年3月	・ 各 WCC での公聴会、自己評価会実施	
2014年4月	・ 第2回 DWC 会合実施促進	
	・ 終了時評価 (4月2-21日)	
	・ 第7回 JCC (終了時評価結果の承認)	
2014年5月	・ 第2回全国セミナーの開催(2部構成:5月28、30日)	
	・ 事業完了報告書の作成開始	
2014年6月	・ 第5年次会計の締め	
	第8回 JCC 会合(6月27日予定)	
2014年7月	・ 事務所の閉鎖、事業報告書の提出、精算業務他	
年次を通じて行う	・ 出口戦略 WG による最終化	
活動	・ 他プロジェクト、他ドナーへの広報と情報提供	
	・ 0G の改訂と最終化、視覚教材、ビデオ・ドキュメンタリーの作成	
	・ 複製活動に対する OJT 的支援	

第2章 成果、プロジェクト協力達成の方法 ■

2009 年 12 月の JCC で承認されたインセプション・レポート(確定版)の「活動番号」に準じて活動概要を以下に整理する。

表 2.1 インセプション・レポートに準じた活動実績

No.		活動実績(第5年次)
104	業務計画書(第 5 年次)の提出 	第5年次の業務計画案については、第4年次終了時にネパール側、JICA とも合意している。
105	住民参加型流域管理事業現状の	住民参加型流域管理事業現状の把握・レビューについては第1年次に実
	把握・レビュー	施済みである。ベースラインのモニタリングとフォローに関しては、第
		1年次でDSWCM/DSCO職員の技術レベルのベースラインを調査しており、
106	ベースラインのモニタリングと 	その後の研修実施、OJT活動を通じてモニタリングを継続的に行ってい
		る。 DCOWN の辛ウナ映ナミ **** 0 ケケ し 11 へ DCOO + し 1 - *** 1 - CIC TT ** ナロ
107	参加型流域管理技術研修・OJT の実施	DSCWM の意向を踏まえ、第 2 年次より全 DSCO-tech に対し GIS 研修を実施した。その後、3-5 年次を通じて GIS チーム対象に研修を実施した。
100	既存計画の検証	第1年次、第2年次を通じて、現状のDSCWMの運営方針やDSCOでの活
108	20013 11 12 10 10 10 10	動状況を検証した。
109	参加型流域管理事業の経験等を	第5年次では、全国セミナー用ブックレットおよび業務完了報告書とし
	取り纏める	て経験・教訓の取り纏めを行った。
110	参加型流域管理事業の広報(プ	メールでの短信 (日本語)配信、WEB サイト、TV 放送、ラジオ広報、MoFSC
	ロジェクト・ホームページアッ ポニュナ ク +\\	広報誌への連載等を実施した。地域会合や郡レベルの集会の機会を捉え
	プデートを含む) WCC 状況のモニタリング	て、プロジェクト事業の広報に努めた。 WCC の状況については、モチベーターを通じ、また DSCO 月例会議の場
111		を通じて継続的にモニタリングしている。その他、WCC 自身による自己
		評価や公聴会の開催を通じてプロジェクトの透明性を確保した。
	VDC 及び DDC に対する事業承認	8 郡で開催した DWC 会合において、WCC と POWER の活動について DDC と
112	とモニタリング実施の働きかけ	る都で開催した DMC 云音において、MCC と POWER の活動に Jいて DDC と 各省庁郡事務所による合同モニタリング実施の働きかけを行った。
113	普及チームの参加型流域管理事	これまで同様に、普及チームは DSCO、DSCO-tech が行う月例会議や研修
113	業監督・指導能力開発(技術研	に参画した際、またサブ・プロジェクトの工事中や完工後に現地視察に
	修)	訪れた際に、OJT を基本に技術指導を行った。
114	モニタリングとフォロー	DSCWMでは現場での活動モニタリングにGISを活用したい意向を有して
		いるため、GIS研修を行い、将来のモニタリング手法の構築の基礎を固
	发展环境 / 第二 只 环境 \ <i>大</i> 温左	めた。
115	海外研修(第三国研修)を過年 次と同様に行う	第5年次においては、昨年同様に JICA 本部地球環境部の連携事業の一環としてタイ国 RECOFTC で国際交流セミナー形式で研修を行った。
116	サブ・プロジェクトへの資金支	プロジェクトでは WCC の 3 サイクルのサブ・プロジェクト支援を終え、
116	援の実施	第5年次ではWCCがVDC予算を獲得するための各種支援を行った。
117	地方開発交付金利用体制構築の	プロジェクト終了後も DSCO および WCC が VDC 予算を獲得することを目
	修正・完成	的に OG を改訂した。その改訂 OG では、ネパール政府の地方交付金の申
	77	請・執行手順に準拠した方法を詳述している。
118	郡レベル JCC を開催	各郡において DWC 会合の名称で 2 回実施した。
119	プロジェクト事業進捗報告書 (第5号)の作成	同報告書を作成し、2014 年 1 月に提出した。
120	終了時評価実施に係る支援	プロジェクトで自己評価表を作成し、提出した。終了時評価調査は2014
	+ W-1 16	年4月2-21日に亘って実施された。
121	事業計画の修正	終了時評価調査の結果、事業計画を修正するレベルの提言は無く、予定 通りの活動を進めることとなった。
122	第 5 年次の事業成果のモニタリング・評価	進捗報告書、自己評価表、DWC 会合、JCC などでモニタリングを行った。
123	業務完了報告書(第5年次)の 作成	同報告書を作成し、2014年7月末に提出した。
124	JCC を開催	2014年7月3日に、プロジェクト最後の第8回 JCC を開催した。
	1	

125	普及ガイドラインの作成	改訂 OG は 2014 年 2 月時点で最終化され、印刷の上、DSCWM/DSCO 等関係先に配布された。
126	プロジェクトを通じて得られた 経験等の取り纏め	第5年次では、全国セミナー用ブックレットおよび業務完了報告書として経験・教訓の取り纏めを行った。
127	プロジェクト事業完了報告書の 作成	同報告書を作成し、2014年7月末に提出した。
128	プロジェクト活動総括WS、報告 書案の修正、提出、承認	2014 年 7 月 3 日に、プロジェクト最後の第 8 回 JCC を開催し、報告書の承認を得た。

第3章 キャパシティ・ディベロップメント ■

3.1 第5年次での活動実績

3.1.1 GIS 研修(実践編)の実施

プロジェクトでは、第3、4年次に引き続いて、2013年10月20-29日の10日間にわたりGIS研修(実践編)を実施し、参加者は11名であった。これまでの研修で、参加者はGISの基礎から始め、郡レベル、VDCレベルの土地利用図と簡易型ハザード・マップ(土砂崩れ危険地域図)の作成を習得した。前回の研修では各参加者が勤務する郡を対象に作業を行ったが、今回では勤務対象外郡の簡易型ハザード・マップを作成することでDSCWMの22郡の簡易型ハザード・マップが整備されたこととなる。



GIS 研修の様子

また、日本政府の「森林保全」無償機材援助による GIS 関連機材が納品された。DSCWM では本館ビルディング 3 階に、これらの機材を設置した「GIS ルーム」を整備し、土壌保全関連の GIS データの収集と整理、分析を行う準備を進めている。

3.1.2 第3国研修の実施

(1) RECOFTC 研修

第 5 年次では、2013 年 10 月 6-11 日の 6 日間 に亘って、JICA 本部地球環境部とタイ国 Regional Community Forestry Training Center (RECOFTC)との業務提携による一連の活動の一 環として MoFSC と MoFALD のオフィサー15 名 を対象に研修が実施された。

RECOFTC は、アジア太平洋地域での村落林業(あるいは住民林業)に関わる地域研修センターとして設立された国際機関である。現在で



RECOFTC 研修の模様

は、村落林業に限らず自然資源の持続的な利用と貧困削減などに活動の幅を広げている。

研修は移動日を含む6日間で実施された。本研修では、バンコクに拠点を置く流域管理関係者に

対して本プロジェクトの内容を説明し、意見交換を行った。セッションでは、自然資源管理とコミュニティの連携の重要性や地方行政の役割の重要性が再認識された。

またチェンマイ郊外での現地視察においては、国立公園内でのケシ栽培不法滞在者の定着支援プロジェクトを見学し、自然資源管理と農林業、エコツーリズム等の総合的なアプローチの必要性がネパールからの参加者の心を捉えたようである。

(2) 本邦 (SATOYAMA) 研修への CP 派遣

JICA 北陸が実施する SATOYAMA 研修(通称) -正式名: 持続可能な自然資源管理による生物多様性保全と地域振興 SATOYAMA イニシアティブの推進ーに、プロジェクト関係者から 4 名が選出された。 Sindhupalchowk 郡と Myagdi 郡の各 DSCO 所長、Kaski 郡と Myagdi 郡の各 LDO の 4 名である。これでプロジェクトからの参加者は 2010 年に 1 名、2011 名に 2 名、2012 年に 2 名、2013 年の 4 名の計 9 名となり、MoFSC と MoFALD において SATOYAMA コンセプトの浸透が深化すると期待される。

DSCWM は、SATOYAMA コンセプトのネパールへの適用を考えており、SATOYAMA 研修参加者に日本への留学経験者を加えたメンバーで、勉強会を定期的に行い、5月27日には DSCWM の業務に SATOYAMA コンセプトをどのように盛り込んで行くかを検討するワークショップが開催された。

3.1.3 5 地域森林局でのサビハ説明会の実施

本プロジェクトは DSCWM/DSCO 内部での評価に対して、MoFSC 全体で見た場合の知名度は、十分とは言えない。そのため、MoFSC 本省、森林局、国立公園局などへの広報の必要性が指摘されてきた。2014年1月下旬から2月中旬にかけて MoFSC が開催したネパール全土の5つの地域森林局(極西部、西部、中西部、中部、東部)のレビュー会合にて、本プロジェクトはサビハ説明の時間を得て、プロジェクトの概要、サビハ・モデルの説明を行った。同時にこれまでの報告書、改訂版オペレーショナルガイドライン(OG)(案)、記録映像などを納めた DVD 資料を延べ500名の参加者に配布した。

3.1.4 全 DSCO 所長に対するサビハ・モデル説明会の開催

プロジェクトでは当初、これまでサビハ・モデルの 実践に関わる機会の無かった、プロジェクト対象郡以 外の DSCO 所長を対象にプロジェクトの内容とサビ ハ・モデルやプロジェクトの OG に関わる説明会を実 施することを計画していた。内容検討の過程で、対象 郡以外の DSCO 所長が約 30 名、講師役を務めるプロジェクト対象郡の DSCO 所長が8 名と 40 名近くと全国で 56 名居る DSCO 所長の大部分を占めることがわかった。

そこで DSCWM と協議し、DSCWM が年に一度開催 する、年次予算編成会合時に合わせて本説明会を開催するこ



サビハ説明会の模様

ととした。56 名の全 DSCO 所長と DSCWM の関係者が合宿形式で 2 泊 3 日を過ごし、前半の 1.5 日間は予算編成会議、後半の 1.5 日間がサビハ・モデル説明会となった。内容は下表に示すとおり

である。

この説明会を DSCWM との共催で実施出来た利点は、DSCWM/DSCO 側のオーナーシップ醸成に 有益であったことと、共催によるコストダウン、特に各郡からカトマンズまでの交通費が DSCWM 側の負担となったことで、プロジェクトでは会場となったホテルの宿泊費と食事代のみの負担となり、約半分の経費で実施できた。さらに講師陣は各 DSCO 所長が務め、また出口戦略の共有、今後の予算獲得や配分などが協議され、DSCWM/DSCO 側の高いオーナーシップが発揮された。

表 3.1 全 DSCO 所長対象のサビハ・モデル説明会プログラム

Time Programme		Resource person			
Day I, 22 April 2	Day I, 22 April 2014				
14:15 - 14:30 Opening • Welcome remarks		Mr. Pem Narayan Kandel, DG, DSCWM			
	Objectives of the orientation programme	Mr. Chevan P. Guragain, DDG Dr. Koji Terakawa, CTA			
14:30 - 15:00	Scope, need and possibility of SABIHAA model integration in DSCWM and its Programmes	Mr. Pem Narayan Kandel, DG, DSCWM			
15:00 - 15:30	Historical background and development of SABIHAA model for watershed management	Dr. Prem P. Paudel, Under Secretary, DSCWM			
15:30 - 16: 30	Operational guidelines, procedures/steps of SABIHAA model implementation	Mr. Uddhaw B. Ghimire, DSCO Kaski			
16:30 - 17:00 Discussion					
Day II, 23 April 2014					
10:00 - 11:00	District level experiences of SABIHAA model implementation and its linkages with LGCDP	Mr. Megh N. Kafle, DSCO Kavre			
11:00 - 12:00	Project achievements Project VIDEO (30 min)	Dr. Koji Terakawa,CTA Mr. Rudra Neupane, PWMLGP			
12:00 - 13:00	Open discussion and feedback on SABIHAA internalization in DSCWM and its Programmes.				
13:00 - 14:00	Lunch break				
14:00 - 16:30	Continue discussion Summarization of discussion and closing Dr. Koji Terakawa, CTA Mr. Chevan P. Guragain, DDG Mr. Pem N. Kandel, DG				

3.2 WCC、POWER グル—プ活動

3.2.1 WCC の自己評価概観

プロジェクトは WCC の強み、弱み、機会を評価して自分達の役割を自覚し、結果をレーダーチャートとして可視化することにより将来のポテンシャルを発見するために、WCC による自己評価を実施してきた。

自己評価には 1) グループ・マネージメント、2) コミュニティの資源管理、3) 調整・連携、4) 地方行政、そして 5)キャパシティ・ディベロップメントの 5 項目にそれぞれ 4 つの指標を設けて点数づけが行われる。

2011年に最初の、出発点となる自己評価が実施された。2012年にはその結果には大きな前進が見られ、その傾向は 3 サイクル目となる 2013年にも引き継がれた。306の内、171のWCC (56%)で、2年目に比ベスコアが改善されていた。(残りは22のWCC (7%)が2年次と同様、113のWCC (37%)がスコアの減少)図3.1はTanahun郡のDhorfirdiの自己評価3回分をまとめたレーダーチャートであるが、全ての項目でスコアが年々改善されているのが見て取れる。

次に図 3.2 は 5 つの項目ごとに 2 回目とのスコアの比較をまとめたものである。 まず、グループ・マネージメントは、18 の VDC (53%) で 2 回目のスコアより改善が見られた。(残りの 2 VDC は変化なし、14 VDC はスコアが減少)同様にコミュニティ資源管理の項目では、20 の VDC (59%)で 2回目のスコアより改善が見られた。(残りの 14 VDC では減少)

続いて調整・連携については22の

VDC (65%、5 項目の中で 最も高い割合)で 2 回目 よりスコアが改善され た (12 VDCs では減少)。 地方行政については、20 の VDC (59%) において スコアが改善、またキャ パシティ・ディベロップ メントとエンパワーメ ントについては 21 の VDC (62%) でスコアが 改善されていた。

同様に、図 3.3 は郡ご

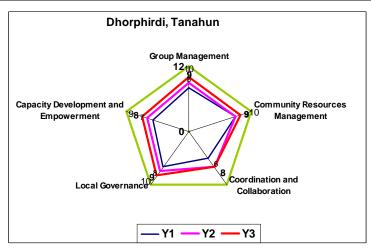


図 3.1 自己評価スコアの例 (Dhorphirdi、Tanahun 郡)

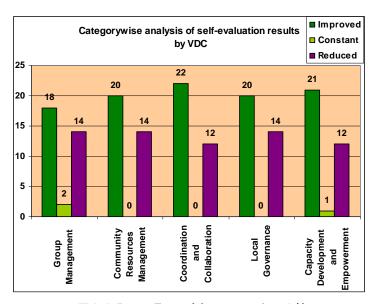


図3.25つの項目の昨年のスコアとの比較

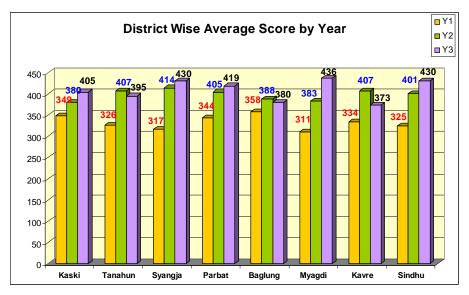


図3.3 郡ごとの3年間のスコアの変遷

とに3年間の傾向を見たものであるが、Kaski 郡、Syangja 郡、Parbat 郡、Myagdi 郡、Sindhupalchowk

郡の5つの郡では2回目よりスコアが上回った。

過去3回の評価を比べると、34 VDC のうち実に32 の VDC がスコアを上げている。(残り1VDC は変化なし、1VDC はスコアが減少)

3回目で減少した Tanahun 郡、Baglung 郡、Kavre 郡については、DSCO-tech の異動によりファシリテーションが2回目までとうまく整合できなかった可能性や、サブ・プロジェクトの支援が終了したことで WCC の月例会合の機会がやや減ったこと、さらに国政選挙による混乱などに起因すると分析している。

3回の自己評価を通して見ると、上述した通り2回目の自己評価で1回目に比べると大きなスコアの前進を見せた。プロジェクトからの支援はサブ・プロジェクトへの資金支援以外には研修、視察研修があるが、WCCが確実に組織としての能力を強化してきたことがわかる。一方でまだ全ての項目において改善の余地が見られる。そのため、DSCO-techやモチベーターによる指導の継続が重要である。VDC・郡レベルでの連携強化に向けて、定期的に月例会合を実施し、WCCやメンバーの役割を明確化すること、記録の取り方などは外部の支援なしでもWCCとDSCO-tech、モチベーターの協働により改善ができることが期待される。

第5年次においては、改訂版 OG に記載されている指標に従って、4回目となる自己評価を全ての WCC で実施した。改訂された指標は、それまでのプロジェクトの事業内容に沿ったものから、より DSCO の業務内容に沿ったものになっているため、DSCO や DSCO-tech にとっては今後複製活動地域等で活動していく上でも良い OJT の機会となったといえる。

3.2.2 WCC 向け視察研修

第5年次のWCC向けの視察研修は2013年9月から12月にかけて実施された。視察研修の目的は1)コミュニティ開発のための組織的なキャパシティを高めること、2)先進農家の活動を視察することにより、WCCメンバーがよりよい将来計画を立案できるような機会を与えること、3)家畜飼育、アグリビジネス、グループ・マネージメント等の技術的な側面のみならず、資源管理とコミュニティ開発における様々な知識・理解を高めること、等がある。なお、Parbat 郡と Baglung 郡の6つの VDCのWCCメンバーはすでに第4年次に視察研修を経験しているため、残りの28 VDCのWCCの代表が第5年次の視察研修の対象であった。

視察先は以下の4つのテーマ:1) グループ・マネージメント / 組織開発、2) 女性のエンパワーメント/ 貯蓄と貸付、3) 資源管理、4) 所得向上生活向上から選定された。視察研修は担当の DSCO-tech が中心となり、視察先の検討、視察先との連絡等を行い、モチベーターとともに視察にも同行した。

参加者は WCC から 3 名 (少なくとも POWER グループからの 1 名を含めること)、VDC 事務長、プロジェクトのモチベーター、複製活動地域担当のモチベーター、LGCDP のソーシャル・モビライザー、そして DSCO-tech である。表 3.2 に 各 VDC の視察研修の日程、参加者人数等をまとめた。上述のように参加者の所属先、人数などは決められているが、特に複製活動地域のモチベーターの配置状況などにより、VDC によっては若干の差異がある。

District	VDC	Date	Participants		
District		Date	Male	Female	Total
Myagdi	Piple	15-20 Sep, 2013	11	20	31
	Patlekhet	17-22 Sep, 2013	10	21	31
	Jhin	20-25 Sep, 2013	15	19	34
Poglung	Narayansthan	20-24 Sep, 2013	10	24	34
Baglung	Paiyunpata	20-24 Sep, 2013	17	15	32
	Malyankot	26-30 Sep, 2013	15	16	31
Syangja	Jagatbhanjyang	27 Sep1 Oct., 2013	6	26	32
	Kewarebhanjyang	27 Sep1 Oct., 2013	15	17	32
	Bhanumati	22-26 Sep, 2013	20	12	32
Tanahu	Dhorfirdi	20-24 Sep, 2013	12	20	32
	Bhimad	20-24 Sep, 2013	13	19	32
	Dhital	26-30 Sep, 2013	15	16	31
	Lwangghalel	27 Sep1 Oct., 2013	20	14	34
Kaski	Bhadauretamagi	27 Sep1 Oct., 2013	10	22	32
Naski	Dhampus	29 Sep3 Oct., 2013	11	22	33
	Chapakot	5 Oct. – 9 Oct., 2013	10	22	32
	Dhikurpokhari	27 Oct 31Oct., 2013	15	19	34
	Fulpingkot	17-21 Sep.2013	15	17	32
Sindhu	Jalbire	25-29 Oct .2013	12	20	32
Sinanu	Fulpingdanda	28 Oct1 Nov,2013	17	14	31
	Hagam	28Nov2Dec.2013	17	15	32
	Kanpur	25-30 Sep. 2013	16	16	32
	Kushadevi	26 Sep1 Oct.2013	20	12	32
	Sarsyukharka	24-29 Oct. 2013	18	13	31
Kavre	Devbhumi Baluwa	26-31 Oct, 2013	15	17	32
	Bhumidanda	27 Oct -1 Nov. 2013	15	17	32
	Rayale	29 Nov4 Dec. 2013	19	13	32
	Methinkot	8-13 Dec. 2013	18	13	31
Total Participants 407 491 898					

表 3.2 WCC 向け視察研修の日程、参加者人数

視察研修に同行した DSCO-tech やモチベーターからの報告によると、参加者たちは視察研修の間、他の WCC メンバーや集落住民にも共有するべく多くの参加者がメモを取るなどして、終始積極的に新しい取り組みを吸収する姿勢を見せており、見学地の選定も適切で講師の説明も有益だったという声が多く聞かれた。技術的な側面だけでなく、見学地での先進農家の取り組みは、外部からの支援がなくても、適切なビジョンと絶え間ない努力をすることにより、多くの事が出来ることを学ぶよい機会となった。さらに、参加者にと



Livestock Development Farm(ポカラ)の職員より家畜飼育についての説明を受ける参加者

っては、VDC 事務長や DSCO-tech とともに、普段は交流の少ない VDC 全体の 9 WCC の代表者と 交流する場が持てたことも有意義であった。

以下に視察研修中、また視察後に参加者から得られたフィードバック、取られたアクション等を DSCO-tech、モチベーターからの聞き取り等を基により具体的に見ていく。Kaski 郡の Dhital では POWER グループ基金を利用して合同で生計向上を実施していくことや、組合を設立することが決まったという。Kaski 郡 Bhadaure Tamagi でも同様に組合設立の動きを目指すことが決まった。Kaski 郡 Lwangghalel の参加者からはきのこ栽培の研修の必要性が挙げられ、DSCO が近々そのような研

修を実施することが参加者に約束された。なお、きのこ栽培については、Sindhupalchowk 郡 Jalbire ではすでに始めたという声も聞かれているほか、牧草栽培についても近々開始する話も聞かれている。Kavre郡 Kushadevi、Methinkot、Kanpurからの参加者は山羊用の飼料や畜舎の改善を行うとともに、畜産事務所と連携して、肥育や牧草種子等についての改善も行っていきたい意向を示していた。Kavre郡 Rayaleから参加していたPOWERグループメンバーは集落のPOWERグループメンバーではない女性たちに声



Milijuli Saving and Credit Cooperative (Nawalparasi 郡) のパナナ農園を視察する参加者

をかけ、組合設立に向けより大きなグループ作りをしたいと話をしていた。同じ VDC から来ていた WCC メンバーはより多くの竹、また生育が早い樹木を栽培したいため、苗木の入手について詳しい情報がほしいと担当者の連絡先を確認していた。DSCO-tech も WCC や POWER グループメンバーに、DSCO の通常業務として予算の手当が出来る可能性もあるので、必要な樹木や果樹の苗木について要望をまとめて提出するよう促していた。

VDC 事務長たちも、視察研修後は WCC や POWER グループの活動に興味が出てきたという声も聞かれているほか、LGCDP のソーシャル・モビライザーとプロジェクトのモチベーターのコミュニケーションが良くなり、VDC の計画策定や CRMP 再策定も WCF と合同で実施されるようになった。

表 3.3 で参加者が訪問した場所の一覧を整理した。第 4 年次に実施した視察研修同様、中部 2 郡、 西部 6 郡により訪問先は異なっている。

表3.3 視察研修で訪問した場所・活動の一覧

<u>収3.3 代条研修で前向した場所・冶勁の一見</u>					
Name of Site/Activitity	Location	Participants			
-Amardeep Krishi Farm	Lamachour,Kaski	From 17 target			
-Ram Hari Thapaliya's Mushroom Cultivation Farm	-Ditto-	VDCs in 5 District			
-KIDEKI	Talbesi, Kaski	(Myagdi,Baglung,			
-Bisnu Gurung's Bee Keeping	-Ditto-	Syangja,Tanahu,			
-Surya Prasad Adhikari's Agro-Forestry farm	Begnas, Kaski	Kaski,)			
-Goat Raising	Bandipur, Tanahu				
-KB Gurung's Farm	Damauli, Tahanu				
-Cow farming	Nayapul, Gorkha				
-Sagar Bee Keeping	Gaidakot Nawalparasi				
-Vijay Development Resource Center	-Ditto-				
-Milijuli Saving and Credit Cooperative	Kawasoti, Nawalparasi				
-Income Generation/Cooperative -Rewanta Bista's	Madanpokhara, Palpa				
Coffee Farming	Tansen, Palpa				
-Bhumi Jung K.C.'s Agro-Forestry Farm	Karendanda Syangja				
-ICIMOD demonstration site	Godawari, Lalitpur	From 11 target			
-Kamdhenu Cow Farm	Chyangling, Gorkha	VDCs in 2 District			
-Bandipur Goat Farm	Bandipur, Tanahun	(Sindhu and			
-Manung Nursery (K.B. Gurung's farm)	Vyas Municipality-7, Tanahun	Kavre)			
-Bandev Khanal's forage development farm	Gunadi-2, Tanahun				
-Khairenitar Women Multipurpose Cooperatives	Khairenitar, Tanahun				
-Surya Adhikari's Agro-forestry Farm	Lekhnath-10, Kaski				
-Bishnu B. Thapa's Bee Keeping Farm	Hansapur-6, Kaski				
-Kisan Dekhi Kisan Samma	Talbesi, Kaski				
-Amardeep Agri-Farm	Lamachaur, Pokhara				
-Lumle Agricultural Center	Lumle, Kaski				
-Livestock Development Farm,	Pokhara				
-Bhumijung KC's farm	Syangja				

Closing

3.2.3 POWER グループ向け基金運用研修兼主流化研修

全34VDCのPOWERグループを対象に、基金運用研修兼主流化研修を実施した。この研修は主にPOWERグループが貯蓄しているグループ基金の運用を改善するためのもので、協同組合のやり方を模倣する帳簿の付け方を学んだ。また、2日間の研修の間に、プロジェクト終了後のPOWERグループの出口戦略に関しても、VDCで活動する女性協同組合の代表や他の女性グループの代表、郡政府事務所の関係者なども招いて活発に協議した。研修部分で主に焦点を置いた内容は次の3つである。1)持続性の高い組織強化の概念を再認識する、2)帳簿管理の習得、3)協同組合の意義、仕組み、機能などの基礎知識を会得する。研修プログラムは以下の通りである。

Session: 2 Session: 3 Time/S Session:1 Session: 4 ession 11:45 AM to 13: 30 10:00 AM to 11:30 AM 14:00 PM to 15:30 15:45 PM to 17:00 /Day PM PM PM Pre-condition of Formal Opening First 2) Resource and Practice continues on **Objectives of Training** Institutional Resource Day how to keep account Mobilization **Development** 1) Institutional -group mobilization -fund and fund Development -planning Management -meaning and -internal governance -account keeping importance of -capacity and skill -practice of how to Institutional -leadership keep account Development (ID) -responsibility and -ID as WCC/POWÉR accountability -current situation of WCC/POWER Q & A Second Cooperative Cooperative..... 4) Future plan of Resource and **WCC/ POWER** Day Resource -introduction, -registration importance and types Mobilization procedure of -institutional continues of Cooperative Cooperative development of -features of scope of Cooperative **POWER** -fund mobilization and income Cooperative -consideration that -sustainability of generation -pre-conditions of POWER becomes WCC: concept of institutionalization -alternative registration as Cooperative livelihood Cooperative in local development, 3) Dimension of vision of SABIHAA Institutional model, CRMP. **Development** roles of WCC and a) as informal POWER group. institution coordination b) as a NGO between WCC/POWER and c) as a government institution VDC, self reliance and independence

表 3.4 POWER 向け研修プログラム

この研修はVDC毎に実施し、DSCOが主体的に研修の準備と運営を担った。研修講師は主にDSCO所長、DSCO-tech、DSCOの会計担当者に加え、地元の協同組合からも講師を招待した。参加したPOWERグループメンバーの中には、既に長年に亘って協同組合に所属している者、その会計を担当する者も居り、協同組合には深い知識を持っているメンバーが多数居るVDCもあった。一方、協同組合の仕組みや機能などを全く知らないPOWERグループのメンバーもいた。簿記の能力レベルも様々であった。したがって、研修に期待する内容も異なり、研修内容は参加者のレベルを見ながら適宜調整する必要があった。いずれの研修でも、貯蓄用の帳簿とローンの帳簿を正しく作成で

きるように、実践的な練習時間を設けることに配 慮した。

一部、既に協同組合の経験が豊富な POWER グループのメンバーにとっては、研修内容が物足りなかった、等の声もあったが、期待通りの研修内容であったという感想が大多数であった。

Sindhupalchowk 郡の Fulpingkot では、4 つの POWER グループが地元にある協同組合、Integrated Saving and Credit Cooperative Ltd.に所属することを決めた。その協同組合は、男性も女性もメンバーになれる組合である。一方、その VDC



Myagdi 郡 Piple で実施された POWER グループの基金運用研修兼主流化研修の様子

にはそれ以外にも Maternity Health Cooperative Ltd.という協同組合も存在し、こちらは女性のみにメンバーシップを限定した組合であり、出産時には 1,000 NRS の祝い金が出る等、女性に有利なサービスがあることが、男女共同の協同組合との違いである。まだ決定できていない残り 5 つの POWER グループは、メンバーの中で意見が分かれているそうである。この研修中に結論は出なかったが、新たに得た知識や様々な議論を元に POWER グループ自らが建設的な決断を模索しているところである。

POWER グループの出口戦略に関しては、すでにほとんどの POWER グループが既存の VDC の協同組合に所属することで POWER 活動を持続していく、と決定した VDC もある。この研修の機会に、まだどのように持続性を確保していくかを考え始めていない POWER グループに対して、それぞれの VDC の状況に鑑みて、どういう選択肢が存在するのかを提示して考える機会を提供することが目的であったが、その目的は充分果たせたと思量する。

3.2.4 CRMP 再策定

プロジェクトでは、8 郡 34VDC で 306 の WCC 及び POWER グループを組織化し、3 サイクルのサブ・プロジェクト実施支援を行ってきた。第 1 年次にサブ・プロジェクト実施を開始した Parbat 郡と Baglung 郡の42WCC については、第 4 年次中に CRMP を再策定し、残る264 WCC に対しては第 5 年次に CRMP の再策定を行った。

第 4 年次に行った CRMP 改訂時には、ほとんどのWard において WCC と WCF が協調して計画づくりを行ったが、計画策定の WCC 会合に VDC 事務長や他ドナーが参加したケースはごく限られていた。



Sindhupalchowk 郡 Jalbire 9 で実施された CRMP Replanning の様子

第5年次における CRMP 再策定では、VDC 事務長や他ドナーからの参加も促すよう DSCO から VDC に働きかけるよう指導してきたため、多くの Ward において CRMP 再策定に VDC 事務長や、農業局、畜産局、NGO など他ドナーの参加が見られた。これら他ドナーの意見も取り入れながら計

画を策定した WCC も見られたので、プロジェクト終了後、他ドナーより継続して支援が行われることも期待される。また、ほとんどの Ward において WCC と WCF が協調して計画を策定し、VDC への提出までを協働で行った。また、今回の再策定では、コミュニティリソースマップを作成する際に、DSCO-tech が GIS 研修で作成した GIS 土地利用図を参考にするなど、これまでの GIS 研修の成果も生かされた。

Myagdi 郡の Jhin においては、VDC 協議会に WCC と WCF の代表者が招待され、各 Ward に対して、WCC と WCF が協調して作成した計画に対し 5,500 ルピーの予算が配分されることが決定された。また、Sindupalchowk 郡の Jalbire でも、WCC と WCF の共同計画に対し、合計 286,000 ルピーの予算が配分されることが決定された。

上記の VDC では、これまでにも VDC との連携事例が多く見られており、プロジェクト終了後も VDC が WCC、WCF に対して連携を継続していくことが期待される。

第4章 改訂版 OG の正式承認 |

第 4 年次に実施した、複製活動実態調査、in-depth 調査の結果を受け、改訂版 OG のドラフトが 2013 年 8 月に完成し、8 郡の DSCO に郡ごとのドラフトに対するコメント集約依頼を行った。DSCO 所長のみならず、実際に現場で関わっている DSCO-tech からも多くのコメントが寄せられ、改訂版 OG に関する CP の関心の高さがうかがえた。

2013 年 9 月 17 日に 8 郡の DSCO 所長の参加のもと、改訂版 OG の検討会が開催され、各郡から収集されたコメントに対して最終化を行った。DSCWM や DSCO の現状を最も理解している DSCO 所長が取りまとめることで、DSCO 業務に準拠した改訂版 OG が完成したといえよう。



改訂版 OG

2013 年 9 月から 10 月にかけて改訂版 OG のネパール語訳が行われ、DSCO 所長も校閲を行い、英語版、ネパール語版の改訂版 OG が完成した。その後、出口戦略ワーキング・グループの中で確認を行い、出口戦略の一環として承認された。これに基づき、改訂版 OG は DSCWM の前書きを加えて DSCWM の正式文書として取り扱われることとなった。改訂版 OG は、500 部を印刷し、全国の DSCO 関係者や全国セミナー参加者に配布された。改訂版 OG を ANNEX-1 に添付した。

来年度サビハ予算としてネパール政府より 9,000 万ルピーの内示があったことから、来年度以降、サビハ事業が確実に実施されることとなる。改訂版 OG に加えて、補助教材として、サビハ・モデルを実施する上での手順と、CRMP や自己評価などの作成方法を記録した視聴覚 DVD も完成している。全国セミナーやプロジェクト対象郡以外の DSCO 所長を対象としたサビハ研修で広く広報を行っており、ネパール政府主導で今後実施できるものと確信している。

第5章 地方行政ラインとの連携促進

5.1 DWC 会合の開催

DWC 会合は、郡レベルの関係者が集い、プロジェクトの進捗を関係者と共有するモニタリング・メカニズムである。プロジェクトの第1年次と第2年次は年1回の実施であったが、第3年次からは年2回実施し、その内1回は、出来るだけ現場訪問することをカウンターパートに促している。第5年次のDWC会合は以下の日程で8郡で2回ずつ実施された。

SN	郡	第1回	DWC 会合	第 2 回	DWC 会合	備考
		実施日	参加者数	実施日	参加者数	
1	Kavre	13 Dec	25	-	-	
2	Sindhupalchowk	30 Sep	27	23 May	27	
3	Kaski	18 Sep	44	6 April	52	
4	Tanahun	22 Dec	35	7 April	39	第2回は現場訪問
5	Syangja	24 Oct	56	18 May	41	
6	Parbat	30 Sep	37	7 May	35	
7	Baglung	6 Oct	31	12 May	38	
8	Myagdi	29 Sep	42	4 May	47	第2回は現場訪問

表 5.1 DWC 会合の実施日と参加者数

DWC 会合は LDO が議長を務め、主な参加者は郡レベルの政府機関、関連プロジェクトの代表、NGO/INGO などの代表、VDC 事務長、WCC や POWER グループの代表、モチベーターや LGCDP のソーシャル・モビライザーなどである。DSCWM 局長(当時) も Sindhupalchowk 郡の第1回 DWC 会合に参加した。

第5年次の第1回 DWC 会合では、7つの郡で LDO が、1つの郡で Chief District Officer (CDO)が 議長を務めた。まず、第4年次の活動進捗報告を DSCO 所長が行った後、質疑応答が行われた。

第2回 DWC 会合は、Tanahun 郡と Myagdi 郡の2つの郡で現場訪問を行うジョイント・モニタリングとして実施され、残りの5つの郡では第1回目同様、郡庁所在地にて会合が開催された。なお、 Kavre 郡においては、主要参加者の日程調整がつかず、第2回 DWC 会合は開催されなかった。会合では DSCO から過去5年間の活動のまとめが発表され、質疑応答が活発に行われた。

DWC 会合ではどの郡においても、同じような発言が聞かれる。それは、特に政府が行う事業においては活動組織の重複をさけるべきであり、VDC の受け皿としての住民組織は1つがすべてに対応するべきであるという意見である。Ward レベルの計画をつくるなら、WCC と WCF は合同に計画を作るべきである、またプロジェクトのモチベーターと LGCDP のソーシャル・モビライザーはコミュニケーションを密にし、活動が重複しないように配慮しながら活動を進めるべきだ、などの発言もよく聞かれる。以下で5年次の各郡のDWC会合で出された主な発言のポイントをまとめる。

• Sindhupalchowk 郡では、第4年次の第2回目のDWC会合で現場訪問を行っており、CDOがWCCの活動を目の当たりにしたことによって、このプロジェクトが実際に成果を出していること、住民のオーナーシップが高いことを実感したことが共有された。(第1回DWC会合)

- Myagdi 郡では、Piple の VDC 事務長が「WCC と WCF が合同で計画を作成することは、VDC の計画をさらに効率的で現実的なものにすることに役立っている」、と発言した。(第 1 回 DWC 会合)
- Baglung 郡では、郡女性開発事務所の所長が「POWER グループの持続性を考えると、既存の協同組合に再編成されるか、新しい協同組合を立ち上げるか、の2つの選択肢があると思うが、いずれにせよ、わが事務所が出来る限りの支援はしたい。」と発言し、同じような内容の発言が、Tanahun 郡や Syangia 郡でも聞かれた。(第1回 DWC 会合)
- Parbat 郡では、家内小規模産業開発委員会は、今年度は Bachha で POWER グループメンバーの女性を中心に、竹細工や養蜂の研修を DSCO と共同で実施するべく準備を進めていることを共有した。(第1回 DWC 会合)
- Kaski 郡では、パンチャセ地域保全委員会代表でもある西部地域森林局長が、プロジェクトはこれまで開発の恩恵を与らなかった女性や職業カースト(ダリット)や少数民族(ジャナジャティ)の人たちをうまく開発のサイクルに取り組んだと思うと発言した。WCCは、現状のような選挙で選出された代表者が不在の状況下では、Ward レベルの開発の担い手として重要な役割を果たしている。POWER グループやグループ基金が持続していくひとつの手段としては、協同組合が有用であると思う。(第2回DWC会合)
- Syangja 郡では、LDO が VDC 事務長に対して WCC と WCF が協働で作成した Ward 開発計画を VDC の開発計画に反映させること、WCC や POWER グループが持続して活動を続ける支援をすることを指示した。また、プロジェクトの事業を通して学んだことはコミュニティと VDC が自分たちの学びとして認識することを強調し、LDO 自身もプロジェクトが達成したことを持続していけるように出来る限りの支援をすることを約束した。(第 2 回 DWC 会合)
- Tanahun 郡では、Dhorfirdi の POWER グループの代表が次のように発言した。プロジェクト の資金援助の額は少なかったが、プロジェクトが採用したプロセスは村人にとっても有益な 方法であった。その経験を通じて、我々はプロジェクトより包括的な開発計画を作ることだ けではなく、他の資金源からも活動資金を獲得して事業を達成することを実地の活動を通じ て学んだ。また、コミュニティにおいて今まで開発の恩恵に恵まれてこなかった女性たちの 底上げに注力することは重要であることも同時に学んだ。(第2回 DWC 会合)

5.2 VDC ワークショップ

プロジェクトの終了に当たり、2014 年 4~5 月にかけて VDC ワークショップが以下の目的で 34 の VDC で実施された。

5.2.1 VDC ワークショップの目的

VDC ワークショップの目的は以下の通りである。

- 過去5年間を振り返り、活動の進捗や達成したことを振り返る。
- プロジェクト終了後も、WCCやPOWERグループが持続的に活動を続けられるように、

VDC や LGCDP のソーシャル・モビライザーが活動を支援することをプロジェクトは期待しているということを共有。

- VDC に対して公式に、プロジェクト終了後は WCC や POWER グループの面倒をみること、CRMP を VDC の開発計画の参考にすることなどを要請する。
- これまでの支援や協力に感謝を表した感謝状を授与する。

ほとんどの VDC ワークショップは村役場のある場所など、村の中心地で実施され、VDC や POWER グループの代表、WCF の代表、LGCDP のソーシャル・モビライザー、VDC 事務長、政党代表、その他郡出先機関の代表者、L/NGO、各種の住民グループの代表など 40 名を招待して行われた。ワークショップは DSCO や DSCO-tech、モチベーターがファシリテーションの役割を担って実施された。

5.2.2 VDC ワークショップのプログラム

ワークショップのプログラムは以下の通りである。

- VDC 事務長を議長に任命する
- ワークショップの目的の共有
- DSCO/DSCO-tech によるこの 5 年間の 活動進捗、達成したこと、教訓などの 発表
- DSCO/DSCO-tech によるプロジェクト のフェーズアウト計画、プロジェクト 後のWCCやPOWERのその後について の共有
- 参加者からの発言
- WCC、POWER グループ、VDC への感 謝状の授与
- 議長からの言葉、閉会の辞



Kavre 郡 Devbhumi Baluwa での VDC ワークショップにて VDC 事務長より感謝状を授与される POWER グループ代表

SN	District	VDC	Date	No of Participants
1	Kavre	Kushadevi	25 May	33
2		Bhumidanda	19 May	36
3		Methinkot	15 May	40
4		Kanpur	15 May	45
5		Sarsyunkharka	26 May	41
6		Devbhumi Baluw a	18 May	34
7		Rayale	25 May	34
8	Sindhupalchow k	Hagan	17 April	41
9		Fulpingdanda	17 April	44
10		Jalbire	16 April	38
11		Fulpingkot	20 April	52
12	Kaski	Dhikurpokhari	16 May	53
13		Bhadauretamagi	10 May	52
14		Chapakot	15 May	52
15		Dhital	11 May	50
16		Lw angghalel	13 May	59
17		Dhampus	12 May	44
18	Parbat	Bachha	19 April	40
19		Barrachaur	17 April	36
20		Wahakithanti	16 April	39
21		Ranipani	18 April	44
22	Syangja	Malyankot	2 April	38
23		Jagatbhanjyang	3 April	41
24		Kew arebhanjyang	4 April	45
25	Tanahun	Dhorfirdi	26 March	42
26		Bhimad	25 March	43
27		Bhanumati	24 March	38
28	Baglung	Naransthan	21 March	35
29		Paiyunpata	19 March	44
30		Amalachaur	20 March	44
31		Bhakunde	18 March	25
32	Myagdi	Piple	26 March	47
33		Patlekhet	28 March	53
34		Jhin	27 March	51

表 5.2 VDC レベル交流ワークショップの実施日と参加者数

8郡34VDCでのワークショップ参加者は、合計で1,453名であった。すべてのイベントは滞りなく開催され、どのワークショップにても、WCCや POWERグループからは、プロジェクトのモダリティーやアプローチに対する好評が共有された。また、まだWCCや POWERグループが独立する段階ではないので、あと 2,3年のプロジェクトの継続あるいは同様のプロジェクトを実施して欲しいという要望が参加者より強調された。

その他の主な発言を以下に紹介する。

- LGCDP のソーシャル・モビライザーの発言「PWMLGP は村の開発にとても役立つプログラム であった。プロジェクトのアプローチである、CRMP や公聴会は、他の開発を担う事務所によって実施される開発事業でもぜひ実施するべきだと思う。」(Sindupalchowk 郡 Fulpingkot)
- Kushadevi、Ward 4の WCC 議長は、「今まで口約束で言った額を実際に現金で我々に支払った支援機関は無かった。このプロジェクトが、言動が一致していた初めてのケースである。」とプロジェクトに対する良かった点を述べた。 (Kavre 郡、Kushadevi)
- Barrachaur、Ward 3 から参加したネパール内紛で被害を受けた女性、Dil Maya Puri さんは、POWER プログラムで始めた野菜栽培によって、1 年間に 10 万ルピー以上の収入を得るように

なり、暮らしが大分楽になったと話した。 (Parbat 郡、Barrachaur)

- Kewarebhangjyang の VDC 事務長、Chandra Prasad Regmi 氏は、プロジェクトの支援で WCC が 作成した CRMP は、VDC の中期計画の作成も非常に参考になっている、と発言した。(Syangja 郡、 Kewarebhanjyang)
- Amalachaur、Ward 4 の WCC 議長は、「3 年間のサブ・プロジェクトを実施する期間は、我々にとって学びの期間であり、本当の開発は今から始まる。」と発言した。 (Baglung 郡、Amalachaur)
- Ranipani の VDC 事務長、Rajendra Shrestha 氏は、VDC 評議会は、「このプロジェクトが透明性を確保する活動として導入した公聴会を VDC でも実施していくことを決めた。」と発言した。 (Parbat 郡、Ranipani)
- Piple、Ward 1 の POWER グループの代表は、夫の死後、いかに彼女一人で 3 人の子供を育てて 生活を成り立てていくことが困難であったか、という身の上話を共有した。そのような困難な 生活の中で、POWER グループが彼女にとってセーフティー・ネットのような精神的にも拠り 所となる存在であった話は印象的であった。 (Myagdi 郡、Piple)
- Lwangghalel、Ward 2の WCC 議長であり、この村の WCC ネットワークの代表である、Bijuli Prasad Gurung 氏は、プロジェクトの実施プロセスがわかりやすく非常によかったことに謝意を述べ、プロジェクトがサブ・プロジェクトを実施するために支援した金額は事業を始めるための「開始資金」としての役割を担い、それがきっかけとなって村人が他機関やユーザーたちから支援を引き出し、さらに大きな規模で事業を実施することが出来た、と話した。 (Kaski 郡、Lwangghalel)

5.3 LGCDP との連携

5.3.1 WCC と WCF の協働による CRMP 再策定

今回の CRMP 再策定は、プロジェクトとして関わる最後の計画策定である。第 4 年次から WCC と WCF が合同で計画を策定するよう指導してきたが、第 5 年次の CRMP 再策定は WCC、WCF に加え、VDC も積極的に参加して計画作りを進める環境が整った。これは、ちょうど VDC の今年度予算の具体的な使い道を決定する VDC 協議会を前に VDC の開発計画を作成し、今年度の予算の使途を民主的に決定しなければならない時期と重なったことも大きい。この期間に実施された CRMP計画策定では、ほとんどの VDC で VDC 事務長や事務局員の立会いの元、WCC と WCF が合同で計画作りを行い、VDC の政策も同会合で話し合われた。

プロジェクトのモチベーターは今年度を以って雇用を解かれるが、WCCのメンバーがLGCDPのソーシャル・モビライザーを牽引し、Wardレベルの開発計画は継続的に作成されると期待される。プロジェクトの核の活動であるWardレベルの計画策定はこのようにしてLGCDPに引き継がれる、と思量する。

5.3.2 セミナーの共催

LGCDP との連携では、2013 年 12 月に実施した課題別セミナーにおいても、2014 年 5 月に実施した全国セミナーにおいても、プロジェクトと LGCDP との連携は実現している。

課題別セミナーの当初の準備段階から MoFALD のプロジェクト担当の Ramesh K.C.氏が関わっており、地方行政の課題では、同氏がネパールの地方行政の状態や LGCDP の現状などを発表した。 (詳細は第6章参照。)

プロジェクトでは WCC と WCF が協働で Ward の開発計画を策定することを推進しており、第 4 年次から実際に実現していることを LGCDP の第 1 フェーズからの MoFALD 関係者は高く評価しているという発言がこのセミナーで聞かれた。また Kaski 郡の LDO も同様に、このような働きかけに感謝の意を表しており、プロジェクトとしても、LGCDP や DDC との連携をこのような形で自信を持って示すことが出来たことを評価している。

また、全国セミナーでは、MoFALDによる地方分権やガバナンス、LGCDPの現状の発表に加え、 Kaski 郡の LDO が郡レベルでの連携の実態について発表し、今後もこのような望ましい連携のあり 方を持続していきたいと述べた。

5.4 終了時評価の提言を受けた MoFALD の対応

終了時評価の提言の1つに、「MoFSC と MoFALD は、DDC (郡)、VDC (村)、Ward (集落)の各レベルにおいて両省の協働体制が持続するよう尽力する必要がある。協働体制の維持にあたっては、特に(1) CRMP を VDC の計画策定に反映させること、(2) VDC による WCC・POWER グループへの支援及びモニタリングが続く仕組みづくり、(3) 郡レベルにおける情報共有体制の維持、の3点が保証されることが重要であるため、レター等によりこれらの点を関係機関に周知することが望ましい。」というものがあった。その周知のために、MoFALD から 2014 年 5 月 15 日付けで以下のような内容を記したレター(ANNEX-2)がプロジェクト 8 郡の LDO へ発出された。

「MoFALD と MoFSC の協働で実施している PWMLGP(2009-2014)は、2014 年 7 月に終了する。しかし、プロジェクトの学びはネパール政府によって受け継がれていくことが重要と考える。4 月に実施された終了時評価では、プロジェクトの持続性に関しいくつかの提言を行った。それらは次のような内容を含む。MoFALD と MoFSC が持続的な流域管理や参加型計画のプロセスにおける協働を続ける、VDC による開発中期計画の策定に CRMP を参考にする、プロジェクトが活動した地域に今後も定期的にモニタリングを継続する、今までの学びや設立した WCC や POWER グループなどの組織は VDC が継承する、今後も DDC と DSCO 間で情報共有を継続するなどである。それらを実行に移すために、関係機関による協力と調整をお願いする。」

プロジェクトからも上記の内容を依頼するレターを 8 郡の LDO に発出し、終了時評価で提言された内容が担保されるよう最後の働きかけを行った。

第6章 中央レベルでの活動 ■

6.1 JCC 会合の実施

第6回JCCは、2013年9月24日に開催され、次の議題について討議された。

- ・第5年次の活動内容案の説明
- ・出口戦略 WG の戦略案の説明
- ・意見交換

MoFSC からは、新任の Ganesh Joshi 次官が参加し 議長を務めた。 DSCWM の Prem Narayan Kandel 局 長、MoFALD 次官補補佐の Ramesh K.C 氏、JICA ネ パール事務所の本プロジェクト担当の菊地健士所 員(当時)が議事録に署名された。

第7回JCCは2014年4月18日に開催され、終了時評価調査の結果について協議された。協議内容を受けて、若干の修正を加えた上で、同調査報告書はJCCメンバーの署名を受けて承認された。署名者は、

プロジェクト・ダイレクターである Mukundaraj Prakash Ghimire 次官補、DSCWM の Prem Narayan Kandel 局長、



第7回 JCC の模様

MoFALD 次官補補佐である Ramesh K.C 氏、JICA ネパール事務所の藤井智次長が議事録に署名された。

最後に第8回 JCC は2014年7月3日に開催され、プロジェクト事業完了報告書(英文)の内容が共有され、プロジェクトの5年間の活動が総括された。また、JCC の場で、DSCWM の局長から、JICA ネパール事務所に対して5年間の支援への謝意と、今後ともの支援について要請がなされた。第5年次で開催された6-8回の3回のJCCの署名議事録は、1-5回のものと合わせて本報告書のANNEX-3とした。

6.2 出口戦略ワーキング・グループの活動

2012年1月下旬から2月上旬にかけて実施された中間レビューでの提言を受けて、「出口戦略ワーキング・グループ (WG)」が組織され、これまで以下の日程で討議が続けられて来た。

	New York and the property of t					
	開催日	主な討議内容				
1	2012年6月5日(第3年次)	各メンバーの顔合わせと今後の進め方の調整他				
2	2012年7月30日(第3年次)	WCC と WCF との連携についての可能性の討議				
3	2012年10月12日	複製調査の内容説明および、出口戦略の核となる「OG」改訂の方向性に				
		ついて討議				
4	2012年12月9日	複製調査の結果を共有し、OGの更なる簡素化について討議				
5	2013年3月5日	出口戦略の骨子について討議				
6	2013年4月26日	In-depth 調査結果の共有と、出口戦略への組み込みについて討議				
7	2013年5月8日	出口戦略ドラフト(ver.1)の共有				
8	2013年5月31日	出口戦略ドラフトへのコメント等の反映作業				
9	2013年9月~12月	関係先への説明、コメント聴取等最終化作業				
10	2014年1月	コメント反映版を関係先で回覧して最終確認作業				
11	2014年2月	WG メンバーによる最終化及び MoFSC/DSCWM 幹部への説明				

表 6.1 出口戦略 WG のこれまでの討議内容

12 2014 年 4 月 DSCWM から MoFSC に対して「出口戦略」承認手続き始まる

上記のような経緯でドラフトされた出口戦略はネパールにとっては「サビハ・モデル内部化戦略」と改称され2014年2月に最終化された。その後、同文書はDSCWMの業務戦略として承認を得るべく、4月にMoFSCに稟議書として提出されたが、2014年7月3日開催の最終JCC会合で、6月12日付を持って正式承認されたことが報告された。本報告書に同文書をANNEX-4として添付した。

6.3 PDM の改訂

プロジェクトでは2011年5月8日に承認されたPDM Version 1.8 に基づいて活動を実施しているが、中間レビュー以降、サビハ・モデルのDSCWM内での主流化に向けた活動に注力を注いで実施しているものの、PDM Version1.8 にはそれらの活動が十分反映されていないため、新たに成果4を追加することとなった。新たに作成されたPDM Version 2.0 はJCC会合の場での承認プロセスは経なかったが、JCCメンバーに内容確認を依頼後、各人の署名を受け2014年3月に承認された。

PDM Version 2.0 は ANNEX-5 に添付しているが、成果 4 に係る追加事項を以下に記す。

成果4:サビハ・モデル主流化に向けた活動が促進される

成果4の指標と指標の入手手段

次木 **4** ッパーティッパーティッパーティッパー

4-1. 改訂版 OG が DSCWM に正式に承認される。

- 指標の入手手段 ・承認のレター
- 同意書
- 研修報告書
- 4-2. 流域管理と地方行政の促進のために、サビハ・モデルを活用すると記載された同意書が森林土壌保全省と地方開発省合同から発出される。
- 4-3. DSCO 所長の 75%がサビハ・モデルのコンセプトを理解する。

成果4の活動:

指標

- 4-1. 出口戦略ワーキング・グループを設立し、DSCWM 内にサビハ・モデルを主流化させる戦略 を策定する。
- 4-2. 複製活動実態調査を実施する。
- 4-3. In-depth 調査を実施する。
- 4-4. 複製活動地域、プロジェクト外 DSCO へ研修を行う。
- 4-5. OG を改訂し、DSCWM が正式に承認する。

尚、中間レビューの際、上位目標の指標に「「サビハ複製をより良い流域管理と地方行政のために制度化する」と記載された森林土壌保全省と地方開発省合同の同意書を発出する」」という指標を追加することが提案された。2012年12月に両省の同意書は手交され、関係先に告知されている。本指標は、上位目標ではなく、成果4の指標として用いることの方が妥当であるとの協議が為されてきた。

6.4 課題別セミナー

6.4.1 セミナー参加者とオープニング・セッション

「参加型アプローチ、地方行政、ジェンダーと社会的包摂(GESI(Gender and Social Inclusion))に関する課題別セミナー、一サビハ・モデルの挑戦と経験」が 2013 年 12 月 3 日にカトマンズの New Baneshwor にて実施された。このセミナーの目的は、参加型アプローチ、地方行政、GESI におけるプロジェクトモデルの有効性を広く援助コミュニティに周知させることである。約 100 名の関係者が参加し、MoFSC、農業局、NPC(National Planning Commission)、アメリカ大使館、GIZ(German Development Cooperation)、ADB(Asia Development Bank)、Care Nepal、OXFAM、IUCN(International Union for Conservation of Nature)、CEAPRED(Center for Environmental and Agricultural Policy Research, Extension and Development)、IDE(International Development Enterprises)Nepal、Hariyo Ban/Care Nepal、シャプラニール、SMES(Project on Strengthening the Monitoring and Evaluation System in Nepal)Phase 2/JICA、SISM(Support for Improvement of Primary School Management Project)Phase 2/JICA、GeMSIP(Gender Mainstreaming and Social Inclusion Project)/JICA などの機関からの参加があった。セミナーのプログラムは第 5 年次進捗報告書に添付したとおりである。

開会の部では、MoFSC の Ganesh Joshi 次官がチーフゲストを務め、プロジェクト・ダイレクターを務める MoFSC の次官補、Mukunda Raj Ghimire 氏がこの部の議長を務めた。

まずは、DSCWM の Pem Narayan Kandel 局長がプロジェクトの概要を説明した。概要では、歴史的背景、プロジェクトのログ・フレーム、アプローチ、成果、今後の展望などを説明した。概要説明後、JICA ネパール事務所、MoFALD、MoFSC からの代表がそれぞれの考えなどを述べた。

6.4.2 課題別テーマのプレゼンテーション

3 つの課題別発表の冒頭では、サビハ・モデルの事業実施プロセスの詳細をプロジェクト当初から担当オフィサーとして関わる Prem Poudel 氏が発表した。同氏の発表ではサビハ・モデルの何が DSCO にとって重要な要素なのかを、以下のような論点で示した。

WCCやPOWERグループとして組織化された人々が小規模事業実施のプロジェクトサイクルを3サイクル経験することによって、高いオーナーシップを持ち事業



課題別セミナーの様子

を推進し、関係機関、特に VDC との強いリンクを形成して様々なコミュニティ開発に寄与する事業を担っていく能力を強化していくメカニズム

• WCC が組織として発展していく過程を自己評価のツール (Spider-web analysis) を利用して 自ら評価し、改善する点を再認識することでさらにコミュニティの開発に寄与する組織とし て成長していけるメカニズム

- WCC が公聴会(Public Auditing)を実施し、コミュニティに対して説明責任をしっかり果た すメカニズム
- 同 VDC 内ワード間のネットワークを構築し、DDC や他の政府出先機関との円滑な情報共有の場やコーディネーションの強化を組み込んだメカニズム
- これらが、土壌保全活動のみならず、VDCの様々な開発行為の向上に役立っていること

その後、参加型アプローチ、地方行政、ジェンダーと社会的包摂(GESI)という3つの課題の発表が続いた。

最初の参加型アプローチの発表は、Kaski 郡 DSCO の Uddhaw Ghimire 所長が行った。この発表では、WCC がどのようにコミュニティのリソースマップを作成し、中期計画である CRMP や年間計画である AAP(Annual Action Plan)を作成するか、その意義を詳しく説明した。また、当モデルの重要なツールである公聴会や自己評価ツール(Spider-web analysis)についても、外部者が分かりやすいようにプロセスや意義について、コミュニティの意識調査の結果も交えながら説明した。「Participation(参加)」を進める過程での困難やこれらの参加型ツールをこれまで使用した経験から来る教訓、そしてさらには今後の課題を共有して発表を締めくくった。

次の地方行政という課題については、MoFALD、プロジェクト、現場のスタッフ、という3つの観点から発表を行った。まずはMoFALDのプロジェクト担当者、Ramesh K.C.氏による発表で、行政の意味、ネパールにおける行政の現状、同省の役割、実施中のLGCDPのプログラムの内容、LGCDPとプロジェクトとの接点や今後の展望などについて発表した。

その後、プロジェクトチームの Rishi Ram Pandey 氏が、PWMLGP における地方行政というテーマで発表した。PWMGLP というプロジェクトレベルでの視点では、行政を扱う際、2 つの側面がある。1 つは郡レベルの政府関連機関との連携であり、もう 1 つはコミュニティ開発におけるガバナンスを改善していくことである。この 2 つの側面をこのプロジェクトでは、様々な実施プロセスの過程や活動の中で配慮しながらどのように活動してきたか、そこから得られた成果や教訓などをセミナー参加者と共有した。

現場の声として、Sindhupalchowk 郡 Jalbire のモチベーター、LGCDP のソーシャル・モビライザー、VDC 事務長代理の3名から、この違う立場の3者が現場ではどのように連携して活動をしているのか、どういう意味で3者の連携が重要なのかを発表してもらった。

最後のテーマはジェンダーと社会的包摂/GESIであった。当プロジェクト雇用の男性エンジニアである Rudra Neupane 氏がこのテーマを発表することに、このプロジェクトの特徴がよく出ていたと思われる。ジェンダーは、先行プロジェクトの開始時から力を入れてきた分野である。当時、JICA 史上初となる Women In Development (WID)専門家が第1フェーズ、第2フェーズを通して派遣されていた。Social Inclusion(社会的包摂)は2000年に入ってから注目されてきた比較的新しいコンセプトであるが、先行プロジェクト時から「社会的弱者への配慮」という言葉を使って、職業カーストに配慮した事業展開を行ってきた。プロジェクトでは、ダリットやジャナジャティの包摂を念頭に置いて事業展開を進めてきた。その長年の実績に加えて、プロジェクトの OG に GESIを担保するプロセスを明記し、それらが土壌保全局で内部化されつつあることはプロジェクトの大きな成果と言えるだろう。Tanahun 郡 Bimad の POWER グループ委員長の自信に満ちた活動発表は、女

性のエンパワーメントが現場で実現されている様子をはっきり示すことが出来たと思われる。

今回のセミナーは内容が充実しており、活発な意見交換が行われたため、予定を過ぎて4時半の終了となったが、終了時時点でも約60名の参加が見られた。このセミナーで浮き彫りにされた課題は、サビハ・モデルを政府内で内部化するに当って、CPであるMoFSCがやるべき作業として、モデルの有効性を精査することが必要となる。モデルのインパクト、経済効率などを独自に精査し、有効性を確認できた上で法整備のプロセスを進める必要があることをCP側は再確認した。このような再認識を導いたことも有意義であったと言える。

6.5 第2回全国セミナー

6.5.1 第1部「ポリシーレベル会合」

第2回の全国セミナーは「ポリシーレベル会合」と「現場レベル・ワークショップ」の2日間に分けて実施した。「ポリシーレベル会合」は5月28日に、「現場レベル・ワークショップ」は5月30日に開催した。「ポリシーレベル会合」には約120名が参加した。参加した機関は、プロジェクトに関わるCP機関や関係者以外では、GIZ(SUNAG)、WWF、IUCN、CEAPRED、OXFAM、PHASE Nepal、DRC (Development Resource Center)、WOCAN、IDE Nepal、Rupantaran Nepal、NGO Federation、Love Green Japan、Shapla Neer、SEMS2、SISM2、COMCAP2などである。メディアからの参加は、Nepal Television、Himalayan Times、RSS(Rastriya Samachar Samiti)、Aathik Dairy、Radio Sagarmatha、Radio Reeyaz などからの参加があった。

(1) オープニング・セッション

MoFSC の次官補である Krishna P. Acharya 氏がセミナーのチーフゲストを務めた。DSCWM の Kandel 局長は開会の部の議長を任命された。まずプロジェクトから担当オフィサーの Prem Poudel 氏がセミナーの目的を説明し、DSCWM の計画官、Gehendra Keshari Upadyaya 氏がプロジェクトの枠組みや活動、成果を発表した。

JICA ネパール事務所から藤井次長が挨拶を述べた。特に、コミュニティ開発は人々の参加が重要であること、VDC や DDC との連携は WCC や POWER グループの持続性の確保には不可欠なこと、モデル



第2回全国セミナー「ポリシーレベル会合」 の様子

のネパール政府への内部化を成し遂げた成果は大変喜ばしいと感じていることを述べた。

Krishna P. Acharya 氏も同様に、参加型流域管理のモデルが局内で主流化したことを称える言葉を始めに発した。次官補はまた、プロジェクトが長年農村部の緑化にも尽力してきたことを語る一方、都市の緑化の対策も必要である考えを共有した。プロジェクトが社会的包摂やジェンダー主流化で功績を残したことは非常に意義のあることとし、MoFSC は間もなくサビハ・モデルの内部化戦略を承認することを確約した。そして、最後に MoFSC として、サビハ・モデルが残した OG を元に、

今後さらに新しい地域にプロジェクトの学びを広めていくことを推進すると述べ挨拶を締めくくった。

MoFALDで主に当プロジェクトを担当してきた次官補補佐のRamesh K.C.氏はMoFALDを代表して祝辞を述べた。MoFALDはPWMLGPでしか関わっていないが、重複を避けてWCCとLGCDPのWCFとうまく調和を取って連携を進めるように密に話し合って事業を進めてきたことを話した。その結果は、サブ・プロジェクトの連携数や終了時評価の報告書でも明らかであり、特に地方行政の分野での学びを今後もMoFALDの活動に生かしていくことやプロジェクトのポジティブな学びをより広げていくことをネパール政府は試されていると述べて、挨拶を締めくくった。

DSCWMの Kandel 局長は、プロジェクトが多大な効果を残して活動を成功裏に終えたことを認める発言をした。WCC や POWER グループの持続性は、彼らが選択をする事柄ではあるが、局としても持続性を維持できるように、またこのモデルの内部化を実現させるために尽力したいと述べた。流域管理は、様々な関係者やセクターが関わる課題であるゆえに、様々な関係者を巻き込んだ、統合的なアプローチが必要である。昨今の水源の枯渇や土壌流失、地下水の減少などの問題を鑑み、持続的な流域管理の状況を我々が開発していく必要がある、と局長は力説した。そのために、サビハ・モデルが役にたつのではないか、という期待も持っていることを語った。DSCWM は、河川関を基にして流域管理の事業を進めるナショナル・ポリシーを策定するなど、リフォームを推進しようとしており、近々関係者からも意見を聞く機会を作る予定である。その流れでもサビハ・モデルは今後の発展の基となるよいモデルになることだろう。局長は JICA に謝意を述べ、今後もネパールの人々に資する活動を続けていくことを約束して、挨拶を締めくくった。

(2) DSCO、DSCO-tech、村人によるプレゼンテーション

プロジェクトに関わった主な関係者からのプレゼンテーションの部は、DSCWM 副局長が議事進行を行った。まずは Tanahun 郡の DSCO 所長が「Beauty of SABIHAA」について発表した。次に、MoFALD からは、ネパールの地方分権の方針と現状、さらに LGCDP2 の発表を行った。発表の中で、プロジェクトが開発事業において民主的プロセスの推進や村のリーダーの育成に貢献したことを強調した。

Kaski 郡の DSCO 所長は、プロジェクトの 5 年間で成し遂げた DSCO としての成果を発表した。 彼はこのモデルが、ソーシャル・キャピタルを形成するユニークなモデルであると話した。また、 発表で示された定量的なデータは、郡レベルでの実情を把握する上でとても有益であった。

その後、Kaski 郡の DDC から、LDO が DDC としてどのようにプロジェクトと連携を進めてきたかについて発表した。地域によっては、DDC 予算で車道を建設する際に土壌浸食を招いてしまったケースにプロジェクトのサブ・プロジェクトが侵食を防ぐ対策を施したところもあり、協力体制をうまく築いてきたと話した。また、プロジェクトの対象 VDC では責任説明の義務を多くの住民が理解したことも望ましい成果であると付け加えた。

DSCO-tech の発表は、Parbat 郡からの 30 歳前後の若いエンジニアが行った。自分たちはただのエンジニアでなく、ソーシャル・モビライゼーションも担えるエンジニアであると「Social Engineering」という言葉を使って、自分たちの新たな役割を内面から理解している様子はとても頼もしかった。住民活動に関する発表は、Syangja 郡の VDC 事務長、Kavre 郡のモチベーター、Myagdi 郡からは

WCC 議長、POWER グループの代表として Baglung 郡と Sindupalchowk 郡から 2名の女性が担った。 VDC 事務長は、モチベーターが居なくなった後の POWER グループの持続性に懐疑的な意見を述べた。モチベーターは自分の経験と学びを堂々と発表した。 ダリットの WCC 議長は、地すべりの多い地域からの悲痛な訴えを聴衆と共有した。 Sindupalchowk 郡の POWER グループの代表は、活動を通じて収入が増えたことと同時に夫に対する引け目を感じなくなったという話で聴衆に好感を持たれた。 Baglung 郡の POWER グループの代表はジャナジャティの女性で、これまで開発のプロセスから阻害されていたこと、 POWER グループの活動を通じて女性達がいかにエンパワーされてきたかを、独特な話し方で聴衆を魅了し、発表の途中に何度も拍手が沸きあがった。

その後、議論の時間が持たれ、4名の参加者が発言した。その中の一人、2年前まで Kavre 郡の DSCO 所長であり現在は Nuwakot 郡の DSCO 所長は、プロジェクトが成功裏に終ったことへの祝辞 とそれに関わったすべての関係者にねぎらいの言葉を述べ、また、このセミナーの発表者が非常に バライエティーに富む関係者からの発表で構成されていることに賞賛の意を示した。また、Radio Sagarmatha から参加した若い女性のリポーターは、最後の POWER グループの 2名の女性の発言に 非常に感銘を受けたこと、彼女らがこのプロジェクトを通していかにエンパワーされたかをラジオを通じて多くの人に伝えたいと述べた。

(3) クロージング・セッション

閉会の部では、Syangja 郡の DSCO 所長、Syangja 郡の LDO、GESI の専門家、JICA ネパール事務 所次長、IUCN のダイレクターなどが、様々な立場から感想を述べた。主な感想を以下に挙げる。

- POWER グループメンバーによる生の声はプロジェクトが女性のエンパワーメントの分野で確かなインパクトを残したことを証明している。
- プロジェクトの事業実施モダリティーは透明性や説明責任を推進する内容となっており、これ は他のどのプロジェクトにおいても内包すべき内容である。
- このプロジェクトが、発言の機会に恵まれず、開発の終焉に追いやられていた人々を POWER プログラムを通して変容させた事実は POWER グループの代表者の発表により明らかである。
- POWER プログラムのモダリティーはエンパワーメントや自然資源管理において有効な手法であることは証明されたようなので、森林や流域管理のセクター・リフォームに反映されるべきである。
- 全てのプログラムやプロジェクトは、サビハ・モデルのように人々が開発の中心になるように 作られなければいけない。
- このプロジェクトの実施要領やプロセスは、今後新しいプロジェクトやプログラムを策定する 上で参考にすべきである。

セミナーの最後は、JICA 事務所の藤井次長と DSCWM の Kandel 局長が一言述べて締めくくられた。藤井次長は、「このセミナーの発表や皆さんの意見を聞いて、このプロジェクトの成果を非常に誇らしいと感じた。我々はさらに今後ネパール政府の皆様の尽力でさらなる達成を成し遂げることを大いに期待している。JICA 事務所として、今後も政府関係者のキャパシティ・ビルディングに

支援をしていきたいと思う。」と述べた。DSCWM 局長は、来年度のサビハ予算は 9,000 万ルピーが National Planning Commission (NPC)によって承認される予定であることをアナウンスし、今後も参加 型流域管理を推進していく考えを述べて、閉会の辞を締めくくった。

6.5.2 第2部「現場レベルワークショップ」

全国セミナーの第2部として、プロジェクト対象 8 郡全ての DSCO-tech とモチベーターを対象に、2014年5月30日にワークショップが開催された。このワークショップの目的は、今後さらにサビハ・モデルの複製活動を展開するにあたって、これまで村レベルで尽力してきた両者から意見や提案を集めるためである。85名が集い、プロジェクト関係者との意見交換ができる最後の機会でもあったため活発な議論が行われた。ワークショップには、モチベーター以外にもDSCO所長、DSCWMからも参加があり、参加人数は、モチベーター28名、



第 2 回全国セミナー「現場レベル・ワークショップ」 の様子

DSCO-tech 35 名、DSCO 所長 8 名、それプロジェクトスタッフ 14 名であった。

ワークショップが始まる前にプロジェクトの宣伝用ビデオの映写会を行った。 議長は DSCWM 副 局長の Ghevan Prasad Guragain 氏、議事進行は Syangja 郡の DSCO 所長、Kamal Gautam 氏が務めた。 セミナーは参加者全員の自己紹介から始まった。

セミナーの冒頭に寺川チーフアドバイザーが DSCO や DSCO-tech、モチベーターに、これまでのプロジェクト活動への貢献を労った。その貢献のおかげでプロジェクトの終了時評価や先日の全国セミナーでプロジェクトの目的を達成しよい結果を導いたことが評価されたことを喜ばしく思う、と述べた。このように DSCWM が植えた木が実を結んだことを称え、さらなる広い地域で実をならせることを期待する、と締めくくった。

Kaski 郡の DSCO 所長、Uddaw Bahadur Ghimire 氏はこの5年間に Kaski 郡におけるプロジェクト活動で経験、達成したこと、今後への抱負などを発表した。Ghimire 氏は、WCC や POWER グループとして村のソーシャル・キャピタルを作ったことが顕著な功績であると主張した。発表後、いくつかコメントや質問、追加説明が共有された。ある DSCO-tech が WCC は WCF と名前を変えた方がよいのでは、という意見を出したのに対し、Ghimire 氏は WCF も WCC と同様、一時的な措置であって、永久的な組織ではないため、WCF に改名することは同意しかねると応えた。また、WCCは WCF より包摂的なグループであるとも述べた。次に、SATOYAMAの概念について追加説明が求められそれに応えた。DSCO-tech から POWER グループによる自然資源の管理が改善したとは思わない、という意見に対しては、全ての POWER グループが実施した活動は、ヤギ飼育にしても、ジャガイモ栽培、しょうが栽培にしてもすべて資源管理に関係する活動であり、それらの収入向上の活動を通じて飼棄の確保のことを考えるようになったり、栽培に必要な水の管理を考えるようになったりすることで、状況は以前より改善していると考えられると解説した。また、POWER グループの自主的な考えを尊重し、全ての POWER が協同組合になることが最良の決断ではない場合があ

ることも付け加えた。

DSCWM 副局長の Guragain 氏は 2 日前の全国セミナーでの発言同様、以下の点を DSCO-tech やモチベーターと共有した。

- コミュニティの人々が CRMP を作成し、自己評価を行い、資源へのアクセスを改善したことを 指して、プロジェクトは住民の能力向上に顕著な貢献をした。公聴会を導入し住民自らが良き 統治を担う能力を強化した。
- プロジェクトの活動に、女性やダリット、ジャナジャティを巻き込んだ成果は大変すばらしい。
- 5月28日のセミナーで発言した2名のPOWERグループ代表の女性の発言を聞くと、このプロジェクトがGESIの分野で多大な貢献をしたことが分かる。女性のエンパワーメントを通して多くの女性が自信を付けたことは大きな成果である、と実感した。
- DSCO の予算は非常に限られているので、流域管理に取り組む住民グループが他の資金源を模索することは、DSCO としても一石二鳥の利点がある。
- プロジェクトによって作成された改訂 OG は DSCWM に受理され、今後の活動に活用されるであろう。サビハ・モデルの OG と局のポリシーを融合させて、Palpa 郡、Gulmi 郡、Argakanchi 郡で広がっているように、今後もクラスター毎にサビハ・モデルを流域管理の活動に応用していくつもりである。
- POWER グループの持続性に関しては、POWER グループが協同組合に吸収されていったとして も、DSCO が常に気にかけ、今後を見守る姿勢が求められる。
- DSCO はまた、プロジェクト終了後も、サブ・プロジェクトの維持管理責任を持つべきである。
- プロジェクトのアプローチは、局のニーズに合致していた。
- プロジェクトの成功はモチベーターの努力と貢献に負うところが大きいことは認める。モチベーターは、今後契約は終ってもコミュニティのリーダーとして POWER グループの活動を支援していくと確信している。
- MoFSC が間もなく承認する内部化戦略は DSCWM の財産となるだろう。

副局長はプロジェクトに関わったすべてのスタッフに謝意を述べ挨拶を締めくくった。

その前に、プロジェクトの政府側中心人物である Prem Poudel 氏が総括的な発表を行い、WCC と WCF の連携や SATOYAMA の概念について、追加的説明を行った。また、DSCWM は来年度は 9,000 万ルピーの予算をサビハ活動に充てる予定であること、2020 年までに 25 郡にこの参加型流域管理のモデルを広げることも共有した。

その後、参加者は以下の5つのポイントに関して意見交換の機会を与えられた。

- ①複製活動をするに当って改善すべき点
- ②プロジェクトの期間内に改善すべきだったと考える点
- ③WCC と POWER グループの持続性について
- ④OG の改善点への提案
- ⑤プロジェクト終了後、DSCO-tech やモチベーターが WCC と POWER グループを支援する役割について

このプロジェクトの最もコミュニティに近いところで活動をしてきた DSCO 所長や DSCO-tech、モチベーターからは非常にたくさんの意見や提案が出されたが、主な意見を以下に記す。

- DDCやVDCの活動プロセスへの巻き込みに関して、当初のOGでは明確に記されていなかったので、より実態のあるガイダンスが必要だった。(Kaski 郡の DSCO-tech)
- 途中からプロジェクト対象郡に配属になったため、キャパシティ・ビルディングの機会として の恩恵を何も得ることが出来なかったことがとても残念である。(Syangja 郡 DSCO-tech)
- コミュニティに介入する際、WCC や WCF よりも区議会を通すことが本来の姿であると思う。 現状は区議会や村議会が存在しない状態だが、地方選挙が行われれば、区議会を通してコミュニティへの介入が容易になるだろう。また、女性の能力向上研修等を複製活動にとり入れるべきである。(Kaski 郡 DSCO-tech)
- プロジェクトの実施期間はとても短かった。コミュニティの人々は住民主体で計画策定から事業実施、説明責任を果たすまでのプロセスについてやっと理解し始めたところだというのに終ってしまう。少なくとも1年は延長が必要だと思う。 (Myagdi 郡モチベーター)
- WCC の法的な立場が全くないことは問題であるので、DSCO が登録した、ということに出来ないであろうか。また、各 Ward につき 8 万ルピーという年間予算は世情に合わせて修正されるべきである。もしそれができないなら、護岸工事のような活動はそのような少ない予算では無理なので、活動から除くべきである。 (Myagdi 郡 DSCO-tech)
- サブ・プロジェクトを実施する前後の土壌流失のデータを取るべきである。また、8万ルピーは現状にそぐわないので、20万ルピーにするのが妥当ではないかと思う。また、Ward の人口に応じて、サブ・プロジェクトの予算は多少増額減額できるような柔軟性が必要である。POWER グループの人数も、30名と決めるのでなく、人口に合わせた数にするべきである。また、大きなWardでは2つのPOWER グループの形成も可、など実情に応じた対応が望ましい。DSCO-techs対象の海外研修は1回開催され、30名が参加したが、異動等で10名程度のDSCO-techが研修の機会を得られなかったのは残念である。(Syangja 郡 DSCO-tech)
- プロジェクト終了後、POWER グループ基金に蓄えられたお金が、ローンを返済しなくなる等により自然消滅することを懸念している。プロジェクトの最後にベスト・モチベーターを表彰するシステムがあればよいと思った。海外の研修はモチベーターにも必要であると思う。(Kavre郡モチベーター)
- VDC は WCC を法的根拠がある組織として認めていないので、この問題は中央で処理されるべきであったと考える。 (Baglung 郡 DSCO-tech)
- 予算が非常に少ないので、それに見合うよう実施プロセスをより短く簡略化すべきである。 (Tanahun 郡 DSCO-tech)
- 複製活動を始めるにあたり、始めは2つのVDCで活動を進めるのが妥当かと思われる。そうすれば、各郡に多額の予算も必要ない。また、選挙が実施されればこのモデルはより効果を上げるだろうと思う。 (Myagdi 郡 DSCO)
- 護岸がどの程度侵食が止まったかについての調査が必要である。そのようなインパクト・スタ ディーは説得力のある定量的データを提供してくれるだろう。また、サビハ・モデルを今後複

製する上で、モデルとなる場所の設置を提案したい。モデル地域の視察を通して新たに関わる関係者はサビハを容易に理解するのではないか。 (Parbat 郡 DSCO-tech)

• 次のプロジェクトを作成する際、CPのチームは技術スタッフだけでなく、総務や会計に関わる DSCO 事務所内のスタッフもチームに入れるべきである。複製事業としてサブ流域単位で活動 を進める場合、当該 VDC の一部の Ward がサブ流域の外になったとしても、VDC 予算獲得の観点から VDC 全体を含めるべきである。(Kaski 郡 DSCO)

ワークショップ閉会の部は、Baglung 郡からモチベーターが、Kaski 郡から DSCO-tech が、Tanahun 郡から DSCO 所長が挨拶を行った。そして、DSCWM の局長と副局長が最後の挨拶を述べて閉会した。局長は、現在 DSCWM では新しく流域管理の国家ポリシーを策定しようとしていること、その作業にも今日の参加者からの意見や提案はとても役に立ったことを話した。副局長も、ディスカッションで出た意見の内容は有益なものであった、局として今後サビハ・モデルの参加型流域管理を推進する上で今日共有された提案などはぜひとも参考にさせてもらう、と述べた。そして、特にモチベーターたちに対して現場での労をねぎらいつつ、今後は村のリーダーとして支援を続けて欲しいと述べて、閉会した。

6.6 SMES2 プロジェクトによるプログラム評価

National Planning Commission (NPC)は、国家モニタリング評価ガイドライン(2070 Bikram Sambat (B.S) /2014)に基づいて、優先順位の高い政府事業の第3者評価を行う。既に実施済み(または現在進行中)のプログラムやプロジェクトの現状やオペレーションの状況、維持管理状況、プロジェクト管理の状況などを中立的に公平にレビューするために、National Planning Commission Secretariat (NPCS)は競争入札を通じて第3者評価者を選定し派遣する。2014年は、MoFSCの要請を受けて、NPCS は PWMLGP を評価することを決定した。

NPCS のモニタリング評価を行う部署は、この評価活動の全般的な管理やコーディネーション、 監督を担う。この第3者評価は SMES2 の技術的、財政的支援を受けて実施することとなった。NPCS サブ・タスクフォースと SMES2 はこの評価のモニタリングと監督を担務する。

- 評価の目的は次の通り。ネパールの一般市民に透明性を示すために、DAC評価5項目である妥当性、有効性、効率性、インパクト、持続性を用いてプロジェクトの結果や現状を評価する。
- プロジェクトの効果を最大限にするためにプロジェクトの実施期間や開発パートナーへ提言 する。
- 似たようなプログラムやプロジェクトの実施のあり方を改善したり、今後のポリシーやプログラム、プロジェクトの策定に反映させるために役立つような教訓を引き出す。

競争入札を経て、Development Resource Centre (DRC)が選抜され、評価のインセプション・レポートを作成した。それに基づいて、DRC は活動を始めており、プロジェクトは情報共有や世帯調査の質問票のテストサイトの選考に関して助言を行っている。

この評価の結果は 2014 年 11 月頃に出る予定である。プロジェクトとしては、この評価が NPC と MoFSC の両方に有益な成果をもたらすことを期待している。

第7章 終了時評価調査団の受け入れ■

7.1 終了時評価の目的、評価結果

本プロジェクトの終了にあたり、2014 年 4 月 3 日 から 4 月 21 日まで終了時評価調査団の受け入れを行った。日ネの合同評価チームは、カウンターパートや Kaski 郡、Myagdi 郡、Baglung 郡の受益者からも幅広く聞き取りを行い、評価結果の取りまとめが行われた。

その結果、2009 年のプロジェクト開始以降、長年の DSCWM と協力事業実施の結果、期待された成果が生み出され蓄積されつつあり、当初の目的を達成できたと判断されため、本プロジェクトは当初の予定どおり終了するものとする、という結果となった。5 項目別の評価結果の概要は次の通りである。

表 7.1 5 項目評価結果

項目	評価結果
妥当性	本プロジェクトの開始以降、ネパール側の政策及び日本側の援助方針におい
	て、土壌保全・流域管理始め、自然環境保全を包括するコミュニティ開発、並び
	にガバナンス(地方行政)にかかる支援政策、計画に大きな変更はなく、本プロジ
	ェクトの妥当性は維持されている。
	さらに受益者のニーズも高く、受益者のニーズに的確に応えるためにも、地方
	行政強化にかかるネパール関係機関/者の能力強化の重要性は高い。
有効性	本プロジェクトでは、4つの各成果(対象地域の郡土壌保全事務所・保全官DSCO
	並びに対象郡の住民の能力強化、参加型流域管理における地方行政のコンセプト
	理解の浸透、サビハ・モデルの内在化の促進)が著しく高い結果を生み出してお
	り、こうした成果の達成により、プロジェクト目標である「プロジェクト対象8
	郡において、DSCOとDDC/VDCの協働による参加型流域管理事業が実施される」は、
	プロジェクト終了時までに達成されると考えられ、有効性は高い。
	なお、本件の効果発現に貢献した要因として、①促進要因【a)DSCO所長/技術
	者、VDC/WCC代表、モチベーターの積極的な働き・役割、b)事業実施プロセスの
	確立(地域資源管理計画CRMP及び年間計画案策定/ Public Audit (公聴会) /WCC
	自己評価/サブ・プロジェクト事業プロファイル/オペレーショナル・ガイドライ
	ン等)】、②阻害要因【地方議員の不在や政治的混乱・不安定の影響】
効率性	本プロジェクトに対する日・ネ側の投入は、ネパール側人材の異動交代の点を
	除けば、サビハ活動のための予算含め、計画通りに執行されるなど、その量、質、
	タイミング的にも概ね適正で、すべての投入は実施に係り十分に活用されてい
	る。これまでに投入された資源は、投入量に見合う成果を有していると思われる。
インパクト	(1)上位目標への貢献
	本プロジェクトの上位目標「森林土壌保全省MoFSCと、連邦・地方開発省MoFALD
	のイニシアティブにより、プロジェクト対象以外の郡において、暫定地方自治体
	とDSCO の協働による参加型流域管理事業が適用される」については、ネパール
	側が、サビハ・モデルの実践に係り、本プロジェクトの対象郡中、プロジェクト
	でカバーされていない郡、さらにはプロジェクト対象地域外の郡にも予算を配分
	し、サビハ・モデル複製事業を実施している。また同複製事業でも「オペレーシ
	ョナル・ガイドライン」が活用されており、同改訂ガイドラインがネパール側に
	よって最終的に承認され、またサビハ・モデル推進の予算がこれまで通り確保さ
	れることで、プロジェクトの上位目標が達成されることが期待できる。

(2)波及効果

- ①地域住民のエンパワーメント
- ②サブ・プロジェクト実施を通しての地域住民の生計向上や雇用機会
- ③住民の生活の安全、安定化
- 4環境並びに土壌保全への貢献
- ⑤様々なグループや組織間の組織連携強化

持続性

(1)財政・組織的持続性

①土壤保全·流域管理局/森林土壤保全省

ネパール政府は、土壌保全流域管理にかかる政策及び戦略を策定し、全域でそのサービスが拡大し、内包化するよう推進してきている。こうした政策の元、2011年度以降、地域開発森林/流域保全プロジェクト(サビハ・モデル複製事業)の予算が計上され、事業が実施されており、今後も継続して予算配布が期待できる。

②その他の予算源

プロジェクトでは、WCCが自分たちで策定した中期計画及び年間計画案を元に VDCに働きかけ、事業実施への財政的支援を受けてきていることから、協調財政 支援の可能性は今後も期待される。なお他の地方組織〔郡農業開発事務所、女性 開発事務所 (WDO)、NGO 等〕による協調融資・連携の事例も散見されており、こうした他の機関からの資金リソースは重要であり、引き続き継続、強化が期待される。

③連邦・地方開発省ラインとの協調

(2) 政策及び制度的持続性

現在、11の郡で、サビハ・ モデル複製事業を実施してきており、更に同モデルを活用し、他の地域でも拡大展開する意向を持っていることから、サビハ・モデルの浸透、波及が、より期待される。有効な流域管理ツールとして同サビハ・モデルを国家モデルと捉えており、同モデルは徐々に土壌保全・流域管理局内で内包化され、更なる拡大、発展が期待される。

(3) 技術的・人的資源の持続性

これまでの日本支援による長い協力を通じ、本省職員始め、DSCO長/職員/技術者、WCC/VDCメンバー、モチベーター、さらにPOWERグル―プなどの地域住民など関係者それぞれが、土壌保全・流域管理に関する技術や知識のみならず、調整・マネージメント能力を研修や現場でのOJTを通じて習得していると判断される。今後も、関係者の能力は向上し、持続性が保たれるであろうと判断される。

出典:終了時評価調査 帰国報告会配布資料

7.2 終了時評価の提言、提言を受けてのフォローアップ状況

終了時評価では、プロジェクトに対する提言として以下の点が挙げられた。その内容を抜粋する と共に、提言を受けてのフォローアップ状況を記す。下記の枠内が、提言の内容である。

(1) 中央から地方部の各行政レベルにおける MoFSC と MoFALD の協働促進

MoFSC と MoFALD は、DDC (郡)、VDC (村)、Ward (集落)の各レベルにおいて両省の協働体制が持続するよう尽力する必要がある。協働体制の維持にあたっては、特に以下の点が保証されることが重要であるため、レター等によりこれらの点を関係機関に周知することが望ましい。VDC は、WCC と WCF の協働により作成された CRMP (地域資源管理計画)を VDC の計画策定に反映し、また VDC は CRMP で提示された住民ニーズに対し対応を行う。プロジェクト期間中に、DSCO は DDC と協力して VDC 事務長、ソーシャル・モビライザー、モチベーターを対象とした Handover Meeting (引渡しにかかる会議)を開催し、サビハ・モデル及び WCC・POWER グループに関する関係者の理解を深める。また、これまでの活動の内容や蓄積された知見も同会議で紹介し、本プロジェクト終了後(プロジェクトによるモチベーターが活動を終了すると共に、DSCO の活動対象地も遷移した後の状態)も、VDC による WCC・POWER グループへの支援及びモニタリングが続く仕組みづくりを目指す。DDC と DSCO は、郡レベルにおける情報共有体制を維持するため、本プロジェクトで構築された DWC (District Working Committee: 郡作業委員会)を継続実施することを検討する。この情報共有体制を維持する。ことにより、両機関の傘下にある VDC、WCF、WCC、ソーシャル・モビライザーの関係構築に資する。

<対応>

プロジェクトでは、第 5 年次を通じて上記の方向性で DWC 会合や VDC ワークショップを実施して来た。加えて 2014 年 5 月には、MoFALD から DDC/VDC 内での WCC と WCF の連携を促すレターが手交され、各 DDC に配布された。

(2) Ward レベルの組織間の協働体制の維持/構築

本プロジェクトでは、Ward レベルの住民組織として WCC を構築した。一方、近年では MoFALD のドナー協調枠組みである「LGCDP」が設置した住民組織である WCF が Ward の代表組織及び VDC への直接のつなぎ役として存在感を増してきた状況にある。WCF の能力については地域毎に大きな差があることや、WCF が 2007 年から不在となっている地方議員の代替機関として設置された過渡的な組織であることから、WCF は本プロジェクトの活動を Ward で一手に引き受ける担い手としては適切ではない。よって、本プロジェクトが進めてきた、「各 Ward で WCC を設置し、彼らを直接の支援対象とするも、WCF とも協働体制を築き、CRMP の策定及び VDC への働きかけを共に行う」という選択肢は適切であったと思われる。今後の DSCO によるサビハ・モデルの複製においても、この WCC と WCF の協働体制は確保されることが望ましい。また、政府の方針では今年中に地方選挙が行われる可能性もあることから、DSCO は地方選挙後の地方行政の動向も注視し、その時々に最適な協力体制(住民組織)の選択に努める必要がある。

<対応>

既述のように、MoFALDルートでのDDCへのWCF/WCC連携促進のレターが手交された。他方、MoFSCルートでは、2014/2015年度のサビハ活動予算が9,000万ルピーと増加する予定であることから、より多くの郡でサビハ活動を実施し、同時にWCF/WCC連携の路線を継承していく考えである。

(3) サビハ・モデルの MoFSC への内包化

本プロジェクトでは出口(内部化)戦略文書が策定されており、同文書は現在、MoFSCによる最終承認段階にある。同出口戦略文書では、サビハ・モデルの今後の複製活動について「2014年以降、平均で3郡ずつ複製し、2020年までに25郡への複製を目指す」と記載されており、およその複製規模に関し省内の合意(予定)が見られる。一方、確実な複製活動を保証する観点からは、同記述より一歩踏み込んだ複製計画の策定が望ましく、既に緩やかな合意が関係者間にあると言われている対象地、期間、予算額等の情報が文書でまとめられることが望ましい。

<対応>

上記のように同出口(内部化)戦略は、MoFSCの承認を受けており、ネパール政府の来年度予算(2014年7月16日~)は9,000万ルピーと、今年度の6,000万ルピーから50%増加となる見込みである。これらから、今後、一層のサビハ内部化が促進される、と期待される。本件に鑑みて、プロジェクトではDSCWMと協働で、5月30日に対象8郡のDSCO所長、DSCO-Tech、モチベーターを召集して、今後のサビハ活動の実践に向けたワークショップを実施し、上記の指摘のように具体的なアクション・プランを企画すべく動き出している。

(4) サビハ・モデルの積極的広報

サビハ・モデルは長い協力の歴史により、ネパール側政府への浸透が進み、また継続的なモデルの改善努力により事業そのものが非常に効果的・効率的に実施できる構造が構築されている。サビハ・モデルは、住民発意の流域保全活動のモデルとして強みを持つのみならず、本フェーズにおける行政ラインの巻き込みにより、流域保全に限らない、地方開発モデルとしての潜在的な可能性も持ち合わせていると言える。しかしながら、これらの点につき、現状では関係者以外にサビハ・モデルが持つ価値の広報が進んでいないことから、今後はより積極的に MoFSC 及び MoFALD から関係行政機関や他の開発パートナーに対し広報されることが望ましい。また、JICA ネパール事務所は、プロジェクト専門家の協力も得つつ、LGCDP に対しサビハ・モデルの広報を進め、地方開発手法に関するインプットを行うことが望ましい。

<対応>

プロジェクトでは 2014 年 5 月 28 日に第 2 回全国セミナーを開催し、約 120 名の参加を得た。

(5) サブ・プロジェクトにより設置されたインフラ設備の維持管理

各 Ward で実施されたサブ・プロジェクトでは、複数のインフラ設備が設置されたが、これらの設備の維持管理に関しては方針が未検討のものがほとんどである。よって、残りのプロジェクト期間では、これらのインフラ設備の維持管理方法に関し各 WCC で協議すると共に、維持管理費用の徴収や関連省庁の出先機関との連携を開始することが望ましい。

<対応>

プロジェクトでは、当初からサブ・プロジェクトの支援を得た Users Group に対して、維持管理 の必要性を説いてきた。2014年4月から実施されて来た VDC ワークショップにおいても、上記の 点を強調して、今後の維持管理体制の構築を訴えた。

(6) POWER グループの持続性担保

プロジェクトで各 Ward に設置された POWER グループは、プロジェクト終了後の形態として、一部、協同組合化が検討されている。協同組合の特徴やメリットに関しては既にプロジェクトから各 POWER の代表者に対し説明会を開催しているが、今後プロジェクト終了までに各 POWER グループで納得のいく判断が下されるよう、引き続き DSCO やモチベーターから協議の促進支援を行うと共に、必要に応じ協同組合関連の情報を再度周知することが望ましい。

<対応>

POWER グループについては、グループの基金があることからもプロジェクト終了後の持続性を担保するためにも上記のような議論が度々されてきている。しかし、DSCWM/DSCO 側では、過去に一律的にグループを登録したものの、殆ど継続しなかったという教訓(DANIDA によるNARMSAP プロジェクトの事例)から、当該グループの熟成度によって法人化する時期は異なるもの、という考えである。そのため、プロジェクトでも一律的に組合化の手続きを勧めるのでは無く、グループ自身が時間を掛けて決めて行くプロセスをプロジェクト終了後もDSCOが見守っていくこととした。

加えて、POWER グループの活動は活動内容が所得向上事業であるため、その部分のみにフォカスが充てられがちであるが、そもそも POWER というコンセプトがプロジェクトに組み込まれた背景には、ネパールの農山村では女性や社会的弱者は森林・自然管理に重要な役割を担っているのにも関わらず、村の意思決定過程に組み込めないでいる現状から、POWER 活動をとおして、意志決定過程にも参加できるようになることを目指していた。日々のモニタリングからも、プロジェクトが開催したセミナーで発表した女性たちの発表内容からも明らかであるように、POWER グループが村の中でも認知され、女性が村のさまざまな意志決定過程に参加できるようになっている。こういった側面からも本プロジェクトがネパールのジェンダーと社会的包摂に貢献しているといえるだろう。

第 2 部

第1章 はじめに

1.1 プロジェクトの背景

ネパール国の山間地域では、流域の荒廃が貧困を生み、貧困が流域の荒廃を加速するという悪循環が見られる。JICA はこれまで 15 年に亘り村落振興・森林保全に係るプロジェクトに取り組んできた。その成果であるサビハ・モデル(モデルについては第2章に詳述)は、山間部の流域管理に有効なモデルとして土壌保全・流域管理行政の関係者間で認知が進み、一部地域において継続的に実践されている。一方、ネパールでは 1990 年代より地方分権化を進め、地方における開発行政は郡を中心とする地方自治体に委ねる方針を明確にしている。しかし、セクター省庁の出先機関と地方自治体との連携は必ずしもうまくいかず、住民の多岐に渡る開発ニーズに的確に応えることができずにいる。

これらの課題に対処するため、サビハ・モデルを発展的に拡大することによって、地方開発行政を主管する地方自治体と、専門的課題に取り組むセクター省庁の出先機関、そして地域開発の主体である地域住民を機能的に結び、流域管理事業をはじめとする地域開発行政を効果的に行う仕組みを確立することが求められている。

こうした背景の下、地方自治体と住民組織の計画・実施能力の強化及びコミュニティ単位の流域管理事業の改善を目的とするプロジェクトがネパール政府より要請された。同要請に応えて、JICA は 2008 年 11 月に詳細計画策定調査を実施し、ネパール政府関係機関とプロジェクト基本計画、実施体制等について協議検討を行い、本プロジェクトの枠組みが決定され、2009 年 8 月より実施されることとなった。

1.2 プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は、サビハ・モデルを改良することである。地域住民・村落開発委員会(VDC)/郡開発委員会(DDC)の地域行政ラインと、土壌保全・流域管理を主管する郡土壌保全事務所(DSCO)並びに森林土壌保全省土壌保全流域管理局(DSCWM)の行政ラインの調整を図りながら、中長期的課題にも対応しうる流域管理計画の立案、実施能力の強化を図ることを目的としている。

1.3 全体工程

本プロジェクトの第 1 年次から第 5 年次までの年間活動実績を ANNEX-6 に示す。第 1 年次は DSCWM/DSCO 職員に対するベースライン調査を実施し、それに基づく研修ニーズの洗い出しと研修計画の立案、研修マテリアル作成、研修の開始、さらには WCC と POWER グループの設立(一部は活動開始)が中心であった。第 2 年次から 4 年次にかけては WCC のサブ・プロジェクトと POWER グループ活動の活動支援、研修を通じた CP と住民のキャパシティ・ディベロップメントが活動の中心となった。また 5 年次はプロジェクト終了後にも CP、WCC、POWER グループがその活動を継続していけるよう、先進地域の視察研修、CRMPの再策定(一部は先行して 4 年次に実施)、POWER 向け基金運用研修、また VDC ワークショップなどを実施した。その他、5 年間を通じて各種会合の実施、広報活動等も実施してきた。なお、治安や政治的状況から 5 年間を通して活

動が大きく遅延することはなかった。

1.4 対象地域

本プロジェクトの対象地域は、西部地域に位置する Kaski 郡、Syangja 郡、Tanahun 郡、Parbat 郡、Baglung 郡、Myagdi 郡の 6 郡(以下、西部 6 郡)、並びに中部地域に位置する Kavre 郡及び Sindhupalchowk 郡の 2 郡(以下、中部 2 郡)である。

1.5 実施体制

プロジェクトの実施 CP 機関は DSCWM 及び DSCO である。

地方レベルでは、各郡の DSCO 所長及び DSCO-tech が中心となり、対象地域住民の組織化から参加型流域管理事業の実施、モニタリング等のサビハ・モデルを実施し、現場での技術指導にあたった。また、VDC や DDC に対しては住民による参加型流域管理事業への予算措置及びモニタリングの働きかけを行った。さらに、VDC ごとに 1 名のモチベーターを配置し、DSCO-tech と協調しながら住民活動の促進及びモニタリングを行った。

中央レベルでは、DSCWMがサビハ・モデルのDSCWM内における内部化促進を進めるとともに、 地方開発省(MoFALD)との協働、連携の強化を省レベルにて行った。

図 1.1 にプロジェクトの実施体制を示す。

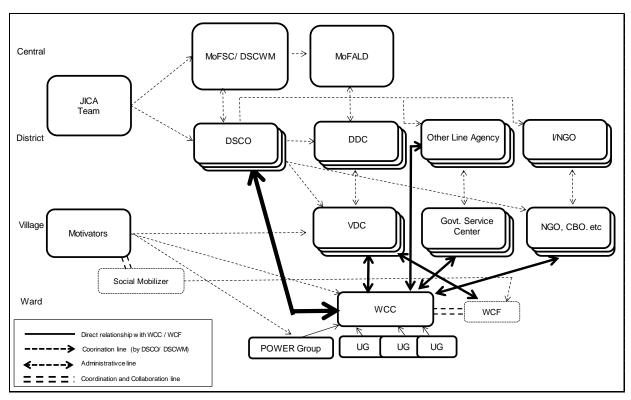


図 1.1 プロジェクトの実施体制

第2章 プロジェクトの実施概念とアプローチ

2.1 サビハ・モデルとは

サビハ・モデルは、下記の通り長い年月を経て変遷してきた。PWMLGP において、サビハ・モデルは次のように定義されている。

地方行政の強化を通じ、コミュニティ・リソースの管理やコミュニティ開発のすべてのステップに 住民の人々が参加することを促進するメカニズム。

サビハ・モデルは、2000 年から 2004 年に JICA によって実施された Community Development and Forest/Watershed Conservation Project の第 2 フェーズの間に命名された。サビハ (SABIHAA) とは、Samudayik Bikas Tatha Hariyali Ayojana (コミュニティ開発と緑化プロジェクトの意) というプロジェクトの通称をネパール語にし、その頭文字を取った名称である。

サビハ・モデルの精神は、1991 年~1994 年に実施された Forestry Extension Project 時に既に生まれていた。その後、Community Development and Forest/Watershed Conservation Project の第 1 フェーズ (1994-1999)、第 2 フェーズと、JICA は DSCWM と協働で、これらのプロジェクトを実施した。サビハ・モデルの精神は次の通りである。

- 貧困の悪循環は、森林という1つのセクターだけを支援して断ち切ることは不可能である。 住民のニーズに応えたコミュニティ開発が行われて初めて自然資源の持続的な管理が実現 する。
- 人々のニーズとイニシアティブに基づいたコミュニティ開発活動が成功の鍵を握る。
- 女性や貧困な人々、不利な立場にいるカーストの人々など、周辺に追いやられた人々が、本 来森林の管理者であり、ユーザーである。

この様に、サビハ・モデルを形成する試みは 1991 年から始まっていた。サビハ・モデルの歴史 を表 2.1 に示す。

Year	Project/Important Events
1991-1994	Forestry Extension Project
1994-1999	Community Development and Forest/Watershed Conservation Project (CDFWCP) Phase I
	Greenery Promotion Cooperation Project (GPCP) Phase I
1995-1998	Development Study on Integrated Watershed Management in the Western Hills of Nepal
1999-2004	CDFWCP Phase II and GPCP Phase II
2000 March	Project site of Phase I attacked by Maoist
2000 August	Phase out of GPCP Phase II
2002	Term of VDC, Ward representative expires
2004-2005	CDFWCP Phase II- Follow-up (F/U)
2004-	Expansion of SABIHAA Model by DSCWM
2009-2014	Participatory Watershed Management and Local Governance Project (PWMLGP)

表 2.1 サビハ・モデルの歴史

当プロジェクトでのサビハ・モデルは、地方分権と地方行政(ガバナンス)の基本概念を内包するところとなった。それに拠って、地方行政を司る機関との連携の必要性に焦点が当てられた。

2.2 プロジェクトにおける地方行政(ガバナンス)

長いサビハの歴史の中で MoFALD がプロジェクトの主要パートナーのひとつとして初めて正式 に関わることになった。1998/99 年度に施行された Local Self-Governance Act や 1999/2000 年度に施行された Local Self Governance Regulation で明記している地方分権の方針と整合するように、人々を 開発の中心にとらえた手法の模索が試されることとなった。

プロジェクトは、コミュニティが主導する開発を通じてコミュニティの人々の生活が向上することを目指すと同時に、政府のサービス提供やガバナンス、社会的包摂を意識した開発のあり方なども改善することを目指した。民主的な価値観を採用し、コミュニティの人々が開発プロセスを実体験することによって、住民の人たちの生活を向上させてきた。これまでも、政府の方針を遵守しながら、政府機関がコミュニティの人々によりよいサービスを提供できるように活動を行ってきており、結果としてコミュニティにおけるガバナンスを強化する方向に向って事業を推進してきた。

プロジェクトでは、マオイスト紛争終結後の政治状況や行政システムの空白の中で、2 つの視点で地方行政を捉えることを認識した。1 点目は、様々なレベルの関係機関との連携強化という視点で、2 点目はグッド・ガバナンスの推進という視点である。

1点目の連携強化に関しては、まずは活動の中心に居る Ward Conservation Committee (WCC)や Poor, Occupational caste, and Women's Empowerment for Resource Management (POWER)グループがお互いに連携を強めながら活動を推進することや、WCC/POWER グループが他の VDC や郡レベルの政府開発事務所や L/NGO を含めた様々な関係者とよい連携や協働を進めていくことを目的とした。特に VDC との連携体制の構築は重要視され、プロジェクトの様々な活動への VDC からの参加が奨励された。また、WCC が自ら VDC やその他の関係機関から支援を引き出すために働きかけを行うことを日常的にサポートした。第5章で述べる組織成長度を自己評価するレーダーチャート手法においても、WCC や POWER グループが他機関と協力・協働する組織の能力を測る指標を作り、定期的に状況を分析し連携構築能力が向上しているかを確認した。

2 点目のグッド・ガバナンスの推進に関しては、コミュニティ・レベルのガバナンスを改善するための要因に注目し、プロジェクト活動を行ってきた。透明性や説明責任、参加、民主的な意思決定メカニズムの確立等はサビハ・モデルの活動の諸プロセスを実践することで徐々に強化されていった。加えてレーダーチャート手法という、WCC や POWER グループの活動や組織の成長度合いを評価する参加型自己評価の手法が、これらのガバナンスに係る要因をコミュニティの人々がどの程度理解し、実践しているか評価するためのツールとして使用された。また、公聴会が透明性の確保のために導入された。これらの手法や活動は、コミュニティ・レベルのガバナンスを強化する上でとても有用であったと確信している。

上記の2つの視点でコミュニティ・レベルでのガバナンス改善を目指した現場では、本来工学系サービスを行う DSCO-tech に対し、まずこれらの概念の理解と行動の変容などの意識改革が求められた。地方行政との連携やコミュニティ・ガバナンスの改善に加え、社会開発の主要な概念(参加型開発、ジェンダー、社会的包括、弱者配慮など)も十分に盛り込んだ研修を繰り返し、また OJT

でのフィードバック等を通じて概念の習熟が進んだ、と認識している。

2.3 連携と協働

当プロジェクトでは、3つのレベルでの連携と協働を目指した。

まず、中央レベルでは、MoFALD と MoFSC 間の連携強化が図られた。MoFALD が実施しているプログラムである、Local Governance and Community Development Project (LGCDP)との連携促進に注力した。

次に郡レベルでは、DDC と DSCO 間の連携強化が図られた。また、DSCO とその他の郡開発事務所、特に DDC、District Agriculture Development Office (DADO)、District Forest Office (DFO)、District Livestock Office (DLO)、District Drinking Water Supply (DDWS)、District Women Development (DWD)などの機関との連携強化も重要視された。

最後にコミュニティ・レベルでは、WCC と POWER グループの相互連携の強化が求められた。また、同 VDC 内の WCC 間の連携がネットワークの構築という形で模索され、WCC/POWER グループとその他の地元のグループ (母親グループ、Community Based Organization (CBO)、青年グループ、協同組合、Community Forest Users Group (CFUG)、その他の住民グループなど)との連携強化も推進された。また、中間レビュー以降は Ward Citizen Forum (WCF)との連携も視野に入れた活動を行った。郡レベルの各開発事務所との連携は WCC/POWER グループにとっては難しいことは承知の上で、そのような連携も出来れば進めたいと考えた。村で活動中の I/NGO との連携は、当然のことながら有効な関係を築くように促した。そして、特に重要なのは、WCC/POWER グループとVDCとの連携関係である。プロジェクトはこれを重要視し、活動をともにする頻度が多ければ多いほど、プロジェクトに対する理解が深まり連携の質が高まるという考えから、プロジェクト活動のうち以下の活動に VDC 事務長の参加を求め、VDC との連携強化を図った。

- プロジェクト開始時の VDC レベルのオリエンテーション
- WCC の計画作成
- サブ・プロジェクト実施前の前渡金の支払い時
- サブ・プロジェクトや POWER グループ活動のモニタリング
- 公聴会
- WCC の自己評価
- プロジェクトが実施する研修
- 中間レビュー、終了時評価
- 全国セミナーやワークショップ
- WCC ネットワーク委員会の会合
- 郡レベルでの会合 (Distric Working Committee (DWC) など))
- VDC レベルでの会合、ワークショップ、WCC/POWER グループメンバーへの研修など

第3章 PDM の変遷 |

本プロジェクトの PDM は、R/D で署名された PDM Ver.0 以降、大きな改訂が 2 回行われている。

3.1 PDM Ver.1.8

R/D 時の PDM Ver.0 では、指標が明確に定義されておらず、第 1 年次中に活動を具体化の上、指標関係を定義することが指示されていた。プロジェクトでは、ネパール側とも協議の上、PDM 改定案を作成し、2011 年 5 月の第 2 回 JCC で Ver. 1.8 が承認された。Ver. 1.8 の主な変更点は以下のとおりである。

- プロジェクト目標と成果がより明確に表現され、指標に目標値が設定された。
- 住民の能力向上をより明確に示すために、成果2「対象地域住民の参加型流域管理事業と地方 行政に関わる能力が強化される」が新たに追加された。

3.2 PDM Ver.2.0

2012 年 1 月下旬から 2 月上旬に行われた中間レビュー以降、サビハ・モデルの DSCWM 内での主流化に向けた活動に注力し実施していたが、Ver.1.8 にはそれらの活動が十分反映されていないため、新たに成果 4 を追加することとなった。新政府発足、MoFSC 新大臣の着任に伴う次官の多忙等で、JCC 会合の場で承認するというプロセスは経ることはできなかったが、関係者と協議し、JCC 会合の場での合意と同等のものとして、MoFSC、DSCWM、MoFALD および JICA 事務所の 4 者で合意ミニッツを作成することとなった。2014 年 3 月に署名が行われ、2014 年 4 月に実施された終了時評価も Ver. 2.0 で実施された。Ver.1.8 から Ver.2.0 への主な変更点は、新たに、成果 4 「サビハ・モデル主流化に向けた活動が促進される」を追加し、併せて指標、指標の入手手段、活動が記載されたことである。

PDM Ver. 0、Ver. 1.8、Ver.2.0 は ANNEX-5 に示す。

第4章 DSCWM/DSCO 職員のキャパシティ・ディベロップメント ■■■

4.1 研修で目指したもの

プロジェクトでは、DSCWM/DSCO 技術者の能力向上を、PDM の成果 1 に「対象地域の DSCO 職員の参加型流域管理に関する能力が向上する」と明記している。

第1年次当初には再委託により DSCWM/DSCO 技術者に対する「ベースライン調査」を実施した。 同調査では、DSCWM/DSCO 技術者は技術的な方向性として法面緑化技術(ネパールでは Bio-enginnering と称する)などについては充分な知識と経験を有しているものの、今後、DSCWM が展開する意向を有している「流域アプローチ」や GIS 技術など、新しい分野のスキルについて弱点を有していることが明らかとなった。

この結果を受け、プロジェクトでは、DSCWM/DSCO 技術者の能力向上について次の4つの方向性で研修を行った。

(1) 参加型流域管理を進めていく上での基本的知識とスキルの付与

主にプロジェクトの初期に「ジェンダー・社会的包摂及び紛争に配慮した開発研修」、「村落開発と地方行政」、「最新技術動向研修」、「参加型計画造りと地方行政」など、一連の集団研修を実施した。概要はこれまでの事業完了報告書に記載している。また、基本的知識を網羅した研修パッケージ 6種類を第1年次末に編集した。これらの研修パッケージを DSCO 職員および各 DSCO が雇用するモチベーターへの研修等に活用した。

(2) GIS など工学的技術の強化

上述の「ベースライン調査」での提言と DSCWM の強い意向により、プロジェクトでは GIS に関して一連の研修を実施した。第 3 年次では、対象 8 郡の DSCO 所長、DSCO-tech を対象に「GIS 入門編」を実施した。その後、DSCWM で実際に 10 人の GIS チームを育成する具体的目標を立てて研修を進めるようになった。この背景には、2009 年度日本政府による森林保全対策の機材無償により DSCWM/DSCO を対象に GIS 機器の供与が決定されたことが挙げられる。

第3年次では、プロジェクト対象8郡のDSCO-tech 全員を対象とした「入門編」に続いて、その中から選抜された10人を対象に「GIS 応用編」を実施した。第4年次から第5年次では合計3回のGIS 研修を実施し、その結果、22郡の「簡易型土壌浸食危険度マップ」が作成された。2013年末には無償機材としてDSCWMにGIS機器が5セット納品され、DSCWMでは本部ビル2階にGISルームを開設して、GISデータの収集と蓄積を進める体制を整えたところである。

(3) OJT を通じてのコミュニティ開発系の技術とスキルの向上

当プロジェクトは以前のフェーズから、コミュニティ・レベルの全ての活動を DSCO-tech の OJT の場として位置づけ、実践してきた経緯がある。WCC の組織化や会合時のファシリテーション、地方行政との連携、各種研修の立案と実施などを通じて、DSCO-tech のスキルは確実に向上したと認識している。

(4) 第3国/本邦研修

プロジェクトではタイ国の The Regional Community Forestry Training Center for Asia and the Pacific (RECFTC)と連携で 3 回の研修を実施してきた。第 3 年次には DSCO-tech を対象に参加型流域管理 研修を実施し、第 4、5 年次に行われた MoFSC/DSCWM の技官を対象とした研修は JICA 地球環境 部と RECOFTC 連携事業の一環として実施された。

また、本邦研修となる JICA 北陸による SATOYAMA 研修にこれまで 7 名の DSCO 所長と 2 名の Local Development Officer (LDO) が派遣されている

DSCWM/DSCO 対象の国内研修および第3国及び本邦研修の実績を以下に整理する。

表 4.1 DSCO/DSCO-tech 向け研修の実績

	指標	1-1	指標 1-2		
アウトプット1:対象地域のDSCOの参加型流域管理能力が向 上する	DSCO kDSCO-techo / **		参加型流域管理に係る研修/WSに参加した DSCO職員の80%が、"Improved participartory watershed management"を理解する		
	DSCO 職員	DSCO技術者	事前テスト(%)*	事後テスト(%)*	
1)DSCO技術者向けOG説明会	2	27			
2) モチベーター向け「ジェンダー・社会的包摂および紛争に 配慮した開発」研修	3	27	41.4	84.7	
3)DSCO技術者向けコミュニティ開発と地方行政	0	13	50.2	66.2	
4) プロジェクト管理研修	7	1	53.3	74.4	
5) DSCO所長向けOJT研修	8	0			
6) プロジェクト管理研修	0	24			
7) 最新動向研修(GIS、流域アプローチ、気候変動)**	5	22	NA	80	
8) 参加型計画と地方行政	2	30	35.4	78.9	
9) GIS研修(基礎)	3	28	NA	Practiced	
10) 参加型流域管理研修(タイ国)	1	30			
11) GIS研修(実践編)	0	8	NA	Practiced	
12) 地方行政研修	3	27	48.4	72	
13) GIS研修(実践編1)	5	6	NA	Practiced	
14) GIS研修(実践編2)	4	7	NA	Practiced	
15) GIS技術を活用した簡易ハザード・マップ作成(土砂崩れ 危険度研修)	5	6	NA	Practiced	
小計	48	256			
合計(人数)/平均点(%)		304	45.74	76.03	

出典:終了時評価調查資料

表4.2 第3国・本邦研修の実績

年次	タイトル/研修先	参加者
3	Perticipatry Watershed Management in Thailand, RECOFTC, Thailand	プロジェクト対象 8 郡の DSCO-techら31名、12 日間
4	Training on Foresty and Watershed Management in Thailand, RECOFTC, Thailand	プロジェクト関係のオフィサーレベル 12 名、9 日間
	International Conference on Forest and Water in a changing enviornment, Fukuoka, Japan	DSCWM 局長、デスク・オフィサ ー、3 日間
5	Regional Seminar on Nepal- Thailand Watershed Management Eperience sharing, RECOFTC, Thailand	MoFSC, MoFALD の関係者 15 名 (および総括専門家),6 日間

4.2 研修の成果

初年次に DSCWM/DSCO に対するベースライン調査を行い、プロジェクト期間内にどれほどの人員をどの分野でどれほどの能力向上を目指すのか、について明確なイメージを構築出来たことは有益であった。本プロジェクトでは教室型の集合研修だけで無く、OJT を能力向上の中核と位置づけ、DSCWM/DSCO 技術者の能力強化に務めてきた。その結果、終了時評価では以下のような評価結果を受けている。

これまでに、参加型流域管理研修、ワークショップは計 15 回開催(第3国研修1回を含む) しており、同研修に参加したのは、DSCO 48 名と DSCO 技術者 256 名である。指標 1-1 で求められている研修名と参加者人数は下記表(略)の通りである。

また、上述の研修のうち 6 つの研修において、プロジェクトは研修前後にテストを実施したところ、平均点が 45.7%から 76%に上昇した。このことから、プロジェクトは指標 1-2 で示した目標をほぼ達成したといえる。

しかしながら、本プロジェクトで実施した研修の受講機会を得たのは、全 DSCO 職員の一部であり、住民のファシリテーション技術や GIS などの工学的技術、また Reduction of Emission from Deforestation and forest Degradation (REDD) などの最新技術についての研修ニーズは依然として高い状況である。

4.3 CP のオーナーシップの醸成

本プロジェクトにはその長い歴史から、サビハ・モデルへの理解、また日本への留学や研修を通じて日本型のマネージメントに馴染んだ人材が多く関係しており、広い意味で日本通、JICAファンが多い、という好条件があった。また、当プロジェクトは、これまでの一連のDSCWM支援のプロジェクトを総決算するもの、として早い時期から「次のフェーズや延長はない」旨が、宣言されていた。そのため、プロジェクトとしても終了までに一定の内部化を目指して活動を行った。特にプロジェクトの後半では、村レベルの活動においてもプロジェクト専門家や雇用スタッフが前面に立つことを徐々に控えるようにし、研修講師などもDSCWM/DSCO職員が務めるように促した。そのため、現場レベルにおいても、関係者の「自分達が、プロジェクトを動かしている」という意識の高まりが見られた。

また、中央レベルにおいても、「サビハ出口戦略」の策定が実現し、DSCWM では途中から「サビハ内部化戦略」と名称を改めるなど、意識の変革が見られる。この「サビハ内部化戦略」は、2014年6月XX日に MoFSC によって承認された。(予定)

加えて、最新の情報では、来年度(2014年7月-2015年7月)のネパール政府予算計画ではDSCWMが進める「(予算費目としての)サビハ活動」に 9,000 万ルピーが配分される見込みとなっている。

第5章 住民のキャパシティ・ディベロップメント

対象地域住民の能力向上(キャパシティ・ディベロップメント)については PDM の成果 2 で「対象地域住民の参加型流域管理と地方行政に関する能力が強化される」と明記しており、本項では、上記成果 2 に対する達成度について述べる。

5.1 WCC と POWER グループの組織化 (Ward レベルワークショップ)

図 5.1 にサビハ・モデル実施に係るフローチャートを示す。 第 1 年次には、郡・VDC レベルのワークショップ後、プロジェクトからのオリエンテーションを受けた DSCO-tech とモチベーターが中心となり、Ward レベルワークショップを実施した。Ward レベルワークショップは Ward 内の住民へのプロジェクト概要説明と WCC と POWER グループメンバーの選出を目的に行った。このワークショップには各世帯から住民が(男女とも)参加し、プロジェクトが対象とする 8 郡 34 VDC 306 Ward において、306 WCC と 306 POWER グループが組織化された。

WCC はコミュニティ・レベルでの意思決定機関として住民活動の核を担い、コミュニティ・リソース管理のための計画策定及び実施、自己評価や公聴会、さらに計画の改訂や再策定までのサビハ・モデルをコミュニティ・レベルにおいて実施する委員会形式の組織である。WCC は概ね9名で構成され、うち30%(改訂 OG ではネパール政府の基準に合わせて33%に変更)以上を女性、そのうちの2名を POWER グループより選出すること、また、ダリット・ジャナジャティを含めることとしている。また、各 WCC に属する POWER グループは、最大30名の女性から構成され、社会的包摂や貧困削減を具体的に実践するために、コミュニティ・リソースを活用した生計向上活動を実施する住民グループである。

5.2 計画策定 (CBRMP、CRMP および AAP)

WCC と POWER グループの組織化に引き続き第1年次において、選定された WCC メンバーが中心となり、自分たちの資源、現在抱えている問題、将来のあるべき姿について議論を行った。その結果は、DSCO-tech とモチベーターか

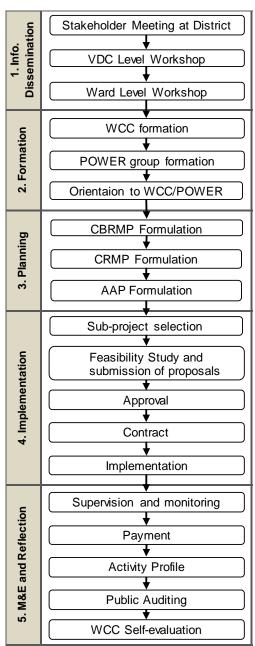


図 5.1 サビハ・モデル実施に係る フローチャート

らの助言を得ながら資源マップ、タイムライン、ベン相関図などの PRA ツールを利用して、長期計画となる"Community Based Resource Management Prospect (CBRMP)" にまとめられた。

その後、CBRMP に基づき、3 年間の中期計画である、"Community Resource Management Plan (CRMP)" が策定された。CRMP は、本プロジェクトのためだけに作られたものではなく、当該 Ward の課題解決のための包括的な計画であり、土壌保全、流域管理分野以外の課題も含んだものである。プロジェクトが支援できるのは土壌保全、流域管理分野のみであるが、この包括的な中期計画である CRMP は関連諸機関と共有して、支援のプラットフォームとすることにより、当該分野以外の課題解決も促進されることを目指している。特に、VDC 予算計画への CRMP の反映についてはプロジェクトからも 5 年間を通じて積極的に働きかけを行った。

CRMP 策定後は、CRMP の活動の優先順位をつけた短期計画である"Annual Action Plan" (AAP)を作成した。全ての WCC で、第1年次に AAP までの計画を策定した。

5.3 サブ・プロジェクトの実施

サブ・プロジェクトとは、WCCが CRMPや AAP に基づき実施していくコミュニティ・リソース管理 のための土壌保全活動を指す。まず、WCC は AAP に基づきその年に行う活動を決定し、要請書を担当の DSCO-tech に提出する。DSCO-tech はその要請書に基づき、計画に実現可能性があるか確認した後、WCC、DSCO、プロジェクトの3者間でサブ・プロジェクトの契約が交わされる。WCCのサブ・プロジェクトについてオペレーショナルガイドライン (OG) では、土壌保全・流域管理関連の活動、と定義しており、プロジェクトからはサブ・プロジ



Kaski 郡 Chapakot、Ward 1、2 の住民が 共同で歩道整備をしている様子

ェクト 1 件につき 64,000 ルピーを支援した。WCC と POWER グループの活動に対する予算は年間で 80,000 ルピーであるが、そのうちの 80%である 64,000 ルピーを WCC のサブ・プロジェクトに対し、残り 20%の 16,000 ルピーを POWER グループ活動に配分している。

第1年次は他の郡よりプロセスが先行した Baglung 郡と Parbat 郡の2郡で42 WCC のサブ・プロジェクトが実施された。第2年次以降は残りの264 WCC を含め306 WCC でサブ・プロジェクトが実施され、第4年次には306全てのWCC において、3サイクルのサブ・プロジェクトが終了した。

プロジェクト各年次におけるサブ・プロジェクトの件数を表 5.1 に示す。なお、一つの WCC において関連の深い複数の活動を実施したケースに対しては、それぞれを一件ずつに数えているため、WCC の数と件数は一致していない。

S.N	Type of SP		Total No.		
3.14	Type of SF	2010	2011	2012	2013
1	Water Source Protection	9	133	138	108
2	Irrigation Scheme	9	38	37	36
3	Road Slope Stabilization	-	22	32	30
4	Foot Trail Improvement	13	30	26	29
5	Land Slide Control	3	34	25	26
6	Greenery Promotion	-	5	27	18
7	Stream Bank Protection/ Riverbank Protection	-	9	9	16
8	Gully Control	3	25	22	10
9	Drainage Channel Construction	-	-	8	9
10	Fencing	-	-	3	9
11	Conservation Pond	5	10	5	6
12	Trail Bridge	-	1	1	1
	Total	42	307	333	298

表 5.1 年次ごとのサブ・プロジェクトの件数

Note; Total number of Sub-project is based on the number of actual activities

プロジェクト各年次における、郡ごと、VDC ごとのサブ・プロジェクトのカテゴリーを集計した ものについては、これまでの業務完了報告書に添付している。

第2年次より実施されたサブ・プロジェクトでは、VDC や他ドナーより WCC に対して資金または資材での支援が行われたケースが見られた。支援の形態としては二通りあり、1) プロジェクトから支援するサブ・プロジェクトへの追加(拡大、延長)的な支援として行われたもの、2) プロジェクトから支援するサブ・プロジェクトではないが CRMP に記載されている別の活動を実施するための支援、である。

住民が自ら支援取り付けのために VDC 等に足を運んだケースに加え、DSCO や DSCO-tech が郡 レベルの会議/ワークショップなどに積極的に参加してプロジェクトに関する情報共有を行って きたこと等が連携につながったといえる。サブ・プロジェクトに対する連携実績については、ANNEX-7 にまとめた。

3 サイクルのサブ・プロジェクト実施を通して、2 つの WCC が共同でサブ・プロジェクトを実施した例や、住民が実施済みのサブ・プロジェクトに対して維持運営基金を設立した例、そして受益者負担がプロジェクトの支援額を上回った例もあった。WCC は自助努力により計画実現のための援助を VDC や他ドナー等から取り付けてきており、自治組織としての認知度があがってきている。

5.4 POWER グループ活動の実施

POWER グループ活動は、社会的に非優遇的な取扱いを受けている住民が主体的にコミュニティ・リソース管理に参加できるように配慮した生計向上プログラムである。前述のとおり、POWER グループは女性のみで構成され、コミュニティ・リソースを活用した生計向上活動を実施していく。5.3 でも述べたとおり、プロジェクトからは1件のPOWER グループ活動に対して16,000 ルピーの支援を行った。

WCC が十分に機能し始めてから POWER グループの組織化を促すように指導したため、POWER

グループは第2年次から活動が本格化した。第2年 次から第4年次までに、プロジェクトは各年次にお いて306 POWER グループに資金援助を行い、3サイ クルの活動を支援した。

POWER グループの活動についても、WCC 同様に VDC や他ドナーより支援を取り付けているケース が多く見られた。WCC が主に資金援助という形で支援を取り付けているのに対し、POWER グループへの支援形態は、資金提供の他に研修等の実施、Passbook (貯金通帳)の提供があった。POWER グルー



Sindhupalchowk 郡 Jalbire VDC, WCC 7 Power グループによる山羊飼養

プの活動は DSCO の予算だけでは対応出来ない活動もあるため、資金支援のみならず、このように 関連諸機関の技術支援、資材等の支援が並行して行われたことは効果的であった。 POWER グルー プ活動に対するプロジェクト以外からの支援一覧についても ANNEX-7 にまとめた。

プロジェクトの年次ごとの POWER グループ活動の件数を表 5.2 に示す。なお、一つの POWER グループで複数の活動を組み合わせて実施したケースに対しては、それぞれを一件ずつとして数えているため、POWER グループ自体の数と POWER グループ活動の件数は一致していない。

Total No. S.N Type of Power Activities 2011 2012 2013 1 Goat Raising 149 155 123 2 Poultry Farming 27 27 23 3 Pig Raising 21 14 10 3 3 4 Buffalo Raising 5 Rabbit Raising 1 1 6 Duck Raising 20 18 7 Vegetable Farming 51 87 56 8 Ginger Farming 7 9 Potato Farming 6 45 81 12 10 Turmeric Farming 13 16 11 Cardamon Farming 2 11 2 7 12 Garlic Farming 1 13 Tomato Farming 14 Fruit Plantation 31 3 15 Fodder Tree 16 Coffee Plantation 17 Candle Making 3 18 Making Incence Stick 19 Soap Making 20 Plastic Pond Construction 364 331

表 5.2 年次ごとの POWER グループ活動の件数

Note; Total number of Pow er Activities is based on the number of actual activities

プロジェクトの各年次における、郡ごと、VDC ごとの POWER グループ活動のカテゴリーを集計したものについては、これまでの業務完了報告書に添付している。なお、第2年次から第4年次ま

での3サイクルを通して、各POWERグループは独立して活動を行い、サブ・プロジェクトのようにジョイントで実施された活動は見られなかった

活動は大別して、畜産系(山羊、家禽、豚等飼養)と栽培系(野菜、生姜、じゃがいも、カルダモン、果樹)に二分されるが、両者の組み合わせも極く少数見られる。割合は全体で見ると家畜系と栽培系それぞれ50%、46%とほぼ同じ割合であった。また、全てのPOWERグループにおいて貯蓄が行われており、WCCと同様にPOWERグループにおいても受益者負担がプロジェクト支援額を上回った例が見られた。

5.5 CRMP 再策定

CRMP は 3 年間の中期計画であることは既に述べたが、3 サイクルのサブ・プロジェクトが終了 した WCC は、CRMP を再度策定することになる。

第 1 年次から 3 サイクルのサブ・プロジェクトを開始した Baglung 郡と Parbat 郡の 42 WCC については、第 4 年次中に CRMP の再策定を行い、残る 264 WCC に対しては第 5 年次に CRMP の再策定を行った。

第4年次に行った 42 WCC での再策定時には、多くの Ward において WCC と WCF が協調して計画づくりを行ったが、計画策定の WCC 会合に VDC 事務長や他ドナーが参加したケースはごく限られていた。このため、第5年次における CRMP 再策定では、VDC 事務長や他ドナーからの参加を促すよう DSCO から VDC に働きかけるよう指導した。その結果、多くの Ward において VDC 事務長や、農業局、畜産局、NGO など多くの機関が参加した。これら諸機関の意見も取り入れて再策定を行った WCC もあるので、プロジェクト終了後、他ドナーより継続して支援が行われることが期待できる。また、ほとんどの Ward において WCC と WCF が協調して再策定を行い、VDC への提出まで協働で行った。再策定においてコミュニティ・リソースマップの作成では、DSCO-tech が GIS 研修で作成した GIS 土地利用図を参考にすることができ、これまでの GIS 研修の成果が実際に活用された。

第5年次での事例として Myagdi 郡の Jhin では、VDC 協議会に WCC と WCF の代表者が招待され、各 Ward に対して、WCC と WCF が協調して作成した計画に対し 5,500 ルピーの予算が配分されることが決定された。また、Sindupalchowk 郡の Jalbire でも、WCC と WCF の共同計画に対し、合計 286,000 ルピーの予算が配分されることが決定された。上記の VDC では、これまでにも VDC との連携事例が多く見られており、プロジェクト終了後も VDC が WCC、WCF に対して連携を継続していくことが期待される。

5.6 WCC の自己評価

プロジェクトは WCC の強み、弱み、機会を評価して自分達の役割を自覚し、結果をレーダーチャートとして可視化することにより将来のポテンシャルを発見するために、WCC による自己評価を3年間実施してきた。自己評価には1) グループ・マネジメント、2) コミュニティの資源管理、3) 調整・連携、4) 地方行政、そして5)キャパシティ・ディベロップメントの5項目にそれぞれ4つの指標を設けて点数づけが行われる。2011年に最初の、出発点となる自己評価が実施された。2012年にその結果には大きな前進が見られ、その傾向は3サイクル目となる2013年にも引き継がれた。

306 の内、171 の WCC (56%) で、2 年目に比べスコアが改善されていた。 (残りは22 の WCC (7%)が2年次と 同様、113 の WCC (37%)がスコアの減 少) 図 5.2 は Tanahun 郡の Dhorfirdi の自己評価 3 回分をまとめたレーダ ーチャートであるが、全ての項目でス コアが年々改善されているのが視覚 的に分かる。

図 5.3 は郡ごとに 3 年間の傾向を見たものであるが、 Kaski 郡、 Syangja 郡 、 Parbat 郡 、 Myagdi 郡 、

Sindhupalchowk 郡の5郡 では 2 回目よりスコア が上回った。

過去 3 回の評価を比べると、34 VDC のうち 実に32の VDC がスコアを上げている。(残り 1VDC は変化なし、 1VDC はスコアが減少) 3 回目で減少した Tanahun郡、Baglung郡、 Kavre 郡については、 DSCO-tech の異動によりファシリテーション

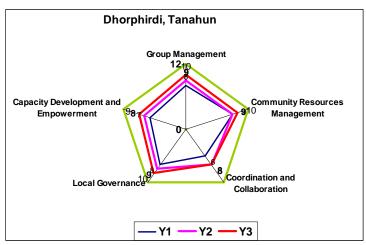


図 5.2 自己評価スコアの例(Dhorphirdi、Tanahun 郡)

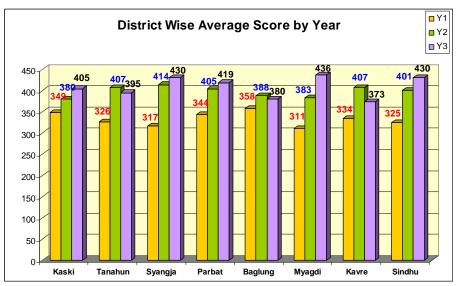


図5.3 郡ごとの3年間のスコアの変遷

が 2 回目までとうまく整合できなかった可能性や、サブ・プロジェクトの支援が終了したことで WCC の月例会合の機会がやや減ったこと、さらに国政選挙による混乱などに起因すると分析して いる。

3回の自己評価を通して見ると、上述した通り2回目の自己評価で1回目に比べると大きなスコアの前進を見せた。プロジェクトからの支援はサブ・プロジェクトへの資金支援を核として、各種の研修と視察研修を行ったが、サブ・プロジェクトの実施を通してOJTを実践しながらWCCが確実に組織としての能力を強化してきた、と言える。

第5年次においては、改訂版 OG に記載されている指標に従って、4回目となる自己評価を全ての WCC で実施した。改訂された指標は、それまでのプロジェクトの事業内容に沿ったものから、より DSCO の業務内容に沿ったものになっているため、DSCO や DSCO-tech にとっては今後複製活動(サビハ複製アプローチ)地域等で活動していく上でも良い OJT の機会となった。

5.7 POWER グループの基金運用研修兼主流化研修

プロジェクトでは、第5年次において34VDCの306POWERグループの全てを対象に、基金運用研修兼主流化研修を実施した。基金運用研修ではPOWERグループが貯蓄しているグループ基金の運用を改善するためのもので、主に協同組合の運営方法を模倣する帳簿の付け方を学んだ。主流化研修とは、プロジェクト終了後のPOWERグループの出口戦略に関して、VDCで活動する女性協同組合の代表や他の女性グループの代表、郡政府事務所の関係者などを招いて活発に協議した。

本研修は、POWER グループにとって、プロジェクト終了後も活動を継続していく上での選択肢を考える良い機会となっただけでなく、研修後、具体的に協同組合に所属することを決定したPOWER グループが 2014 年 6 月末時点で 13 件確認できている。ただし、当該グループの熟成度によって法人化の時期は異なると考えられるため、一律に組合化の手続きを勧めるのではなく、グループ自身が時間をかけて決めていく、という方向性でプロジェクト終了後も DSCO が見守っていくことを確認した。

5.8 WCC 向け視察研修

プロジェクトでは、306 WCC のうち、第 4 年次には Parbat 郡と Baglung 郡 6 VDC の 54 WCC に対して、第 5 年次には残り 28 VDC の WCC に対して、本研修を実施した。

WCC から 3 名 (少なくとも POWER グループからの 1 名を含めること)、VDC 事務長、プロジェクトのモチベーター、複製活動地域担当のモチベーター、LGCDP のソーシャル・モビライザー、DSCO-tech が本研修に参加し、DSCO-tech は、視察先の検討、視察先との連絡等も行った。

視察研修の目的は 1) コミュニティ開発のための組織的なキャパシティを高めること、2) 先進農家の活動を視察することにより、WCC メンバーがよりよい将来計画を立案できるような機会を与えること、3) 家畜飼育、アグリビジネス、グループ・マネジメント等の技術的な側面のみならず、資源管理とコミュニティ開発における様々な知識・理解を高めること、である。また、視察先は以下の 4 つのテーマ:1) グループ・マネジメント / 組織開発、2) 女性のエンパワーメント/ 貯蓄と貸付、3) 資源管理、4) 所得向上生活向上から選定された。

本研修後、果樹栽培やコーヒー栽培を新たに始めたWCCやPOWERグループがあった他、POWERグループ間での合同での生計向上の実施や組合の設立が決まったVDCもあった。WCCやPOWERグループにとって、見学地での先進農家の取り組みは、外部からの支援がなくても、適切なビジョンと絶え間ない努力をすることにより、多くの事が出来ることを学ぶよい機会となった。

第6章 PWMLGPにおける地方行政

PDM の成果 3 で「参加型流域管理における地方行政のコンセプトが理解される」と記されている。 プロジェクトでは 2 つの視点で地方行政を捉え、活動を進めてきた。1 点目は、様々なレベルの 関係機関との連携強化という視点で、2 点目はグッド・ガバナンスの推進という視点である。ここ では特に、PDM に記載されている活動内容に焦点をおいて、連携の達成度などを考察する。

6.1 地方行政/ガバナンスに係る研修の実施

プロジェクトの期間中、特に現場で活動する DSCO-tech やモチベーター、VDC 事務長に対して 地方行政/ガバナンスの分野で様々な研修を実施した。

(1) 「ジェンダー・社会的包摂及び紛争に配慮した開発」研修

第1年次の $2\sim5$ 月にかけて、DSCO-tech、モチベーター、VDC事務長を対象として、8郡で9回の研修を Samuhik Abhiyan (NGO) に外部委託で実施した。ガバナンスの重要項目である「参加」において、ジェンダーや社会包摂の視点でより望ましい参加を促すことが出来るように、また、紛争と自然資源管理/地方行政との関連性の知識を高められるように、研修内容は構成された。9回の研修で、合計 181名が参加した。

(2) モチベーター対象「村落開発と地方行政」研修

第2年次は、PWMLGPと複製事業のモチベーターを対象に、8郡で実施された。村落開発や組織開発のコンセプトなど基本的な概論を含め、グループ・ダイナミクス、住民参加、リーダーシップ、地方行政、公聴会、ネットワーキングなど、ガバナンスに欠かせない重要な要素を学ぶ貴重な機会となった。8回の研修で、合計62名のモチベーターが受講した。

(3) WCC/POWER グループ対象「グループ・マネジメントと組織開発」研修

第 2 年次は WCC や POWER グループのメンバーを対象としたグループ・マネジメントと組織開発研修が 2 日間にかけて各 VDC で実施された。2010 年 11 月~2011 年 1 月にかけて 34 VDC で 34 回の研修が行われ、約 650 名が受講した。研修は主に DSCO や DSCO-tech などが講師とファシリテーションを担った。2 日目は地方行政とグッド・ガバナンスや公聴会などの内容で、この分野での知識も強化した。

(4) 「参加型計画作りと地方行政」研修

第3年次には、(1)同様 DSCO-tech、モチベーター、複製活動郡のモチベーター、VDC 事務長を対象として、8郡の対象者を5つのグループに分け、3日間のワークショップ形式の研修を4箇所5回に分けて実施した。講師派遣はSamuhik Abhiyanに委託した。次の4つの研修の目的を掲げた。①プロジェクトと地方行政の連携メカニズム、その可能性の整理を行う。②地方行政と連携した参加型計画作りの14ステップのプロセスを学ぶ。③WCC、モチベーター、VDC 他との連携にあたっ

てのそれぞれの役割を確認する。④WCC が立案した CRMP と APP をいかにして VDC プランへと 昇華していくか、を検討する。合計で 121 名が受講し、ガバナンスの理解を深めた。

(5) 「地方行政」研修

第4年次は、特にプロジェクト8郡の複製 VDC を対象に、3年次の「参加型計画作りと地方行政」研修を3日から2日間に短縮して8郡8箇所で行った。この研修の焦点は、今後どのようにWCCとWCFの連携を進めていくか、にテーマを絞り、参加者もLGCDPのソーシャル・モビライザーや郡のファシリテーターなども招聘し、合計174名が参加し、連携に関する議論を活発に行った。第1年次、第3年次同様、Samuhik Abhiyan に委託した。研修前のテストでは平均が4.8(10点満点中)であったが、研修後のテストでは平均が7.2と上昇し、参加者の地方行政/ガバナンスへの理解度が上がったことがうかがえた。

6.2 VDC レベルワークショップ

VDC レベルでの連携を強化するためには、各 VDC で開発関係者を招聘し、当該 VDC の問題を話し合う場の提供が不可欠である。プロジェクトでは、5 年間を通して以下の 3 回のワークショップを実施し、VDC レベルにおける WCC や POWER グループと開発関係機関の連携を図ってきた。

(1) 第 1 年次の VDC レベルワークショップ

第1年次は、プロジェクト概要説明と参加者からのフィードバックを得ることと、対象 VDC でプロジェクト活動を行うことに対して関係者から合意を得ることを目的としてワークショップを開催した。当プロジェクトでは地方行政/ガバナンスの強化が謳われており、DDC や VDC との協力が重要であることが強調された。

(2) 第 4 年次の VDC レベル交流ワークショップ

中間レビューを受け、当プロジェクトと LGCDP の連携強化が求められ、VDC や Ward レベルの連携のあり方を再認識する必要が出てきたことから、第 4 年次の初頭に全 34 VDC で交流ワークショップを行った。ワークショップでは、VDC 内で活動する開発関係者間 (政府の出先機関、I/NGO、協同組合、母親グループ、青年グループ、政党等)で有益な連携を進めるという目標と、また LGCDPの WCF と WCC の協働を推進するという目標を十分果たした。このワークショップ後に WCC は CRMP 改訂及び再策定の活動を行ったため、多くの Ward で WCC と WCF が実際に協働で Ward の開発計画を作成した。

(3) 第 5 年次の VDC レベルワークショップ

プロジェクト終了に当たり、全34 VDC でワークショップを開催した。主な目的は、①過去5年間の活動進捗や達成度を振り返る、②プロジェクト終了後は WCC や POWER グループのモニタリングを VDC やソーシャル・モビライザーに引き継ぐこと、③CRMP を VDC の開発計画の参考にするよう要請すること、④VDC に対してこれまでの WCC や POWER グループへの支援や協力に感謝

を表した感謝状を授与すること、である。ワークショップは VDC の中心地で実施され、VDC 事務 長を議長に、WCC や POWER グループの代表、WCF の代表、LGCDP のソーシャル・モビライザ ー、政党代表、その他郡出先機関の担当者、I/NGO、各種住民グループなどの代表など約 40 名を招 待して行われた。ワークショップは DSCO 所長や DSCO-tech、モチベーターがファシリテーション の役割を担って実施された。

6.3 サブ・プロジェクト実施にかかる連携の達成度

PDM では、全 306 WCC のうちの 5%において、サブ・プロジェクトの連携を達成することを目標としていた。実際には、表 6.1 に示す通り第 2 年次で 27%、第 3 年次で 42%、第 4 年次で 33%と第 3 年次より多少減少したものの、PDM の目標を大きく上回る結果となった。

25, 0.1	A C. I J J J T J T J T T T T T T T T T T T T							
年度	連携数	%						
第2年次	84	27%						
第3年次	129	42%						
第4年次	101	33%						

表 6.1 サブ・プロジェクトの連携数

上記の連携実施機関の内訳を見てみると、以下の通りである。

支援機関	第2年次	第3年次	第4年次	連携合計数				
VDC	71	81	121	273				
郡レベルの政府事務所	14	31	19	64				
I/NGO	2	8	10	20				
その他	12	29	9	50				
合計	99	149	159					

表 6.2 サブ・プロジェクトの連携実施機関の内訳

連携実施機関の詳細

VDC 273 件、DSCO 40 件、DDC 12 件、DADO 7 件、CFUG 8 件、個人寄付9 件、学校 5 件、Youth Club 5 件、Paurakhi Nepal 5 件、母親グループ 5 件、Phase Nepal 4 件、CEAPRED 4 件、DWSSO 3 件、2 件以下: NEA、Livelihoods and Forestry Programme、IUCN、LGCDP、ID Nepal、IDE Nepal、Initiative for Climate Change、ACAP、NCELL、Health & Education for All、Cooperative Road User Group、Women Group、Water User Group、Agriculture Group、Brahmin Samaj、Bhujel Samaj、Gurung Samaj、Federation of Indigenous Ethnic Group、CBO

第 4 年次には制憲議会議員の選挙に予算が重点配分されたことに加えて、LGCDP がフェーズ 1 の 4 年間の実施期間を終え、2012 年 7 月から 2013 年 7 月の 1 年間はレビューおよびフェーズ 2 へ向けての準備期間としたことから郡や VDC に配分される予算が無かったことも VDC 予算の減額の理由のひとつである。一例として、VDC の予算推移の例を表 6.3 に示す。

郡	VDC	2010/11	2011/12	2012/13	2012 年度の前年比 減額の割合
Kaski	Lwangghalel	3,440,000	3,188,000	1,500,000	-53%
Baglung	Paiyunpata	2,270,350	2,349,420	1,500,000	-36%
Kavre	Devbhumi Baluwa	5,035,000	2,908,633	1,500,000	-48%

表 6.3 2010 年度から 2012 年度の VDC 予算の変遷と 2012 年度の前年比減額の割合 (ネパールルピー)

データの取れた 31 VDC 中、30 VDC では、2012 年度の VDC 予算は 2011 年より減額しており、減額率の平均は約 34%であった。1 VDC では 2011 年度と 2012 年度の予算は同額であった。

上記のような状況の下、2012 年度は 2011 年度に比べて大幅に WCC との連携ケースが減ることが予想されたが、9%の減少に留まった。WCC に関しては、26 VDC の 93 WCC において 101 件の連携事例があり、そのうち 72 件 (71%) が VDC からの支援であった。資金による支援に加え物資による支援も現金換算した連携金額の合計は、7,964,421 ルピーであった。

2012 年度に VDC の予算が減ったにも関わらず、WCC への連携事例がそれほど減らなかった理由として考えられることは、VDC の WCC への認知度が定着したことが挙げられる。WCC が透明性の高い活動を過去 3 年間継続的に行ってきた実績を示したことによって、VDC の信頼度も上がり、助成金の提供に繋がった。また、WCC や POWER グループが関係機関に支援を求める働きかけを積極的に行った結果でもある。以上のことから、WCC の支援獲得能力も確実に上がっていると推察する。先に述べたように、年次ごとの WCC と POWER グループの連携実績については、ANNEX-7に示している。

6.4 POWER グループ活動にかかる連携の達成度

POWER グループ活動の連携について、特に PDM では記載されていないが、プロジェクトでは、WCC のサブ・プロジェクトと同様に、全 306 POWER グループのうちの 5%の達成を目標とした。連携件数の計算方法として、例えば、同一 POWER グループに対して VDC より資金援助があり、NGO から野菜栽培研修と保健栄養研修が行われた場合は、連携数を 3 件と計算している。連携数は下表の通り第 2 年次では 8%達成され、第 3 年次で 33%、第 4 年次で 50%の連携達成と WCC の連携件数に劣らず良い結果となった。

 年度
 連携数
 %

 第 2 年次
 25
 8%

 第 3 年次
 101
 33%

 第 4 年次
 155
 50%

表 6.4 POWER グループ活動の連携数

上記の連携数の内訳を見てみると、次表の通りである。

支援機関	第2年次	第3年次	第4年次	連携合計数		
VDC	18	32	45	95		
郡レベルの政府事務所	5	46	3	54		
I/NGO	2	28	103	133		
その他の機関	0	0	4	4		
合計	25	106	155	286		
連携実施機関の詳細						

表 6.5 POWER グループ活動への連携実施機関の内訳

VDC 95件、Phase Nepal 94件、DSCO 33件、DADO 2件、CEAPRED 9件、ENPHO 8件、Cottage & Small Industry Development Board 7件、Sath Sathai Organization 11件、Tuki Association 3件、WDO 3件、District Forest Office 2件、District Health Office 2件、District Livestock Office 2件、1件のみ(District Cooperative Office、GEFONT、NEFIN、MDM、Atmanirbhar Cooperative、Local Cooperative、Nepal Tamang Ghedung、Paraligal Committee、Green Wealth Pvt. Ltd.)

POWER グループへの連携実績で顕著なのは、サブ・プロジェクトに比べ I/NGO による支援が多いことである。特に第4年次の実績を見ると、PHASE Nepal という NGO による連携数が75 件あった。これは連携合計の48%、約半分を占める。この特定のNGO からの支援が多かった理由は、野菜栽培や家畜飼育、養蜂などの2-3 日間の生計向上研修が、対象 VDC における全 Ward の POWER グループメンバーを対象として実施されたためである。また、支援した機関数/案件数は155 件であるが、支援を受けた VDC や Ward の数は表6.6 の通り、9 VDC (26%) と62 Ward (20%) であり、WCC の連携獲得率に比べると多いとは言えない。これは、Sindhupalchowk 郡のプロジェクト対象 VDC に入っているNGO が、複数の研修をその限られた地域のPOWER グループメンバーに集中的に供与したためである。今後は、より多くのPOWER グループが同様の支援を得ることが望まれる。

表 6.6 POWER グループ連携を達成した VDC 数と Ward 数

レベル	第2年次	第3年次	第4年次
VDC	7	7	9
Ward	25	61	62

第 2 年次から第 4 年次までの POWER グループに対する支援実績のある VDC を比較すると、第 2 年次は 7VDC、第 3 年次も 7VDC、第 4 年次は 9VDC と、数の上での増加はほとんど見られない。 Ward レベルで見てみると、第 2 年次の 25 Ward からは、第 3 年次の 61 Ward、第 4 年次の 62 Ward と第 2 年次から第 3 年次に増加が見られるが、全 306 Ward に対する 62 Ward は全体の 20%であることから、まだまだ実績数は伸びる見込みがあると考えられる。

また、表 6.5 に連携実施機関の内訳を示す通り、VDC による POWER グループへの連携実績は、全体 306 のグループにおいて、第 2 年次は 5%、第 3 年次は 10%、第 4 年次は 14%と、WCC への連携実績(第 2 年次 23%、第 3 年次 26%、第 4 年次 39%)に比べて低い実績率であった。しかし、今まで他機関から資金や研修の機会を得るために働きかける経験のほとんどなかった女性たちがこのような結果を出したことは評価すべきであると考える。

6.5 DWC 会合

DWC 会合は、郡レベルの関係者が集い、プロジェクトの進捗を関係者と共有するモニタリング・メカニズムである。通常、DWC 会合は LDO が議長を務め、主な参加者は郡レベルの政府機関、関連プロジェクトの代表、NGO/INGO などの代表、VDC 事務長、WCC や POWER グループの代表、モチベーターや LGCDP のソーシャル・モビライザーなどである。内容は、まずは DSCO 所長が進捗報告を行い、質疑応答、LDO などの議長の挨拶という、1 時間半ほどの会議である。ファシリテーションも DSCO が担う。第 3 年次からは年 2 回実施し、その内 1 回は、出来るだけ現場訪問することを指導してきた。

第1年次から第5年次に実施されたDWC会合の詳細は下表の通りである。

S.N.	District name	1 st Year	3 rd \	/ear	4 th \	⁄ear	5 th \	/ear
5.IV.	District name	DWC	1 st DWC	2 nd DWC	1 st DWC	2 nd DWC	1 st DWC	2 nd DWC
			1 Feb,	15 May,	4 Oct,	23 May,	18 Sep,	6 Apr,
1	Kaski	28 Jan, 2010	2012	2012	2012	2013	2013	2014
			13 May,		11 Oct,	30 Apr,	22 Dec,	7 Apr,
2	Tanahun	2 Feb, 2010	2012		2012	2013	2013	2014
			18 Mar,	28 May,	21 Dec,	3 Jun,	24 Oct,	18 May,
3	Syangja	3 Feb, 2010	2012	2012	2012	2013	2013	2014
			16 Mar,	12 June,	14 Oct,	31 May,	30 Sep,	7 May,
4	Parbat	4 Feb, 2010	2012	2012	2012	2013	2013	2014
			21 Mar,	29 May,	25 Nov,	28 May,	6 Oct,	12 May,
5	Baglung	5 Feb, 2010	2012	2012	2012	2013	2013	2014
			22 Mar,	14 May,	12 Oct,	30 May,	29 Sep,	4 May,
6	Myagdi	29 Jan, 2010	2012	2012	2012	2013	2013	2014
		13 May,	14 Feb,	4 Jun,	9 Nov,	20 May,	30 Sep,	23 May,
7	Sindhupalchowk	2010	2012	2012	2012	2013	2013	2014
			16 Jan,	8 Jun,	5 Oct,	6 May,	13 Dec,	
8	Kavre		2012	2012	2012	2013	2013	

表 6.7 DWC 会合開催日

第1年次は、1回のDWC会合を開催した。第2年次に関しては、JICA予算の減少や、ネパール側予算の遅配によりDWC会合という形式での会合は開催されず、郡レベルで開催される各種会議の場をプロジェクトの活動内容の紹介・報告の機会として捉え、積極的に情報共有を行った。第3年次から第5年次は各郡で年2回の開催が実現した。第4年次の2回目に開催されたDWC会合はジョイント・モニタリングと称して現場視察を行った。



Sindhupalchowk 郡 Jalbire で開催された第 4 年次 2 回目の DWC 会合の様子(中央は DSCO 所長)

このようにプロジェクトの関係者が集い、情報

を共有するのは非常に有益な機会であると、ネパール側の関係者からも評価されている。当初は郡レベルの政府機関が主な参加者だったが、第3年次から VDC 事務長も VDC とのさらなる連携促進のために参加者に加えることになった。これによって、地方行政の郡レベルと VDC レベルで情報を共有することが可能となった。DWC 会合において、DDC の長である LDO より直接 VDC 事務長

に指示が伝えられることになるため、より効果的な連携が促進されることから、DWC 会合を実施する意義は非常に高い。

DWC 会合では、WCC と WCF の活動の重複を避けるべし、という意見や VDC がこれら似たような活動をする場合には調整をうまく取るように、という意見が頻繁に聞かれた。各 VDC 事務長も、DWC 会合は様々な開発パートナーを VDC のレベルで連携を促進する自分たちの役割を再認識する機会となるとして、今後の継続を希望している。郡レベルの関係者は既存の住民組織を活用してそれぞれのサービスを提供する利便性をよく理解しているため、WCC や POWER グループを活動の対象者として自分たちの活動を実施したという話も多く共有された。

POWER グループを対象に小規模家内工業委員会と DSCO が裁縫の研修を行った例 (Sindupalchowk 郡 Jalbire) などの郡開発事務所同士の連携実績や VDC が WCC や POWER グループの活動を支援したケースを多く聞くことによって、連携の重要性を POWER グループメンバーが認識し、連携に重点を置いて活動を行ってきたため、連携実績が徐々に増えたと推察される。

終了時評価の提言にも、DWC 会合の継続の必要性について言及があり、プロジェクト対象郡の DSCO 所長も継続したい意向を示しているため、ぜひ今後も DWC 会合のような定期的な情報共有 の場づくりを実践して欲しいと期待している。

6.6 LGCDP との連携

プロジェクト当初から LGCDP についての情報収集を行った。第3年次に行われた中間レビューで本プロジェクトの現場レベルでの実績と経験を MoFALD や DDC と共有することにより、MoFALD と DDC の取り込みを強化することが指摘されたことを受け、WCC が毎年行う CRMP の改訂を WCF と協調して行うように働きかけた。また、中間レビューの提言の通り、DSCWM と MoFALD によるメモランダムの調印を実現させた。さらに、LGCDP の課題グループや地域事務所が開催する不定期会合やワークショップに参加してプロジェクトの活動を紹介したり、本プロジェクトが主催するセミナーで LGCDP 関連の発表の場を設けたりするなど、LGCDP の現状を理解することに注力してきた。第4年次と第5年次における LGCDP との連携活動の詳細を以下にあげる。

(1) WCC と WCF による協働計画

LGCDP はフェーズ 1 の 4 年間の実施期間を終え、2012 年 7 月から 2013 年 7 月の 1 年間はレビューおよびフェーズ 2 へ向けての準備期間を設けた。その間は郡レベルの予算も無く、Ward の開発計画を策定するなどの最低限の活動のみが進行中であった。第 4 年次から、プロジェクトは WCC やPOWER グループの計画作成や月例会議などの活動を WCF と協働で行うよう、実際に現場で活動を担う DSCO-tech やモチベーターを指導した。

第4年次では、多くの VDC において、WCC と WCF が協働して CRMP を練り上げたことが確認できた。また、この活動は、Ward ごとに以下の3つのパターンがあることがわかった。

パターン1: WCC や WCF のみならず、VDC 事務長やその他の関係者も広く会合に参加して、本当の意味での合同計画を作成し、合同で VDC に Ward の計画として提出した。

パターン2: VDC からの代表やその他の関係者の参加は無いが、計画作成は WCC と WCF が合

同で行い、Ward の計画として合同で VDC に提出した。

パターン3: WCCとWCFは一緒に計画作成を行なったが、別々の計画をVDCに提出した。

パターン 1 のような理想的な形は Tanahun 郡 Dhorfirdi でのみ確認された。ほとんどのケースは、パターン 2 のように合同で計画を作成したが、そのプロセスに VDC からの代表や WCC/WCF/POWER グループ以外のグループや開発パートナーからの参加は無かった。パターン 3 は、サイトの担当 DSCO-tech が CRMP を土壌保全や流域管理に特化したものでないといけないと誤解しているケースに関してこのようなケースが見られた。

第5年次における CRMP の再策定は、WCC/POWER や WCF のメンバー以外の Ward 関係者も多く参加して、土壌保全流域管理セクター以外の活動も多く盛り込んだ統合的な計画となった。第4年次との大きな違いは、多くの VDC で VDC 事務長や事務長代理が CRMP の再策定に参加したことである。VDC 関係者が参加することによって、WCC と WCF が協働で作った計画が VDC の開発計画に反映される可能性が高まった。第5年次に関しては、上記のパターン1は約80%、パターン2は15%、パターン3は5%というのがプロジェクトによるモニタリングからのおおよその結果である。

プロジェクトのモチベーターは 2014 年 7 月を以って雇用を解かれるが、WCC のメンバーが LGCDP のソーシャル・モビライザーを牽引し、WCF とともに Ward レベルの開発計画は継続的に 作成されると期待される。本プロジェクトの要の活動である Ward レベルの計画作りはこのように して LGCDP に引き継がれる、と認識することもできる。

(2) DSCWM と MoFALD によるメモランダムの調印

中間レビューの提言の 1 つにサビハ・モデルの主流化に関して DSCWM と MoFALD が合同のメモランダムを作成することがあった。 DSCWM の局長と MoFALD の次官補が 2012 年 12 月 26 日に会し、今後さらに両者は WCC/POWER グループと WCF/CAC (Citizens Awareness Center)が協働で様々な活動を行うことで連携を進めていくことでメモランダムを作成し、両者が署名を交わした。 DSCWM と MoFALD は、関係 11 郡(プロジェクト 8 郡と新規複製 3 郡)のそれぞれの DSCO と DDC へメモランダムを送付し、決定事項を順守するよう通達した。このメモランダムについては、「第 3 年次完了報告書」に添付したので参照ありたい。

(3) セミナーや会合を通じた情報共有や協働

1) Environment Thematic Group Meeting への参加

LGCDP には 8 つのテーマグループがあり、プロジェクトは環境テーマグループの第 2 回(2012 年 2 月)と第 3 回(2012 年 6 月)の会合に参加した。2 月の会合では、MoFALD や LGCDP のスタッフ以外は、UNDP、CCO、GIZ、DFA、JICA などから 12 名程度の参加があった。まず MoFALD の環境課がこれまでの活動の成果や問題分析を発表し、LGCDP の次フェーズの活動について提案を行った。特にポリシーに関する発言が多く、また郡で環境を担当している人材のキャパシティ・ビルディングの必要性が指摘された。6 月の会合では、当プロジェクトの活動についても発表し、今

後 LGCDP と連携していきたい旨を共有した。その後、LGCDP フェーズ 1 が終了し、フォローアップ期間から現在まで環境グループの会合が実施されていない。しかし、LGCDP の環境テーマグループ担当者とは、PWMLGP の課題別セミナーへの参加などを通して、情報共有を継続してきた。

2) Social Mobilization Harmonization Workshop への参加

LGCDP が 5 つの開発地域ごとに開催したワークショップに、プロジェクト関連地域である西部と中部の会合にプロジェクトからも参加した。西部の会合は Pokhara で、中部の会合は Hetauda で実施された。2012 年 4 月 19 日に実施された Pokhara でのワークショップには、当プロジェクトをはじめ、UNICEF、NGO Federation、CARE Nepal、GONESA、Action Aid、Save the Children、GIZ、MEDEP などが参加して行われた。LGCDP からは、プロジェクトのコンセプトやアプローチ、現在までの進捗状況が共有された。当プロジェクトからも事業内容を参加者と共有した。

2012 年 4 月 30 日に実施された Hetauda でのワークショップも、Pokhara のワークショップと同様の内容で行われた。ここでの参加団体は、UNICEF、UNFPA、 GIZ、UNDP、MEDEP、Hervetas、Heifer International、などであった。各参加団体も自分たちの事業を紹介する時間が設けられており、当プロジェクトの事業モデルを共有する機会を得た。グループ・ワークでは、LGCDP を取り巻く現状や問題点を話し合い、それらを改善するために各自が出来ることを書き出してそれぞれの団体がお互いに協力・協調して事業を進める必要性を確認した。

3) PWMGLP 主催のセミナーでの連携

プロジェクトは5年間に3つのポリシー・レベルのセミナーを実施した。2012年5月18日の第1回全国セミナー、2013年12月の課題別セミナー、そして2014年5月の第2回全国セミナーである。これらのセミナーでは、いずれにおいてもDSCWMが主にセミナーの運営を行ったが、MoFALDから関係者を得られたことのみならず、発表や挨拶を通じて、関係者がMoFSC/DSCWMとMoFALDの連携強化の必要性を認識する好機となった。また、課題別セミナーでは、セミナーの当初の準備段階からMoFALDの当プロジェクト担当のRamesh K.C.氏が関わっており、同氏が地方行政の課題としてネパールの地方行政の現状やLGCDPの現状などを発表した。また、LGCDPから参加した環境専門家は、プロジェクトがWCCとWCFが協働でWardの開発計画を策定することを推進していることや実際に協働で作成した計画がVDC評議会に提出されていることを高く評価する発言をした。また Kaski 郡のLDOも同様に、このような働きかけに感謝の意を示し、プロジェクトとしても、中間レビュー以降取り組んできた LGCDPとの連携をこのような形で示すことができ、喜ばしいことであった。

6.7 他機関との連携

(1) 関連 JICA プロジェクトとの連携

プロジェクト実施期間に MoFALD をカウンターパートとする JICA プロジェクトは PWMLGP 以外に 3 つあった。GeMSIP(ジェンダー主流化及び社会的包摂促進プロジェクト、2009 年 2 月~2014

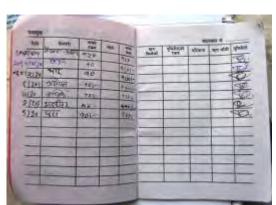
年 1 月)、COMCAP(コミュニティ内における調停能力強化プロジェクト、2010 年 1 月~2013 年 9 月)、SMES2(モニタリング評価システム強化プロジェクト フェーズ 2、2011 年 11 月~2015 年 5 月)の 3 つである。これらのプロジェクトは不定期だが会合をしばしば持ち情報共有を行った。

2012 年 3 月 23 日には、地方行政系の 4 つのプロジェクトの関係者が集まり、それぞれの中間レビューの結果を共有する勉強会を実施した。2012 年 12 月 7 日には、LGCDP のドナーの 1 つである GIZ の事務所で、JICA の地方行政に関わるプロジェクトと JICA 事務所の代表が会して、JICA のプロジェクトがそれぞれどのような活動をやっているか発表し、情報を共有した。

それ以外にも、それぞれが実施するセミナーやワークショップにはお互いに招待し合い、常に情報共有するように心がけた。

(2) Nabil Bank との連携

地方行政組織との連携促進以外にも、プロジェクトでは民間セクターとの連携も模索し、Nabil 銀行からの支援を取り付けている。Nabil 銀行からは、これまで合計9,000 冊の Passbook がプロジェクトを通じて POWER グループに配布された。モチベーターを通じて各 POWER グループに 30 冊ずつ配布した。配布の状況は、表 6.8 に示す通りである。Passbook を受け取った POWER グループメンバー達からは、これまで以上に定期的に貯蓄活動を行っていくモチベーションが高まったという声が聞かれている。



Kavre 郡、Devbhumi Baluwa の POWER グループで使用されている Pass Book

S.	District	No. of	No. of	No. of Distributed		Total
N.		VDC	POWER	Passbook		
			Group	2011	2012	
1	Sindhu	4	36	500	550	1,050
2	Kavre	7	63	1	1,625	1,625
3	Tanahun	3	27	-	870	870
4	Kaski	6	54	-	1452	1,452
5	Syangja	3	27	610	180	790
6	Parbat	4	36	1080	-	1,080
7	Baglung	4	36	1	968	968
8	Myagdi	3	27	810	=	810
	Total	34	306	3,000	5,645	8,645

表 6.8 Passbook の配布数

(3) SMES2 プロジェクトによるプログラム評価

National Planning Commission (NPC)は、国家モニタリング評価ガイドライン(2070B.C/2014)に基づいて、優先順位の高い政府事業の第3者評価を行う。既に実施済み(または現在進行中)のプログラムやプロジェクトの現状やオペレーションの状況、維持管理状況、プロジェクト管理の状況などを中立的に公平にレビューするために、National Planning Commission Secretariat (NPCS)は競争入札を通じて第3者評価者を選定し派遣する。

2014年は、MoFSCの要請を受けて、NPCはPWMLGPを評価することを決定した。

NPCS のモニタリング評価を行う部署は、この評価活動の全般的な管理や調整、監督を担う。この第3者評価は SMES2 の技術的、財政的支援を受けて実施することとなった。NPCS サブ・タスクフォースと SMES2 はこの評価のモニタリングと監督を担務する。

評価の目的は次の通りである。

- ネパールの一般市民に透明性を示すために、DAC 評価 5 項目である妥当性、有効性、効率性、インパクト、持続性を用いてプロジェクトの結果や現状を評価する。
- プロジェクトの効果を最大限にするためにプロジェクトの実施期間や開発パートナーへ提言する。
- 似たようなプログラムやプロジェクトの実施のあり方を改善し、今後のポリシーやプログラム、プロジェクトの策定に反映させるために役立つような教訓を引き出す。

競争入札を経て、Development Resource Centre (DRC)が選抜され、評価のインセプション・レポートを作成した。それに基づいて、DRC は活動を始めており、プロジェクトは情報共有や世帯調査の質問票のテストサイトの選考に関して助言を行っている。

この評価の結果は 2014 年 10 月頃に出る予定である。プロジェクトとしては、この評価が NPC と MoFSC の両方に有益な成果をもたらすことを期待している。

(4) ヒマラヤ保全協会(IHC: Institute of Himalayan Conservation)との連携

本邦 NGO のヒマラヤ保全協会では、JICA の草の根技術協力(パートナー型)の助成金を得て 2011 年 2 月から 5 年間の予定で「生活林づくりを通した山村復興支援プロジェクト」を実施している。同 NGO の活動地域は、当プロジェクトの対象地域でもある Myagdi郡の Jhin と重なっている。そのため、協働の促進と混乱の解消を目指して、同 NGO とは早い時期から連絡を取りあい、情報を共有してきた。OG 等の提供や各種セミナーへの招待も実施してきた。



IHCでは「苗木 100 万本植林」をテーマに活動してきて IHC の植林イベントの様子 おり、その百万本の植林が 2014 年 6 月に達成された。6 月 5 日には Jhin で記念イベントが開催され、プロジェクトからも参加した。

第7章 複製活動/内部化支援

プロジェクトでは、ネパール政府内でのサビハ・モデルの内部化の促進を、PDM の成果 4「サビハ・モデル主流化に向けた活動が促進される」で整理している。ここでは、複製活動支援およびサビハ・モデルの内部化について述べる。

7.1 サビハ・モデルの内部化

DSCWM は、2004 年から DSCWM 内の独自の予算で複製活動として当初2 郡で実施し、現在は11 郡(プロジェクト対象8郡及び Palpa 郡、Gulmi 郡、Argakanchi 郡)まで拡大している。このことは、プロジェクトとしても技術協力プロジェクトの成果が定着している大きな証左となる。しかしながら、複製活動は各 DSCO 所長の裁量で進められるため、実態が把握しづらかった。

2012 年 1 月に中間レビューが実施され、 複製活動への支援と出口を見据えた戦略 を立てることが提言された。そこで、第 4 年次に複製活動の実態を明らかにする「① 複製活動実態把握調査(以下、「複製調査」)」 を実施すると同時に、DSCWMとしてモデ ルの成果を今後どう活用していくか検討す

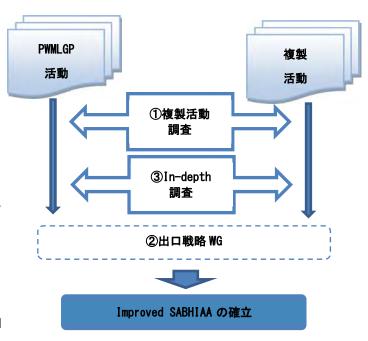


図 7.1 複製活動実態調査と In-depth 調査のアウトライン

る「②出口戦略 WG」を立ち上げることとなった。また、これらの活動と並行して、サビハ・モデルの正史の整理、現行のサビハ・モデルの実施上の問題点、サビハ・モデルの精神がどの程度現場で実施されているかを分析し、出口戦略 WG へ提案する目的で「③In-depth 調査」を実施することとなった。3つの活動の全体像は図7.1のとおりである。

平行して、プロジェクトでは、OG のレビューを行い、CP とも協議を重ね、DSCWM/DSCO 文脈での OG を最終版として改訂することとなった。改訂版 OG はネパール語で作成され、DSCWM の承認を得て印刷の上、DVD とともに関係者に配布された。

出口戦略(内部化戦略)もほぼ1年以上に亘って協議を重ね最終化され、4月上旬に MoFSC に提出され、6月21日に承認された。

7.2 複製活動実態調査

DSCWM 独自の予算で実施している複製活動は、複製活動調査時の 2013 年において 55¹VDC で 実施中・実施済みであるが、各郡での活動は各 DSCO 所長の権限で事業が実施されるため、詳細な情報がカトマンズでは取りまとめられていない状況にある。そこで、実施体制、支援規模、支援上の問題点を DSCO 職員に聞き取る目的で、複製活動を実施している 11 郡で実態調査を行った。OG の手順に沿って作成した質問票に従い、DSCO 所長に対しては個別聞き取り、DSCO-tech はグループ形式で聞き取りを行った。その結果、同じ「サビハ・モデル」を用いた活動でも、実施時期、実施郡によって支援内容が異なっていることが明らかとなった。PWMLGP と複製活動の主な違いは表 7.1 のとおりである。

表 7.1 複製活動の調査結果 (PWMLGP との対比)

項目	PWMLGP	は、(PWMLGF との対比) 複製活動
支援額	NRs. 80,000/年 (3 年定額)	NRs.40,000~100,000/年(年により増減)
支援内容	サブ・プロジェクトと POWER グループ活動	2郡で POWER グループ活動を実施していない
資金の内訳	80% サブ・プロジェクト, 20% POWER グループ 80%の内 20%を緑化事業を実施する ことを推進する	 80% サブ・プロジェクト, 20% POWER グループ 50% サブ・プロジェクト, 25% POWER グループ, 25% 緑化事業 60% サブ・プロジェクト, 20% POWER グループ, 20% 緑化事業 75% サブ・プロジェクト, 25% POWER グループ 100% サブ・プロジェクト等さまざまな支援内訳がある
支援期間 使用している OG	1 年にサブ・プロジェクト、POWER グループ活動共に 1 件ずつ、計 3 サ イクル支援する 2009 年版 PWMLGP OG	1 年にサブ・プロジェクト、POWER グループ活動共に 1 件ずつ支援するが、支援期間は 3~5 サイクルと明確では ない。 10 郡: 2009 年版 PWMLGP OG
モチベーターの 配置	34VDC に 1 名ずつ配置1 年目に研修実施,OJT で指導月例会に参加	1 郡: Kaski OG新規3郡ではモチベーターは不配置給料や TOR が一定ではない研修はなし
実施の流れ	1. Baseline survey 2. VDC Level workshop 3. Ward Level workshop 4. WCC Formulation 5. POWER Group Formulation 6. Orientation to WCC/POWER 7. CBRMP Formulation 8. CRMP Formulation 9. AAP Formulation 10. Sub-project selection 11. Feasibility Study and submission of proposals 12. Selection Committee 13. Contract 14. Implementation 15. Supervision and monitoring 16. Payment 17. Activity Profile	 2. VDC Level Workshop, 3. Ward Level Workshop を実施していない郡が2郡あり 6. Orientation to WCC/POWER グループを実施していない郡が1郡あり、実施していると回答している郡も極めて簡略された形式のオリエンテーションのみ実施 7. CBRMP を作成していない郡が3郡あり、作成の意義が良く分からないと回答する郡も複数あり 11. Feasibility study を実施し、実施可能と判断した案件に基づいて AAP を作成する郡もあり 郡によっては、2. VDC Level workshop~7. CBRMPまで一日で実施する郡が複数みられる サブ・プロジェクト実施中のモニタリング回数は2-3回程度 Activity Profile を作成しない郡が1郡あり

上記以外の特記事項として、複製活動では 1) DSCO-tech やモチベーターに対する研修がない、2)

_

¹ 2014 年時点では 79VDC.

他の機関との連携事例が1件のみ、3) 実施中、DSCO-techのWCCやPOWERグループに対する指導頻度が限られているため、サビハ・モデルの活動でも通常のDSCOの活動と差異がないといった諸点が明らかとなった。

今回の調査結果は 2012 年 12 月 9 日の第 4 回出口戦略 WG で発表され、WG のメンバーや 8 郡の DSCO 所長より既定のルール(OG)に従って実施する必要性が共有され、In-depth 調査実施後、OG の 改訂が行われた。そのプロセスについては、後述する 7.5 を参照ありたい。

7.3 In-depth 調査

複製調査の結果を受け、村レベルの関係者、特に WCCやPOWER グループのメンバー、モチベーター、VDC事務長などにサビハ・モデルのコンセプトがどの程度浸透しているかを把握する目的で PWMLGPと複製活動地域双方の VDC を対象に In-depth 調査を実施し、関係者に対するヒアリングを行った。調査は 2013 年 1 月~3 月にかけて以下の内容で実施された。



In-depth 調査における Syangja 郡での WCC と POWER グループへの聞き取り

(1) 調査対象:

- WCC/POWER グループ
- モチベーター
- VDC 事務長

(2) 調査手法

- WCC/POWER グループ:聞き取り調査、 Spider-web 手法による自己評価、活動地の 現場視察、CBRMP/CRMP等の資料分析
- モチベーター:グループ聞き取り
- VDC 事務長:個別聞き取り

(3) 調査サンプル

- WCC/POWER グループ:無作為に選定した25WCC (全 WCC の 7%)
- ◆ モチベーター:8郡
- VDC 事務長: 25VDC の担当事務長 対象となる WCC は表 7.2 に示す。

表 7.2 In-depth 調査を実施した WCC

衣 7.2 In-depth 調査を実施した WCC			
PWMLGP			
District	sn	VDC	Ward
Cinudunalahak	1	Hagam	1
Sinudupalchok	2	Phulping Dandagaun	4
Kavrepalanchowk	3	Kalanti Bhumidanda	7
Naviepalaticitowk	4	Sarsyunkharka	2
Myagdi	5	Patlekhet	4
iviyagui	6	Piple	5
Poglung	7	Amalachaur	6
Baglung	8	Bhakunde	8
Parbat	9	Barrachaur	1
Parbai	10	Wahaki	4
Kaski	11	Lwangdel	5
Naski	12	Dhampus	6
Cyangia	13	Jagatbhangyang	2
Syangja	14	Kyourebhangyang	3 5
Tanahun	15	Bhimad	5
Tananun	16	Bhanumati	6
	Rep	lication	
Sinudupalchok	1	Jyamire	1
Kavrepalanchowk	2	Birta Deurali	2
Tanahun	3	Tanahunsur	5
Kaski	4	Salyan	6
Syangja	5	Thumpokhara	8
Parbat	6	Banau	9
Baglung	7	Damek	1
Myagdi	8	Arman	2
Gulmi	9	Bajh Kateri	4

In-depth 調査の結果、現場レベルでサビハ・モデルが大いに受け入れられ、評価されていることが分かった。その理由として、以下の3つの点が挙げられた。

1) 住民が自ら選定した活動に対して直接資金援助が受けられること

- 2) 貧困層や女性といったこれまで見過ご されて来た人たちに対しても配慮した 活動であること
- 3) プロセス重視で透明性が高いので不正がない

また、OGがモデルを普及、汎用する上で有効なツールであることも確認された。特に、現場レベルで活動する DSCO-tech やモチベーターにとっては教科書的な存在となっており、サビハ・モデルの主流化の手段として改訂版 OGを作成することの妥当性が立証された。

一方、いくつかの課題もみうけられた。まず、本調査で WCC/POWER グループの組織強化状況を、プロジェクトで導入している参加型評価(Spider-web analysis)の手法で調査した

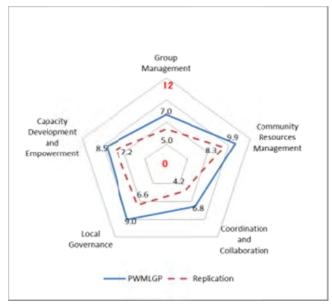


図 7.2 In-depth 調査で実施した 25 サンプルの WCC/POWER の自己評価結果 (平均)

ところ、図7.2にあるとおり、プロジェクトサイトの方が複製活動地より WCC/POWER グループの 組織としての育成度が高く、サビハ・モデルのコンセプトを理解している事が明らかとなった。 新しく複製活動を開始した郡であれば、納得できる結果ではあるが、プロジェクトと複製活動を 同時に実施している 8 郡は同じ DSCO-tech が複製活動も担当しているのにもかかわらず、二者に大きな違いが見受けられる郡が多かった²。

また、プロジェクト対象地においては2年間で約300もの連携事例があるのに対し、複製対象地域では1例しかないことから、サビハ・モデルにおける連携・調整の意義をDSCWMとしてどう考えるか出口戦略WG及び8郡のDSCO所長との会合で議論した。参加者からは、複製活動地では、プロジェクトのようなサポート体制がないことが要因であること、連携案件については、記録していないだけで実際はもっと連携事例があるとの意見があったが、複製活動地においては今後取り組まなくてはならない課題が多いことが共有された。傾向として、モデル導入時の準備不足、計画、モニタリングが弱いなど類似点が多いので、第5年次にフォローすると同時に、改訂版OGではその部分を強化した。

プロジェクト対象地域でも課題はあった。自己評価の 5 つの評価項目は最高得点が 12 ポイントで評価するものであるが、それを 100 点満点に換算した場合、プロジェクト対象地でも全体の 57% の達成状況にあったことを特記したい (複製活動地は 52%)。今回ポイントが低かった、WCC/POWER グループの組織としての組織運営能力や連携・調整能力については第 5 年次において重点的に指導を行った。

OG の主要なプロセスに沿って、今回の調査から明らかになった重要な事項を列挙したのが表 7.3 である。「準備」「情報普及」「組織化」のプロセスでは、POWER グループに充てられた予算で具体的な活動は実施せず、会合に参加した女性たちに均等に分けて配布している(複製)例や、関係者に十分なオリエンテーションを行わないことでその後、活動への住民の参加が得られないなど、現

31

² Kaski 郡と Parbat 郡は、長い協力実績からか、プロジェクトと複製活動では大きな違いは見受けられなかった。

場活動に入る前の「準備」が重要であることが理解されていない傾向がみうけられた。

次に、「計画」では、住民参加による計画策定が要であるプロジェクトであるのにもかかわらず、 全世帯の10%未満の参加者だけで計画を策定した例もあり、事業実施に主眼が行き、なかなかプロセスに重点がおけない状況にあることも分かった。

最後に「Monitoring & Evaluation (M&E)」では、活動が実施された後は主にモチベーターが中心となってサブ・プロジェクトのフォローアップをしているが、WCC/POWER グループの組織強化を支援すること、その一環として公聴会や自己評価を行う重要性についてはその意義がまだ浸透してないところもあると考えられた。

0G の実施プロセス	現状・課題	
246-146-	・DSCO-tech が十分プロジェクトコンセプトを理解していない (複製)	
準備	・モチベーターに対する研修、バックアップが少ない(プロジェクト・複製)	
	・VDC 事務所長に対してオリエンテーションを実施していない (複製)	
情報普及	・Ward レベルでのオリエンテーションは実施されず、住民を集めて、WCC/POWER グループを組織化する場となっている(プロジェクト・複製)	
	・POWER グループ「メンバーが適切に選定されていない(プロジェクト・複製)	
組織化	・WCC/POWER グループメンバーに対するオリエンテーションが実施されていない (プロジェクト・複製)	
	・資源管理にも配慮した見積り・設計が少ない	
計画	・総合的な計画づくりや協調して計画を立てることより、サブ・プロジェクトを実施するための連携が目的化している (プロジェクト)	
	・良い計画づくりには重点が置かれておらず、やるべき工程をこなしているだけ	
	・計画策定時の住民の参加が少ない(プロジェクト・複製)	
実施		
	・サブ・プロジェクト実施中、DSCO-techによる適切なモニタリングが実施されていない	
M&E	・WCC/POWER グループを組織として育成する支援が弱い	
	・公聴会を実施する意義が理解されていない(次年度の支援を受けるために義務付けてあるため、義務として実施している)	
	・プロジェクト終了後、育成した WCC/POWER グループに対する方針・戦略がない(プロジェクト・複製)	
その他	・プロセス重視の活動であるため、モチベーターなくして DSCO-tech のみで実施するのは困難である(複製)。	

表 7.3 OG の実施プロセスにおける課題

() は調査を通して、特に顕著にみられた点である。

この様な課題の原因としては、種々の要因が考えられるが、主要な問題として以下の3点に整理できる。

- 新しく複製活動地として選定された郡においては、DSCO職員をはじめ、コミュニティの住民に対するサビハ・モデルのオリエンテーションが十分に実施されていないため、サビハ・モデルの精神が理解されないまま現場活動が開始されてしまっていた。
- 現場活動の技術的な管理・サポート体制が階層的に脆弱であった。(WCC/POWER グループに

対するモチベーターや DSCO-tech のサポート、モチベーターに対する DSCO-tech のサポート、DSCO-tech に対する DSCO 所長のサポート)

適切なネパール側の予算が割り当てられていない為、質のある活動が出来なかった。

これらの調査結果は第6回出口戦略 WG 及び、8郡の DSCO 所長とも共有され、サビハ・モデルの主流化に向け以下の提案を行い、それに基づきプロジェクトでは必要な活動を実施した。

1) プロジェクトに対し:

- プロジェクト活動においては現場活動に入る前に、DSCO-tech やモチベーターに対する研修を実施しているが、複製活動についてはすぐに現場でのサブ・プロジェクトの実施に入ってしまうため、サビハ・モデルの重要なコンセプトを理解しない傾向が多々見受けられた。また、プロジェクト・複製対象地共に、3 サイクルの現場活動の後、フェーズアウト戦略がなく、プロジェクト終了後、DSCWMが WCCや POWER グループがどうなってほしいかという視点が抜け落ちている。そこで、改訂版 OG ではサビハ・モデルは①準備、②計画、③実施、④モニタリング・評価・見直し、⑤フェーズアウトの流れとし、①準備、⑤フェーズアウトについても重点をおいて記載する。初めてサビハ・モデルを実施する DSCO 所長、DSCO-tech、モチベーター等が理解しやすいように、改訂版 OG の各ステップを実演する内容で視聴覚 DVD を作成した。
- 初めてサビハ・モデルを実施する DSCO 所長、DSCO-tech、モチベーター等が理解しやすいように、改訂版 OG の各ステップを実演する内容で視聴覚 DVD を作成した。

2) DSCWM に対し:

- サビハ・モデルの実施対象地ではモチベーターの雇用を必須とし、定期的な研修や技術的支援 を行うこと。
- プロジェクト終了時までにサビハ・モデルの担当職員を DSCWM 内に任命し、モニタリングを 継続的に実施すること。

7.4 出口戦略 WG

2012 年 2 月の中間レビューでの提言を受けて、「出口戦略ワーキング・グループ (WG)」が組織され、これまで以下の日程で討議が続けられて来た。

	開催日	主な討議内容	
1	2012年6月5日(第3年次)	各メンバーの顔合わせと今後の進め方の調整他	
2	2012年7月30日(第3年次)	WCC と WCF との連携についての可能性の討議	
3	2012年10月12日	複製調査の内容説明および、出口戦略の核となる「OG」改訂の方向性	
		について討議	
4	2012年12月9日	複製調査の結果を共有し、OGの更なる簡素化について討議	
5	2013年3月5日	出口戦略の骨子について討議	

表 7.4 出口戦略 WG のこれまでの討議内容

6	2013年4月26日	In-depth 調査結果の共有と、出口戦略への組み込みについて討議
7	2013年5月8日	出口戦略ドラフト(ver.1)の共有
8	2013年5月31日	出口戦略ドラフトへのコメント等の反映作業
9	2013年9月~12月	関係先への説明、コメント聴取等最終化作業
10	2014年1月	コメント反映版を関係先で回覧して最終確認作業
11	2014年2月	WG メンバーによる最終化及び MoFSC/DSCWM 幹部への説明
12	2014年4月	DSCWM から MoFSC に対して「出口戦略」承認手続き始まる

上記のような経緯でドラフトされた出口戦略は「サビハ・モデル内部化戦略」と改称され 2014 年 2 月に最終化された。その後、MoFSC に稟議書として提出されたが、最終 JCC 会合で 6 月 21 日 に正式承認されたことが報告された。同文書を本報告書に ANNEX-4 として添付した。

7.5 OG

(1) OG の作成

OG は前身プロジェクトから継続してプロジェクト活動の運営基準として作成されてきているものであり、プロジェクトの概要と業務の実施手順、業務に関連するフォーマットで構成されている。現場活動の透明性と効率性を実現するものとして、サビハ・モデルの重要な一要素となっている。これまでプロジェクトの状況に合わせて随時改訂がされてきているが、サビハ2-FU(2004~2005 年)の終了時に、ネパール政府が日本政府による食糧増産援助(KR2)予算でサビハ・モデルの複製活動を実施することを目的に、複製活動用 OG が作成されたものが最終版となっていた。プロジェクトでは、この最終版 OG のレビューを行い、CP とも協議を重ね、以下の点を改訂した。

- 地方行政強化のコンポーネントを追記する。
- プロジェクトの役割分担を見直す(ネパール側の分担を増大)。
- JICA の会計基準を維持しながらも、ネパール政府の方法を準拠する。
- WCC の定義 (Conservation Committee から Coordination Committee) を変更する。 また、改訂にあたっては、以下のことを考慮して執筆を行った。
- 簡潔な表現の英語・ネパール語訳にし、分かりやすい内容とする。
- JICA からの支援ということで、期待過剰気味の住民に対して、プロジェクトの支援範囲を明確にし、不要な混乱を引き起こさないようにする。
- 住民参加型かつ現場での実践を重視するプロジェクトであり、住民の参加が必要不可欠である ことを明記する。
- DSCO-tech の業務実施手順であるため、段階を追って手順を示すと共に、様々な提出書類の一月例報告、プロポーザル、契約書類など、のフォーマットも添付することで執務資料として使用できるものとする。

OG は DSCO 所長からの意見も取り込み最終化され、ネパール語版を 1500 部印刷し、2009 年 12 月から運用を開始した。

2010年1月より DSCO 職員に対する OG オリエンテーションを各郡で実施した。2月からはプロジェクトの普及スタッフと DSCO-tech がモチベーターに対し同様のオリエンテーションを行った後、次のステップとして、DSCO-tech とモチベーターがプロジェクト対象村で VDC レベル、その後 Ward レベルで説明会をカスケード形式で繰り返し実施した。 OG の内容を多くの関係者に丁寧に説明することで、プロジェクトに対する過度な期待を拭うと同時に、プロジェクトの目的を理解し、多くの関係者の協力を得るための基礎が確立された。なお、地方行政強化の観点から、OG は VDC 事務長にも配布、説明を行いプロジェクトへの理解と協力依頼を行った。

(2) OG の改訂

OG に基づいて 8 郡 34VDC で 306 件の WCC サブ・プロジェクトと POWER 活動の計 612 件の 3 サイクル、計 1.836 件が円滑に実施され、OG が有効に運用されたことが実証された。。

サビハ・モデルを DSCWM へ内在化するために、7.2 複製活動実態調査と 7.3 In-depth 調査の結果 を基に省内で運用可能な OG へ改訂を行い、プロジェクト終了までに、省内の正式承認を経て全国 展開への道筋をつけることとなった。以下に留意して改訂作業が行われた。

- DSCO のキャパシティ(人材、予算)を把握した上で事業工程を簡素化し、やるべきことを順 序だてて記載する。
- Kaski 郡 DSCO が作成した複製活動用の OG や DSCWM の業務ルール(文書・積算基準額)を レビューし、DSCO 職員が無理なく実施できる形体とする。
- 地方行政の観点から、「包括的な CRMP」を作成することの重要性、連携・調整の方法を各作業工程で追記する。
- DSCO-tech 自身が自分の業務を振り返り、WCC/POWER グループの育成や支援を十分行えたか 自己評価する活動も追加する。

2013年6月に改訂版 OG のドラフトが完成し、DSCO 所長が中心となってレビューを行い改訂版 OG が作成された。最終版は、2014年5月に DSCWM の承認を受け、業務指針として活用されている。

なお、プロジェクトでは、改訂版 OG をより普及する目的で①改訂版 OG の視聴覚 DVD 作成(手順、技術編)、②改訂版 OG の印刷(500 部)、③全 DSCO 所長対象のサビハ・モデル研修の実施を行った。

第8章 プロジェクト運営

8.1 JCC 会合

これまでの JCC で協議された内容等について以下に整理する。

表 8.1 JCC の開催日程と主な議題

回数	開催日時	主な議題や会議結果
第1回	2009 年12 月3日	プロジェクトの背景と概要
		・ 実施方法
		・ MoFALD との連携
		・ PDM0 の改定を含むプロジェクトの詳細計画内容
		・ インセプション・レポートの承認
第2回	2011 年 5 月 12 日	・ プロジェクト進捗の把握
		・ PDM1.8 版の承認
		・ 債務救済基金のサビハ・モデル複製事業への適用に関
		する検討
第3回	2012 年 2 月 7 日	・ プロジェクト活動の進捗報告
		・ 中間レビュー評価結果の発表、共有、協議。
第 4 回	2012 年 9 月 11 日	これまでの進捗状況(チーフアドバイザー)
		・ 第4年次の活動内容 (CP/デスク・オフィサー)
		・ 出口戦略 WG の進捗状況 (計画課長)
		・ 意見交換
		*新任の MoFSC 次官の K.C. Paudel 博士が議長
第 5 回	2013 年6 月14 日	・ 第4年次の進捗報告(計画課長)
		・ 出口戦略 WG の戦略案の説明 (計画課長)
		・ 第5年次の活動内容案説明(チーフ・アドバイザー)
		· 意見交換
		*Paudel 次官が JCC 前日に異動となり、PWMLGP の
		Project Director である Harihar Sigdel 氏 (MoFSC、Foreign Aid
## c	2012 / 0 24	Division の Chief) が議長
第 6 回	2013 年9 月24 日	・第5年次の活動内容案の説明
		・ 出口戦略 WG の戦略案の説明 ・ 意見交換
		·= · · · ·
第7回	2014 年 4 月 18 日	*新任となった次官の Ganesh Josh 博士が議長。 ・ プロジェクト活動の進捗報告
先 / 凹	2014 平 4 月 18 日	・ クロジェクト活動の進捗報告 ・ 終了時評価果の発表、共有、協議。
		・ 於り時間無の無衣、共有、励識。 *なお、PDM 改訂 (Ver.2.0) については、2014 年 3 月に JCC
		**なる、PDM は訂 (ver.2.0) については、2014 年 3 月に JCC メンバーにより合意ミニッツ署名済み
第0 同	2014 年 7 月 3 日	・プロジェクトの最終報告
第8回	2014 年 / 月 3 日	・フロンエクトの取於報告 ・サビハ・モデル複製事業の実施と来年度計画の発表
(最終)		・リレハ・モノル 仮衆争耒の夫肔と米干及計画の発衣

JCC 開催に関連して、当プロジェクト・ダイレクターが第 2-3 年次に掛けて空席の期間が少なからずあった、ということを特記したい。これは、RD では「MoFSC の Planning and Human Resources Division 担当の Joint Secretary(次官補)」となっているが、初代のダイレクターが多忙を理由に他の次官補に移譲したものの当該次官補が異動となったため、後任の決定までに時間を要した。その後、2013 年 10 月に同ポストに着任した Mukunda Raj Ghimire 次官補がプロジェクト・ダイレクターを務めたが、同次官補は 2014 年 5 月に他の省に異動された。 MoFSC では、DSCWM による出口(内部化)戦略が既に策定され承認されていることから、今後は DSCWM 主導で出口(内部化)戦略に基づく活動が実践されていくものとして、後任は DG が担うとの考えである。

8.2 中間レビューと終了時評価

(1) 中間レビューおよび「地方行政情報収集・確認調査」への対応

当プロジェクトに対して、中間レビューが 2012 年 1 月に、終了時評価が 2014 年 4 月にそれぞれ 実施された。また、2013 年 3 月には「地方行政情報収集・確認調査」が実施され、地方行政との連携部分についての提言があった。それぞれの調査結果の詳細は、各年次の業務完了報告書に詳細を 記しているので、それらを参照頂きたい。ここでは、中間レビュー調査時、および「地方行政情報 収集・確認調査」時に当プロジェクトに対して提言された事項とその対応を概説する。

中間レビュー	(1)サビハ・モデル複製事業の広報
1 14,7 2 =	1) ネパール側関係者によるサビハ・ モデル複製事業の全国規模拡大へ
	向け、その経験や有効性を明確に広報していくことが重要である。以下の
	事項がプロジェクト活動に含まれることを提言する。
	2) 地方組織を巻き込みに成功している WCC 活動の優良事例や教訓を収
	集分析する。
	3) サビハ・ モデル複製事業広報用パッケージ(DVD、パンフレット、
	事例集等)を作成する。
	4) サビハ・モデル複製事業を広報すべく DSCWM がワークショップ、セミ
	ナー、シンポジウム等を実施する際、プロジェクトは同局を支援する。
地方行政情報収集・	(1) サビハ・モデル複製事業の広報
	土壌保全局内に留まっているサビハ・への十分な理解を、森林省内で更
確認調査	に促進・定着させる働きかけを行う。

<対応>

2012 年 5 月の第 1 回全国セミナーの実施、2013 年 12 月の課題セミナーを実施し、これらの場で優良事例を報告した。また、ホームページ開設、森林省内での会合等での広報等に努めた。2014 年 5 月に予定した第 2 回全国セミナーでは、優良事例を紹介した。加えて、広報用パッケージを第 4 年次でドラフトし、第 5 年次を通じて作成した。森林省傘下の 5 地域森林局で実施された会合時にサビハ・モデルの広報を DSCWM と協働で行った。

中間レビュー	(2) サビハ・ モデル複製事業への支援
116,5 = -	1) サビハ・ モデル複製が全国に拡大するためには現在進行中の複製事業か
	│ら得られる教訓を生かすことが肝要である。以下の活動はまた、本プロジェク │
	トの上位目標を達成する上でも付加すべきものであると考える。
	2) ネパール政府によるサビハ・ モデル複製の拡大に向け現実的な方策を模
	索、分析する。
	│3) サビハ・ モデル複製オペレーションガイドラインを本プロジェクトと複│
	製事業の経験、教訓を基に改訂する。
地方行政情報収	(2) サビハ・ モデル複製事業への支援
	│現在、森林省土壌保全局の主導でサビハ・の複製プロジェクトが実施されてい│
集・確認調査	│るが、WCCが上手く機能せず、また予算についてもセクター省庁からの交付金│
	│のみに依存してしまうなど、地方行政強化というコンポーネントの技術移転が │
	│上手く図られていない状況である。今後は特に複製地域において、WCC・VDC │
	間の連携を側面的に支援する。

<対応>

DSCWM と MoFSC/MoFALD がメンバーとなる出口(内部化)戦略策定作業を継続的に支援・指導し2014年2月に最終化した。改訂された OGには、VDCと WCC、WCF 相互間の連携の重要性を強調している。

(3) MoFALD との連携 中間レビュー MoFALD、DDC を本プロジェクトに更に巻き込むべく現場レベルにおける更なる 経験の共有を図り、連携を促進する。LGCDP に関連が深い他の JICA プロジェク トとの情報共有も望まれる。 (3) MoFALD 連携緩和 地方行政情報収 地方行政との連携から、コミュニティ開発分野のプロジェクトへと支援の軸足 集•確認調査 を移す(VDC レベルでの地方行政との連携促進は継続)。一方で、他の地方行政 分野の3案件の専門家チームと協力しつつ、LGCDPへのプロジェクト成果の情報 発信は継続して実施する(可能であれば環境分野の Thematic Group 等にも参加 する)。 (4) MoFALD と MoFSC 間の法律齟齬是正 中央レベルでの働きかけとしては、MoFALD・MoFSC 間に法律上の齟齬(例えば、 村の森林利用について、森林省の Forest Law では Community Forest Users Group (CFUG) が管理することになっているが、MoFALD の Local Self-governance Act では VDC が管理することとなっている) が生じており、両省庁間の連携の阻害 の一因となっていることから、法改正を含めた調整作業への提言・解決促進を

<対応>

郡レベルの DWC 会合では LDO が議長役を務めるなど、DDC 事務所や他の関連機関を巻き込んだ活動を促進した。また DWC 会合の場で現場訪問を実践するなど、VDC や WCC/WCF との交流も効果を発揮している。また、各郡の LDO には全国セミナーや課題セミナーには、MoFALD 関係者の出席を得ている。バンコクでの RECOFTC 研修にも MoFALD 関係者の参加を得た。加えて、他のJICA 地方行政系のプロジェクトとの情報交換を日常的に行った。MoFSC と MoFALD 間の法的矛盾については JCC の場で対話を提案した。

中間レビュー	(4) 現場レベルの協働 1) サビハ・モデル複製の推進にとってWCC が資金源に適切にアクセスできることは極めて重要である。現状をかんがみて以下の取り組みが必要と考える。 2) 集落、VDC、DDC 間の連携を図り、郡や VDC レベルの計画策定プロセスにWCC や POWER グループ支援のため適切な資金源の調整を取り入れること。DDC 会合は更に効果的な調整の場として有効活用が可能である。 3) 集落レベルの総合計画を策定する際にWCCによる地域資源管理計画との調和化を図ること。そのために、地域の森林グループ等関連したグループとの連携が集落内で図られることが理想的である。 4) WCC の計画の質を向上し、より一層、外部からの資金源を確保させるべく、OG の改訂を行うこと。(例:地域資源管理計画の改善、潜在的な組織による資金提供サービス・リストの添付等)
地方行政情報収	なし
集・確認調査	

<対応>

上述のように DDC レベルでは LDO を巻き込んでの連携を促進しており、年 2 回の DWC 会合の場だけで無く、他の会合時などにも情報を共有するよう DSCO に指導している。LDO など関係機関の郡所長が現場訪問することで VDC レベル関係者との交流が実現した。VDC レベルでは、ワードの開発計画である CRMP の再策定時に、VDC 事務長、WCF メンバー、ソーシャル・モビライザーが協働で作業することで、ワードを代表する計画造りが進んだ。改訂版 OG では VDC、WCF、

他関連機関との連携の必要性を強調し、計画造りの段階から連携を始めるように改訂している。

(2) 終了時評価時の提言への対応

2014年4月に実施された終了時調査時の提言への対応は、本報告書第1部の第7章7.2終了時評価の提言、提言を受けてのフォローアップ状況に記載した。

8.3 広報活動

プロジェクトでは、これまでの5年間で以下のように各種の広報活動を行ってきた。

(1) セミナー等の開催

時期·頻度	項目	内容	
2012 年	第1回全国セミナー	ドナー、LGCDP、MoFSC 関係者対象にプロジェクト概要、活動状	
5月18日		況についての共有が目的。	
2013 年	SATOYAMA セミナー	JICA 北陸によるフォローアップ調査時に開催。日本の SATOYAMA	
1月28日		状況とネパールでの適用可能性について発表された。	
2013 年	課題別セミナー	「GESI」「参加型アプローチ」「地方行政」の3テーマについてプ	
12月3日		ロジェクトの方法論を開示した。	
2014 年	第 2 回全国セミナー(第 1	プロジェクト終了にあたって、プロジェクトの成果、将来展望	
5月28日	部「ポリシー・レベル会合」)	等について共有した。	

(2) 印刷物などの媒体作成と配布の状況

1) 日本語

時期・頻度	項目	内容
年5回配信	短信	5 年間で 27 回の配信
2011年6月号	JICA 広報誌 "JICA's World" への掲載	和文、英文
2012年3月23日	プロジェクト紹介(勉強会)	専門家対象
2014年1月	JICA 向けホームページ作成	JICA ネパール事務所に原稿を提出

2) 英語

時期·頻度	項目	内容
2012年6月~	WEB サイト	http://www.pwmlgp.org/index.htm
2011年6月号	JICA 広報誌 "JICA's World" への掲載	英語版
2012年5月	広報ビデオ(1)の作成と配布	
2014年5月	広報ビデオ(2)の作成と配布	
2012年5月	ブックレット(1)の作成と配布	A4 カラー
2009年12月	パンフレットの作成と配布	A4 一枚両面

3) ネパール語

時期・頻度	項目	内容
2009年12月	パンフレットの作成と配布	A4 一枚両面
2012年5月	ブックレットの作成と配布	
2012年5月	広報ビデオ(1)の作成と配布	
2012年6月	広報ビデオ(1)の TV 放送	2012 年 6 月、NTV 他
2014年5月	広報ビデオ(2)の作成と配布	
2014年6月	広報ビデオ(2)の TV 放映	2014年6月、NTV他
適宜	ラジオ・ネパールでの放送	森林省の番組
適宜	DSCWM 機関紙への掲載	

第9章 投入実績

9.1 日本側投入

(1) 日本人専門家の投入

日本人専門家の投入一覧表を下記に示す。本プロジェクトは、流域管理、地方行政、住民参加、組織強化、in-depth 調査、複製活動支援、POWER グループ主流化の7分野から構成され、日本人専門家は途中交代者を含め合計8名である。

表 9.1 日本人専門家の投入

氏 名	指導分野	派遣時所属先
寺川 幸士	総括/流域管理	三祐コンサルタンツ
井之前(小林)花	地方行政/in-depth 調査/POWER グループ主流化	三祐コンサルタンツ(補強)
石橋 典子	地方行政	三祐コンサルタンツ(補強)
渋谷 優子	地方行政/複製活動支援	三祐コンサルタンツ(補強)
西垣 智子	住民参加/副総括	三祐コンサルタンツ
菊池 淳子	組織強化/業務調整	三祐コンサルタンツ
平野 幸子	組織強化/組織強化 A/業務調整	三祐コンサルタンツ
佐川 喜裕	組織強化 B/業務調整	三祐コンサルタンツ

(2) 日本人専門家の派遣実績

日本人専門家の派遣実績を下記に示す。自社負担を除く5年間の合計は113.56 M/Mである。

年次 (子算年度) 派遣期間 (人/月)
1 年次 (2009 年) 18.70M/M
2 年次 (2010 年) 16.66M/M (別途自社負担 1.00M/M)
3 年次 (2011 年) 21.10M/M
4 年次 (2012 年) 28.5M/M
5 年次 (2013 年) 28.6M/M
合計 113.56M/M (別途自社負担 1.00M/M)

表 9.2 日本人専門家の派遣実績

(3) 日本人専門家の派遣内容一覧

プロジェクト開始から完了までに派遣された日本人専門家の氏名、指導分野、派遣期間を次ページに示す。

表 9.3 日本人専門家の派遣内容の内訳

		.3 日本人専门家の派遣内容の 	<u> </u>
年次 (予算年度)	氏名	指導分野	派遣期間
	寺川 幸士	総括/流域管理	2009/8/19 - 2009/9/26 2009/10/20 - 2009/12/18 2010/1/6 - 2010/3/8 2010/3/26 - 2010/5/28 2010.6.1-2010.6.15(国内作業)
1 年次 (2009 年)	井之前 (小林) 花	地方行政	2009/11/3 - 2009/12/2 2010/2/1 - 2010/3/2 2010/4/22 - 2010/5/21
	西垣 智子	住民参加	2009/8/26-2009/9/26 2009/10/20 - 2009/12/18 2010/2/28 - 2010/4/17
	菊池 淳子	組織強化/業務調整	2010/1/6 - 2010/2/14 2010/4/9 - 2010/5/28
	寺川 幸士	総括/流域管理	2010.8.16-2010.9.30 2010.11.10-2010.12.20 2011.1.13-2011.3.15 2011.4.15-2011.6.14
	井之前(小林)花	地方行政	2010.8.16-2010.9.14
2 年次	石橋 典子	地方行政	2011.1.18-2011.2.7 2011.4.19-2011.5.27
(2010年)	西垣 智子	住民参加	2010.8.27-2010.9.30 2010.12.1-2010.12.25 2011.5.2-2011.6.10
	平野 幸子	組織強化/業務調整	2010.11.26-2010.12.25 2011.2.1-2011.4.11 2011.4.12-2011.5.11(自社負担)
	寺川 幸士	総括/流域管理	2011.9.7-2011.9.30 2011.10.29-2011.12.22 2012.1.10-2012.2.24 2012.3.5-2012.4.22 2012.5.5-2012.6.18
3 年次 (2011 年)	渋谷 優子	地方行政	2011.12.19-2012.2.10 2012.2.17-2012.3.30 2012.4.17-2012.6.8
	西垣 智子	住民参加	2012.1.11-2012.3.7 2012.4.23-2012.6.18
	平野 幸子	組織強化/業務調整	2011.11.1-2011.12.20 2012.2.26-2012.4.29 2012.5.14-2012.6.18
4年次	寺川 幸士	総括/流域管理	2012.8.28-2012.10.14 2012.11.13-2012.12.23 2013.1.7-2013.2.10 2013.2.18-2013.3.17 2013.3.25-2013.4.28 2013.5.10-2013.6.16
(2012 年)	渋谷 優子	地方行政	2012.8.28-2012.10.12 2012.11.16-2013.1.11 2013.1.21-2013.3.27 2013.4.12-2013.5.19 2013.5.29-2013.6.24

	西垣 智子	副総括/住民参加	2012.11.19-2012.12.25 2013.3.14-2013.4.23 2013.5.9-2013.6.25
	平野 幸子	組織強化 A/業務調整	2012.9.5-2012.9.24 2013.2.18-2013.3.22 2013.5.20-2013.6.25
	佐川 喜裕	組織強化 B/業務調整	2012.9.5-2012.10.16 2013.1.9-2013.2.25 2013.4.16-2013.5.15
	井之前(小林)花	in-depth 調査	2012.12.1-2012.12.12 2012.12.14-2012.12.30(国内作業) 2013.3.30-2013.4.13(国内作業) 2013.4.14-2013.5.1
	寺川 幸士	総括/流域管理	2013.9.6-2013.10.12 2013.11.6-2013.12.15 2014.1.9-2014.2.9 2014.2.17-2014.3.16 2014.3.27-2014.4.27 2014.5.8-2014.6.3 2014.6.15-2014.7.13
5 年次 (2013 年)	渋谷 優子	地方行政/複製活動支援	2013.9.3-2013.10.10 2013.10.21-2013.10.31 2013.11.6-2013.11.15 2013.11.21-2013.12.10 2013.12.23-2014.1.29 2014.2.3-2014.3.14 2014.3.17-2014.4.4 2014.4.7-2014.5.30 2014.6.4-2014.6.13
(2013 +)	西垣 智子	副総括/住民参加	2013.11.5-2013.12.19 2014.3.12-2014.4.15 2014.6.11-2014.7.8
	平野 幸子	組織強化A/業務調整	2014.1.12-2014.3.20 2014.5.10-2014.6.30
	佐川 喜裕	組織強化 B/業務調整	2013.9.6-2013.10.12 2014.4.11-2014.6.2
	井之前(小林)花	POWER グループ主流化	2013.9.2-2013.9.13(国内作業) 2013.9.14-2013.9.23 2013.11.23-2013.11.27 2013.12.2-2013.12.11(国内作業) 2013.3.6-2013.3.31(国内作業) 2014.6.9-2014.6.23

(4) プロジェクト運営にかかる費用

本プロジェクトで投入された現地業務費は下表のとおりである。第1年次から第4年次は精算額、第5年次は精算未確定のため契約額の金額を示す。

表 9.4 日本側現地業務費負担実績

(円)

項目	費目	予算年度						
坦	負日	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年(新積算方式)	※契約額	
一般業務費	傭人費	5,647,141	5,023,367	7,245,418	6,078,599	一般傭人費	2,180,260	
	機材保守·管理費	550,000	382,764	136,609	240,385	特殊傭人費	5,101,640	
	消耗品費	2,833,453	1,046,380	1,529,286	1,308,983	車両関連費	2,154,660	
	旅費·交通費	295,609	118,652	2,221,125	522,587	借料損料	135,600	
	通信運搬費	79,636	106,824	61,943	59,399	施設·機材保守管理費	340,000	
	資料等作成費	43,119	36,351	654,482	61,078	消耗品費	1,105,390	
	借料損料	0	0	0	0	旅費·交通費	1,166,660	
	光熱水料	0	18,428	20,619	23,319	通信·運搬費	120,000	
	人材養成確保費	0	0	0	0	資料等作成費	1,226,100	
	施設·維持管理費	0	49,378	21,836	2,116	水道光熱費	24,000	
	現地研修費	2,523,098	2,030,213	16,678,426	12,217,377	雑費	25,479,026	
	国内活動費	0	0	0	0			
	国内再委託費	0	0	0	0			
	雑費	109,429	0	38,678	39,830			
	小 計	12,081,485	8,812,357	28,608,422	20,553,673	小 計	39,033,336	
供与機材購入費		4,567,000	0	0	0			
携行機材購入費		415,000	0	0	0			
ローカルコンサルタント契約		4,234,000	0	0	1,547,000			
ローカルNGO契約		2,288,000	0	0	0			
工事費		3,481,000	29,201,000	25,942,000	24,076,000			
会議費		55,000	7,000	767,000	1,005,000			
合 計		27,121,485	38,020,357	55,317,422	47,181,673	合 計	39,033,336	

総 計(5年間) 206,674,273

(5) 投入された機材

プロジェクトで投入された機材リストを下表に示す。

表中 22-39 については、購入時点で CP 機関に移譲し、通常業務で有効利用されてきている。他 の機材/車輌については、ネパール事務所がネパール政府側への譲渡手続きを進めている。

表 9.5 投入された機材

No.	購入日	項目	様式	使用場所	状況	金額 (US\$)	金額 (NRS)
1	9-Nov-2009	Notebook PC	NEC versa S3501-F2003DRC	Project (Office(KTM)		1,400	
2	9-Nov-2009	Notebook PC	NEC versa S971-F2102DRC	Project Office(KTM)	Monitor broken	1,230	
3	9-Nov-2009	Desktop PC	NEC NW900 Wide LCD 19"	Project Office(KTM)		1,065	
4	9-Nov-2009	Netw ork photocopy	Image Runner iR 3225	Project Office(KTM)		7,500	
5	9-Nov-2009	Scanner/printer	lmage Class MF4320D	Project Office(KTM)		608	
6	9-Nov-2009	Printer	Image Class MF8180C	Project Office(KTM)		1,760	
7	9-Nov-2009	Fax machine	Canon L140	Project Office(KTM)		465	
8	9-Nov-2009	Inverters	3 KVA On-line Sine ware inverter	Project Office(KTM)	Disposed *1)	3,700	
9	25-May-2010	Digital Camera	Canon Pow erShot A480	Project Office(KTM)			15,000
10	25-May-2010	Digital Camera	Canon Pow erShot A480	Project Office(KTM)			15,000
		Wester	n Region-PKR Office				
11	22-Jan-2013	Honda Generator	EP1800 CX	Project Office (PKR)			63,900
12	9-Nov-2009	Notebook PC	NEC versa S3501-F2003DRC	Project Office(PKR)		1,400	
13	9-Nov-2009	Notebook PC	NEC versa S971-F2102DRC	Project Office(PKR)		1,230	
14	9-Nov-2009	Desktop PC	NEC NW900 Wide LCD 19"	Project Office(PKR)		1,065	
15	9-Nov-2009	Scanner	Image Class MF4320D	Project Office(PKR)		608	
16	9-Nov-2009	Printer	LBP 3500 CANON	Project Office(PKR)		1,285	
17	9-Nov-2009	Fax machine	Canon L140	Project Office(PKR)		465	
18	9-Nov-2009	UPS Backup	2KVA online UPS Backup Fenton	Project Office(PKR)		2,450	
19	25-May-2010	Netw ork photocopy	Image Runner iR 3225	Project Office(PKR)		7,500	
20	25-May-2010	Digital Camera	Canon Pow erShot A480	Project Office(PKR)	Out of order		15,000
21	25-May-2010	Digital Camera	Canon Pow erShot A480	Project Office(PKR)			15,000

No.	購入日	項目	様式	使用場所	状況	金額 (US\$)	金額 (NRS)
		Han	ded over to DSCO	Date of Handover			
22	25-May-2010	Digital Camera	Canon Pow erShot A480	DSCWM, Desk Officer	30-May-2010		15,000
23	25-May-2010	Notebook PC	HP Compaq 510 Notebook PC	DSCWM, Desk Officer	30-May-2010		65,000
24	25-May-2010	Digital Camera	Canon Pow erShot A480	DSCO Sindupalchow k	30-May-2010		15,000
25	25-May-2010	Digital Camera	Canon Pow erShot A480	DSCO Kavrepalnchok	30-May-2010		15,000
26	25-May-2010	Digital Camera	Canon Pow erShot A480	DSCO Kaski	2-Jun-2010		15,000
27	25-May-2010	Digital Camera	Canon Pow erShot A480	DSCO Myagdi	2-Jun-2010		15,000
28	25-May-2010	Digital Camera	Canon Pow erShot A480	DSCO Baglung	2-Jun-2010		15,000
29	25-May-2010	Digital Camera	Canon Pow erShot A480	DSCO Parbat	2-Jun-2010		15,000
30	25-May-2010	Digital Camera	Canon Pow erShot A480	DSCO Tanahun	6-Jun-2010		15,000
31	25-May-2010	Digital Camera	Canon Pow erShot A480	DSCO Syangja	2-Jun-2010		15,000
32	25-May-2010	Notebook PC	HP Compaq 510 Notebook PC	DSCO Sindupalchow k	30-May-2010		65,000
33	25-May-2010	Notebook PC	HP Compaq 510 Notebook PC	DSCO Kavrepalnchok	30-May-2010		65,000
34	25-May-2010	Notebook PC	HP Compaq 510 Notebook PC	DSCO Kaski	2-Jun-2010		65,000
35	25-May-2010	Notebook PC	HP Compaq 510 Notebook PC	DSCO Myagdi	2-Jun-2010		65,000
36	25-May-2010	Notebook PC	HP Compaq 510 Notebook PC	DSCO Baglung	2-Jun-2010		65,000
37	25-May-2010	Notebook PC	HP Compaq 510 Notebook PC	DSCO Parbat	2-Jun-2010		65,000
38	25-May-2010	Notebook PC	HP Compaq 510 Notebook PC	DSCO Tanahun	6-Jun-2010		65,000
39	25-May-2010	Notebook PC	HP Compaq 510 Notebook PC	DSCO Syangja	2-Jun-2010		65,000

Project Office (KTM): Project Office at Kathmandu, Project Office (PKR): Project Office at Pokhara

Total Amount in JPN: About 4.62 Million

DSCWM: Department of Soil Conservation and Watershed Management DSCO: District Soil Conservation Office

(6) 現地での各研修、第3国研修、本邦研修

研修はネパール国内、第 3 国 (タイ国)、本邦でそれぞれ実施された。ネパール国内では 5 年間で合計 28 回、タイ国では 3 回に分けて、日本では 1 回の研修が行われた。各研修については第 4章で述べており、各研修の実施日と参加者の内訳は ANNEX-8 に整理した。

9.2 ネパール側投入

ネパール側のカウンターパート機関は、MoFSC、MoFALD、DSCWMである。DSCWM職員であるプロジェクト対象郡の DSCO および DSCO-tech を含め下記に示す。また、プロジェクトの対象 34 VDC で勤務するモチベーター34 名は第 2-5 年次に亘って DSCWM の雇用であった(第 1 年次後半のみ、JICA 経費で雇用した)。

表 9.6 MoFSC、MoFALD、DSCWM 職員

MoFSC

氏 名	職位	在職期間		
八 泊	4取 1 <u>少</u>	開始	終了	
Mr. Ram Prasad Lamsal	Joint Secretary	Jul., 2009	July. 2012	
Mr. Harihar Sigdel	Joint Secretary	Jan., 2013	July. 2013	
Mr. Mukunda Raj Ghimire	Joint Secretary	Nov., 2013	May, 2014	

^{*1):} Present Pow er back up system of KTM office is on rental contract.

<u>MoFALD</u>

氏 名	職位	在職期間		
1 4	4氏 1立	開始	終了	
Mr. Tirtha Raj Dhakal	Joint Secretary	Aug., 2009	Jun., 2011	
Mr. Bodh Raj Niraula	Joint Secretary	Jul., 2011	Nov., 2013	
Mr. Resmi Raj Pandey	Joint Secretary	Dec., 2013	To present	
Mr. Narayan Bahadur Thapa	Under Secretary	Aug., 2009	Apr., 2012	
Mr. Pashupati Pokharel	Under Secretary	Apr., 2012	Jul., 2013	
Mr. Ramesh Kumar KC	Under Secretary	Jul., 2013	To present	

DSCWM

氏 名	職位	在職期間	
		開始	終了
Mr. Bharat Pudasaini	Director General	Aug., 2009	Aug., 2013
Mr. Pem Narayan Kandel	Director General	Aug., 2013	To present
Mr. Gehendra Keshari Upadhyaya	Planning Officer	Aug., 2009	To present
Dr. Prem Paudel	Desk Officer	Aug., 2009	To present

表 9.7 プロジェクト対象郡の DSCO

郡	氏名	在職開始日	在職終了日
Central Region			
	Mr. Pardip N. Shrestha (Acting)	18-Sep-07	3-Jan-09
Sindhupalchowk	Mr. Niranjan Shrestha	4-Jan-09	2-Oct-12
	Mr. Krishna Ghimire	7-Oct-12	To present
Kavre	Mr. Khruschev Shrestha	31-Dec-08	3-Apr-12
Navie	Mr. Megh Nath Kafle	25-Mar-12	To present
Western Region			
	Mr. Gopal Ram Poudel	28-Dec-08	3-Feb-11
Kaski	Ms. Laxmi Pyari Tapol (Rita)	15-Jan-11	21-Jul-11
Kaski	Mr. Gopal Ram Poudel	21-Jul-11	10-Apr-12
	Mr. Uddhaw Bahadur Ghimire	10-Apr-12	To present
Tanahu	Mr. Megh Nath Kafle	24-May-09	15-Mar-12
Tananu	Mr. Manohar Kumar Shah	16-Mar-12	To present
Syangja	Mr. Shyam Lal Sapkota	18-Mar-09	4-Oct-12
Syangja	Mr. Kamal Prasad Gautam	5-Oct-12	To present
	Mr. Raju Sapkota	4-Jan-09	4-Jan-11
	Mr. Bijendra Kumar Singha	19-Jan-11	13-Nov-11
Parbat	Mr. Raju Sapkota	21-Nov-11	3-Oct-12
	Mr. Puspa Ram Thapa	9-Oct-12	1-Dec-13
	Mr. Ramananda Bhatarai	29-Nov-13	To present
	Mr. Kamal Prasad Gautam	3-Jan-09	31-Aug-10
Baglung	Mr. Binod Gyawali	11-Nov-10	24-Dec-13
	Mr. Niranjan Shrestha	11-Dec-13	To present
	Mr. Lok Nath Sapkota	28-Sep-07	13-Apr-10
Myagdi	Mr. Bharat Babu Shrestha	8-Apr-10	31-Mar-12
	Mr. Diwakar Poudel	2-Apr-12	To present

表 9.8 プロジェクト対象郡の DSCO-tech

As of 5 June 2014

郡	S.N	氏名	職位	在職開始	在職終了	As of 5 June 2014 備考
Central Districts			797 FEE	F-48007H	per reserve a	WID 13
	1	Mr. Mahesh Dhungana	ASCO	Nov. 2010	To present	
Kavre	2	Mr. Nano Narayan Mishra	ASCO	Feb. 2014	To present	
	3	Mr. Shyam Koirala	DSCO-tech	Sep. 2013	To present	
	4	Mr. Resham Dahal	DSCO-tech	From beginning*	To present	
	5	Mr. Rajendra Kumar Shah	ASCO	Jan. 2014	To present	
	-	Bharat Prasad Sapkota Shiva kumar Pokharel	ASCO ASCO	From beginning From beginning	Nov. 2011 Jan. 2014	
	H	Kishor Acharya	ASCO	Oct. 2012	Sep. 2013	
	-	Raju Bhakta Dhusuju	DSCO-tech	From beginning	Jan. 2014	
	1	Amrit Pakhrin	ASCO	From beginning	To present	
Shindupalchok	2	Mr. Shyam Kumar Shrestha	ASCO	Dec. 2013	To present	
	3	Mr. Shiva Kumar Pokharel	ASCO	Jan. 2014	To present	
	4	Mr. Binod kumar-Mandal Nirmal Thapa	ASCO ASCO	Jan. 2014 From beginning	To present Jan. 2014	
	H	Pradip Narayan Shrestha	ASCO	From beginning	Jan. 2014	
Western Districts		Tradip Narayan Onicolia	7,000	1 Total beginning	0d1i. 2014	
	1	Mr Ajaya Karki	ASCO	Dec. 2013	Jun. 2014	Temporary transferred
	2	Mr Bishnu Pokharel	ASCO	Apr. 2012	To present	, , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,
	3	Mr Narayan Prasad Poudel	ASCO	Feb. 2014	To present	
	4	Mr Ganga Ram Mahato	DSCO-tech	Mar. 2014	To present	
	5	Mr Prakash Thapa	DSCO-tech	From beginning	To present	
Kaski	<u>6</u> 7	Mr Shiv Sankar Shah Mr Milan Bhattarai	DSCO-tech DSCO-tech	From beginning Nov. 2011	To present To present	
rvasvi	-	Mr Kubir Bilas Panta	DSCO-tech	Oct. 2010	Apr. 2014	
	-	Mr. Top Bahadur Shrestha	ASCO	Apr. 2010	Apr. 2012	
	-	Mr. Raj Kumar Gupta	ASCO	Apr. 2012	Mar. 2014	
	-	Mr. Jiut Raut Ahir	ASCO	Aug. 2009	Apri. 2012	
	-	Mr. Man Mohan Shrestha	DSCO-tech	Sep. 2006	Mar. 2012	
	-	Mr. Mik Mar Kumar Tamang	ASCO	Apri. 2009	Mar. 2012	
	2	Mr. Hari Prasad Khanal Mr.Hari Prasad Pandit	ASCO ASCO	From beginning From beginning	To present To present	
	3	Mr. Ramkrishna Sapkota	ASCO	Jan. 2014	To present	
Tanahun	4	Mr. Nirmal Thapa	DSCO-tech	Jan. 2014	To present	
	5	Mr. Prakash Giri	DSCO-tech	Nov. 2011	To present	on study leave
	-	Mr. Bidur Nath Sapkota	ASCO	Apr. 2012	Feb. 2014	
	-	Mr. Ram Krishna Sapkota	ASCO	Apr. 2009	Apr. 2012	
	2	Mr.Ishwar Jung Thapa Mr Sajan Labat	ASCO DSCO-tech	Mar. 2012 Dec. 2012	To present To present	
	3	Mr.Lekh Nath Koirala	DSCO-tech	Mar. 2012	To present	
	4	Mr. Raj Kumar Gupta	ASCO	Mar. 2014	To present	
Syangja	-	Mr. Bishnu Prasad Pokharel	ASCO	Dec. 2006	Apri. 2012	
	-	Mr. Narayan Prasad Poudel	ASCO	Sep. 2007	Jan. 2014	
	-	Mr. Shanta Kumar Shahi	ASCO	Aug. 2013	Nov. 2013	
	-	Mr. Kubir Bilas Panta	DSCO-tech	Aug. 2007	Apr. 2010	
	2	Mr. Shree Prasad Yadav Mr. Shambhu Shankar Jha	ASCO ASCO	From beginning May. 2014	To present To present	
	3	Mr. Sanjaya Mishra	ASCO	Dec. 2013	To present	
Myagdi		Mr. Birendra Kumar Mahato	DSCO-tech	Sep. 2011	To present	
-	-	Mr. Ishwar Kumar Shrestha	DSCO-tech	Mar.2013	Apr. 2014	
	-	Mr. Kesari Chandra Paal	ASCO	Mar. 2010	Jan. 2014	
	-	Mr. Prakash Giri	DSCO-tech	Oct. 2007	Nov. 2011	
	2	Mr. Bidur Sapkota Mr. Ramesh Baral	ASCO ASCO	Feb. 2014 Apr. 2014	To present To present	
	3	Mr.Astabhujananda Uppadhya	ASCO	Feb. 2014	To present	
	4	Mr. Prakash Basnet	DSCO-tech	From beginning	To present	
Parbat	-	Mr. Hare Ram Gupta	DSCO-tech	Jan. 2013	Jun. 2014	
Faibat	-	Mr. Binod Kumar Mandal	ASCO	Apr. 2010	Feb. 2014	
	-	Mr. Ram Krishna Rajthala	ASCO	Nov. 2006	Apr. 2012	
	-	Mr. Top Bahadur Shrestha	ASCO	Apr. 2012	Dec. 2013	
	-	Mr. Ram Chandra Poudel Mr. Sudarson Rijal	ASCO ASCO	Aug. 2007 Apri. 2012	Apr. 2012 Dec. 2013	
	1	Ms.Sita Timsina	DSCO-tech	Sep. 2013	To present	
	2	Mr. Sunil Gupta	ASCO	Feb. 2014	To present	
	3	Mr. Shambhu Shankar Jha	ASCO	Feb. 2014	To present	
	4	Mr. Lal Bahadur Oli	ASCO	Apr. 2014	To present	
Baglung	-	Ms. Nirmal Khatiwada	DSCO-tech	Oct. 2010	Jun. 2014	
	-	Mr. Bishnu Shrestha	DSCO-tech	Dec. 2008	Dec. 2012	
	-	Mr. Keshav Chandra Das Mr. Shambhu Kumar Mishra	ASCO DSCO-tech	From beginning Dec. 2006	Sep. 2012 Dec. 2013	
		Mr. Shambhu Kumar Mishra	DSCO-tech	Dec. 2006	Dec. 2013	
				_ 30 300	_ 50 510	

 $^{^{\}star}$ From beginning: Has assinged to Project VDC(s) when PWMLGP has launched in Sep. 2009.

第10章 プロジェクト運営上の工夫と教訓 ■

10.1 中央レベルでの情報発信・協議のための人材配置

前身プロジェクトまではポカラのみに事務所を構え、必要に応じて専門家がカトマンズへ出向いて DSCWM と打合せを行うという形をとっていたが、本 PWMLGP ではチーフアドバイザーがカトマンズを拠点として常に DSCWM と協議しやすい環境にいた。そのため、予算の確保や省内での内在化がしやすかった。遠隔地で地道に良い活動を行ってもなかなか関係者の理解や支援を得るのは難しい。DSCWM/MoFSC 内の動向や理解を促進する上で、中央でしっかりと情報発信、協議を行える人材を配置することが重要であろう。

10.2 ネパール国サビハ案件経験者を中心としたプロジェクトチーム編成

本プロジェクトでは、専門家の大半が以前のサビハ案件の経験者であり、カトマンズ、ポカラ両事務所のローカルスタッフも同様であった。このことは、プロジェクトチーム内でのサビハ・モデルに対する理解を均一化することに役立ち、プロジェクトのスムーズな立ち上げ及びその後の効率的な運営に繋がった。上記専門家には協力隊出身者も含むため、JCC 会合、DWC 会合、VDC レベル・ワークショップ等、日本人専門家が同席する活動についても、ネパール語での進行とし、関係者が各会合での議論に関する理解を深め、意見の言いやすい環境を整備した。

10.3 CP を前面に出すことによるオーナーシップの醸成

本プロジェクトでは、専門家もネパール人スタッフも常に黒子役に徹して DSCO 関係者や住民の活動を後ろから支援する役割を貫いた。プロジェクト対象地を訪問する際は必ず DSCO のスタッフを伴って訪問し、住民との会合は常に DSCO スタッフがファシリテーションするように促し、DSCO が主催するプロジェクト関係者の月例会議もプロジェクトから参加し現場の状況を把握するように配慮した。活動の最前線には常に DSCO スタッフがイニシアティブを取るように配慮された。そのような配慮が、ネパール側の関係者に早い段階から、自身が主体となってプロジェクトを進めている感覚を植えつけ、ネパール政府のオーナーシップの醸成に大いに貢献したと考えている。

10.4 各種活動への関係者の巻き込み方の柔軟な対応

終了時評価でも DWC 会合の意義が高く評価されていたが、DWC 会合が当初予定されていた、郡レベルの関係諸機関との調整の場に VDC 事務長や WCC の代表を途中から参加に加えること、また現場視察を加えることで、参加者に現場の生の声が伝わる側面が加わった。これにより、WCC はさらなるいい活動をしようというモチベーションが高まり、他の WCC の事例を学ぶ機会も持てた。また VDC 事務長には LDO から WCC への支援を進めるようにという声がかかり、VDC のオーナーシップにもつながった。このほかにも、Ward レベルでの各種活動に VDC 事務長の参加を促す、WCF との共同計画策定、複製モチベーターの研修への参加等、プロジェクト開始時点には活動への参加を想定していなかった関係者を活動の進捗、成果の度合いに応じて柔軟に巻き込んできた。

これらは確実に成果を生んだが、これはプロジェクトが CP と普段から密にコミュニケーションを 取っていることで双方に意見を出し合い実現できたものであり、プロジェクトが一方的に決めた ことでないこともよい成果が出た要因の一つと考える。

第 11 章 提言

11.1 プロジェクトの成果の類似 JICA 案件への活用

サビハ・モデルでは、参加型、ジェンダー・社会的包摂、ガバナンス等、本プロジェクト以外でも活用可能な教材や視聴覚資料を開発しているだけでなく、DSCO-tech やモチベーターといったネパール人主導でモデルの実施が可能であることを立証している。PWMLGP 内でその成果をとどめるのではなく、今後ネパールで実施する JICA 案件にこの経験を生かすことでより効率性、有効性のあるプロジェクト実施が可能となると考える。

11.2 内戦・紛争影響国での支援開始のタイミング

本案件は、プロジェクト開始時点では、1~2 年の間に地方選挙が実施され、ward 代議員が選出され、彼ら/彼女らが WCC の核となることが想定されていた。結果として、プロジェクト期間中には地方選挙は実施されなかった。しかし、DSCWM/DSCO との長年の参加型流域管理の経験と実績と相まって、復興支援のプロセスの一環として地方行政強化を WCC を通したコミュニティ・レベルのガバナンス推進と捉えることで、一定の成果を挙げることができた。しかし、内戦・紛争影響国で地方行政の案件を実施する際は、少なくとも地方行政の体裁がある程度整ったタイミングで事業を実施した方がプロジェクトの成果が確実なものとなるだろう。

11.3 国家プロジェクトと個別プロジェクトの位置づけについて

当プロジェクトにおける「地方行政強化」の定義は「コミュニティ・レベルのガバナンス強化」としてデザインされていた。つまり、DSCWM/DSCOが住民主体で流域管理を進める上で、DDC/VDCとの連携を目指したものであった。そのため、MoFALD内の担当部署もDDC/VDCを総括する部門となっていた。その後、中間レビューで、「地方行政強化には、LGCDPとポリシーレベルで連携することが重要」と提言された。そのため、3年次からポリシーレベル連携の活動を強化した経緯があった。しかしながら、この地方行政の定義の拡大化については、省庁の所掌の違いもありCP機関である土壌保全局の理解を得るには困難があった。特にLGCDPはネパール全土をカバーする国家的プロジェクト(75郡3914VDCが対象)であり、それとの連携は8郡34VDCを対象とする個別分野のプロジェクトの影響力を超えたものであったと実感している。

今後、同様の巨大国家プロジェクトとの連携や一翼を担うプロジェクトを形成する際には、当該 プロジェクト間の位置づけや関係者間の合意を明確にしておく必要があると考える。

11.4 雨期など季節的な要素の考慮が必要な活動がある場合の契約時期の配慮

DSCWMでは、低コストな土壌保全対策として斜面への緑化(植林や草地化)を目指している。しかしながら、本プロジェクトは業務開始及び毎年の契約更改のタイミングが、ネパールでの緑化に最適な雨季(7-8月)と重なっていたため、緑化関係のサブ・プロジェクトが殆ど実施出来なかった。このことから、DSCWMに関わらず、植物を扱う活動(環境全般、林業、農業など)が含まれているプロジェクトの場合、活動の時期と契約のタイミングを事前に調整することが望まし

11

11.5 プロジェクト終了後も政府側が利活用可能な自力で活動継続するための資料づくり

本プロジェクトでは、ほとんどの資料をネパール語で作成している。資料作成にあたっては DSCO 関係者も編集段階から関わり現場の声を反映するように心がけた。その結果、プロジェクト関係者は作成資料に愛着を感じており、DSCWM 自身による今後の有効活用や改訂版の作成などが期待出来る。

11.6 CP が異動しても質の担保が可能なプロジェクト・ガイドラインの作成・運用

プロジェクトの運営規範である OG については、プロジェクト開始時に DSCO が複製事業用に使用していた既存の OG を元に作成した。OG はプロジェクトから DSCO/DSCO-tech に対し、その後 DSCO-tech がモチベーターに対しオリエンテーションを行い、プロジェクトに関わる現場レベルの担当者の理解を同じにするべく努めた。34VDC における 306WCC、306 POWER グループの住民活動を円滑に実施することができた要因の一つとして、CP やモチベーターの OG に対する理解度の高さが挙げられる。

また OG 改訂作業においては、プロジェクト終了後に DSCWM が引き続き複製事業で活用できる OG を目指したため、DSCO/DSCO-tech からのフィードバックを取り入れることに注力した。CP の 異動はプロジェクト実施中には避けられないものであるが、こうした OG の作成及び配布のみならず、関係者に対しオリエンテーションを継続していくことで、CP の異動に関わらず OG の一定の質 の担保が可能となる。

11.7 プロジェクト終了後の軟着陸を可能にする活動デザイン

本プロジェクトは合計 5 年のプロジェクトであったが、現場でのサブ・プロジェクト/POWER グループ活動は 5 サイクルではなく、3 サイクルのデザインであった。第 1 年次に、郡レベル、VDC レベルでの会合、WCC や POWER グループの組織化、Ward レベルでの計画策定に時間をかけたことは、CP、住民グループ、そして郡、VDC レベル関係者のプロジェクトに対する理解を深めることに寄与した。また、第 5 年次はプロジェクト終了後も WCC、POWER グループが活動を継続していけるような環境づくり(関係諸機関との連携促進、計画再策定、研修実施等)に注力した。プロジェクト終了直前まで継続的に活動を行うメリットもあるだろうが、プロジェクト期間中に終了後の活動継続を見据えた各種活動を実施し、関係者のキャパシティの面のみならず、気持ちの面でも十分な準備をする時間を持つことは、プロジェクト終了後の住民活動の持続性を確保する上で有益であろう。